待兼山遺跡Ⅳ

—大阪大学豊中地区・待兼山周辺修景整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2008年3月
大阪大学埋蔵文化財調査委員会

待兼山遺跡Ⅳ

—大阪大学豊中地区・待兼山周辺修景整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

大阪大学埋蔵文化財調査委員会 2008.3

はじめに

大阪大学豊中キャンパス（豊中地区）のある待兼山丘陵は、西摂平野をのぞむ緑豊かな高台をなしています。この丘陵上には古墳や須恵器窯跡が存在することがふるくから知られ、1968年に刊行された『豊中市史』にもすでにその記述がみられます。

1983年に大阪大学ラジオアイソトープ総合センター建設用地で弥生時代の集落跡が発見されたことから、丘陵一帯が待兼山遺跡として国の文化財台帳に登録され、周知の遺跡として文化財保護法の適用を受けることとなりました。これを契機に大阪大学では遺跡の調査・保護と建物計画などの適切な調整を図るために、1985年に埋蔵文化財調査委員会を発足させ、そのもとで埋蔵文化財調査室が調査を計画的に実施してきました。

今回の調査は、阪急宝塚線石橋駅から大阪大学キャンパスに至る通称「阪大坂」を中心とした「待兼山周辺修景整備工事」に伴い、大阪大学埋蔵文化財調査委員会が実施したものです。調査では1500年前の古墳とともに800年から700年前の火葬墓群が存在していたことが明らかになり、とくに古墳からみつかった馬形埴輪は大阪府下でも数少ない類例として市民の大きな関心を集めました。出土品の一部は大阪大学総合学術博物館に展示されており、また、地下保存された古墳はその位置がわかるようにタイルで地表表示し、解説板を備えて、市民の方に訪れていただけるように配慮しています。学内のみならず、地域の文化財、歴史資料として学外でも広く活用していただければ幸いです。

遺跡の調査・保護とキャンパス整備との両立はかならずしも容易なことばかりではありませんが、「地域に生き世界に伸びる」という研究教育の理念をかかげる大阪大学にあって、本委員会も地域の文化遺産を大切にしながら、キャンパス内の整備計画との調和を図るべく、今後とも責任をもってその任にあたる所存であります。

2008年3月

大阪大学埋蔵文化財調査委員会
委員長　天野文雄

例　言

1　本書は待兼山周辺修景整備工事に伴う事前調査として大阪大学埋蔵文化財調査室が2005年７月～2006年３月まで実施した大阪府豊中市待兼山町１番５号、大阪大学豊中地区内に所在する待兼山遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査主体は大阪大学（総長：宮原秀夫）である。

3　現地調査および出土品の整理作業は大阪大学埋蔵文化財調査委員会（委員長：文学研究科教授・柏木隆雄（～2006年３月）、文学研究科教授・天野文雄（2006年４月～））の指導のもと、大阪大学埋蔵文化財調査室の助教・寺前直人が担当した。調査の実施にあたっては大阪府教育委員会、豊中市教育委員会から適宜指導と助言を得た。また、施設部をはじめ学内関連部局から多大な御協力があった。とくに施設部のご尽力により、今回みつかった遺構のうち、待兼山５号墳周溝の大半と中世火葬墓の関わる遺構の一部は地中保存することができた。また、調査後、現地は駐輪場となっているが、地表に古墳周溝範囲をタイルで標示し、解説板を設置することができた。

4　出土品の整理作業は埋蔵文化財調査室教務補佐員・柏原龍綱（現智弁学園）が補佐し、写真撮影は寺前が中心となって行った。

5　本書で使用する標高は東京湾平均海面高度を基準とし、図中方位は磁北を示す。なお、この数値は世界測地系第Ⅴ系による。

6　本書の執筆は、寺前、柏原の他、高橋照彦（大阪大学文学研究科准教授）・東影　悠（奈良県立橿原考古学研究所）・西本和哉（奈良大学文学研究科博士後期課程院生）・木村理恵、HH村美沙、中久保辰夫（大阪大学文学研究科大学院生）、大川沙織（大阪大学文学部学生）が行い、分担は文末に記した。

7　本書の編集は寺前が担当した。

待兼山遺跡Ⅳ

—大阪大学石橋団地・待兼山修景工事に伴う埋蔵文化財調査報告書—

目　次

はじめに

例言

第1章　遺跡の環境と調査経過 …… 1

1　遺跡の立地と歴史的環境 …… 1

2　待兼山遺跡におけるこれまでの発掘調査 …… 4

3　調査経過 …… 7

第2章　待兼山5号墳の調査 …… 9

1　調査区の概要 …… 9

2　待兼山5号墳の遺構 …… 12

3　待兼山5号墳に伴う遺物 …… 15

4　待兼山5号墳の調査成果 …… 62

第3章　中・近世墓群の調査 …… 67

1　中・近世墓群の遺構 …… 67

2　中・近世墓群の遺物 …… 72

3　中・近世墓群の調査成果 …… 79

第4章　考　察 …… 81

1　摂津地域における古墳時代中期の煮炊器 …… 83

2　古墳時代中期から後期における円筒埴輪の規格とその変質

－円筒埴輪の4条突帯5段構成化－ …… 95

図版目次

図版1　1　古墳全景1（東から）
2　SK57土層（南から）
3　火葬灰集積土坑（SK31）検出状況
4　SK59土層（南東から）
5　桶形木棺墓（SK60）

図版2　1　調査区全景1（調査前）
2　調査風景1（整備前の阪大坂から）
3　調査風景2（北から）
4　北調査区全景（南から）
5　北調査区西側土層（北半）
6　北調査区西側土層（南半）
7　周溝範囲が地表表示された修景工事後の現地（南から）
8　現地に設置された案内板と活用事業の様子

図版3　1　古墳全景2（北西から）
2　古墳全景3（東から）

図版4　1　古墳周溝NE区（西から）
2　古墳周溝SE区1（南西から）
3　古墳周溝SE区2（南西から）
4　古墳周溝NW区1（東から）
5　古墳周溝NW区2（北東から）
6　古墳周溝SW区（北西から）

図版5　1　旧1トレンチ西側土層
2　旧2トレンチ南側土層
3　旧3トレンチ北側土層
4　旧4トレンチ西側土層
5　古墳周溝NW区埴輪出土状況
6　古墳周溝SE区埴輪出土状況

図版6　1　建物形（11）・馬形埴輪1（4）出土状況（NW区）
2　円筒埴輪（29）出土状況（SE区）
3　馬形埴輪2（6）出土状況
4　SE区における須恵器坏身（63）出土状況
5　NE区における須恵器甕（73）出土状況

図版7　1　中・近世面全景（北から）
2　調査区南西中世遺構検出状況（西から）
3　調査区西壁（南端）
4　調査区西壁（中央）
5　調査区西壁（北端）

図版8　1　火葬灰集積土坑（SK31）
2　SK27
3　SK28

図版9　1　SK57～59全景（南から）
2　SK57土層（南から）
3　SK59土層（南から）
4　SK59全景（南西から）
5　桶形木棺墓（SK60）検出状況1
6　桶形木棺墓（SK60）検出状況2
7　桶形木棺墓（SK60）完掘状況
8　SX30土層（北から）

図版10　馬形埴輪1
図版11　馬形埴輪2頭部と馬曳形埴輪ほか
図版12　建物形埴輪及びその他の形象埴輪
図版13　円筒埴輪（1）
図版14　円筒埴輪（2）
図版15　円筒埴輪（3）
図版16　円筒埴輪（4）

図版17　1　円筒埴輪（5）
2　朝顔形埴輪
3　須恵器と韓式系土器

図版18　1　土師器
2　瓦　器
3　土師器皿類

図版19　1　羽釜とすり鉢
2　軒平瓦
3　陶磁器類

図版20　1　鉄製品
2　銅　銭
3　五輪塔と人骨片

挿図目次

図1　周辺の遺跡……（3）
図2　豊中地区とその周辺で検出された主な遺構と遺物出土地点……（5）
図3　調査風景……（7）
図4　調査区全体図……（10）
図5　調査区土層断面図……（11）
図6　北調査区土層断面図……（12）
図7　古墳周溝平面図……（13）
図8　古墳周溝土層断面図……（14）
図9　人物埴輪（1）……（16）
図10　人物埴輪（2）……（17）
図11　人物埴輪腕内部（1b）……（18）
図12　馬形埴輪（1）……（19）
図13　馬形埴輪（2）……（20）
図14　馬形埴輪（3）……（21）
図15　馬形埴輪（4）……（22）
図16　馬形埴輪鞍部（4c）内面……（23）
図17　馬形埴輪（5）……（23）
図18　馬形埴輪（6）……（25）
図19　馬形埴輪2頭部内面……（26）
図20　馬形埴輪（7）……（26）
図21　鳥形埴輪……（27）
図22　建物形埴輪部位名称……（28）
図23　建物形埴輪1……（29）
図24　建物形埴輪1（11）内面……（31）
図25　建物形埴輪2……（31）
図26　建物形埴輪1（11）の製作過程……（32）
図27　蓋形埴輪……（33）
図28　不明形象埴輪……（35）
図29　円筒埴輪の部分名称……（36）
図30　普通円筒埴輪（1）……（39）
図31　普通円筒埴輪（2）……（41）
図32　普通円筒埴輪（3）……（43）
図33　普通円筒埴輪（4）……（45）
図34　普通円筒埴輪（5）……（48）
図35　普通円筒埴輪の細部……（49）
図36　普通円筒埴輪（6）……（51）
図37　朝顔形埴輪……（52）
図38　円筒埴輪拓本……（57）
図39　須恵器（1）……（59）
図40　須恵器（2）……（60）
図41　須恵器（3）……（60）
図42　土師器と韓式系土器……（62）
図43　中近世遺構の分布……（68）
図44　中世火葬灰集積土坑……（69）
図45　中世火葬墓遺構……（70）
図46　桶形木棺墓……（71）
図47　SX30土層断面図……（71）
図48　瓦器……（72）
図49　土師器皿類……（73）
図50　そのほかの土器類……（73）
図51　陶磁器……（74）
図52　瓦……（76）
図53　銅銭……（76）
図54　鉄製品……（77）
図55　石製品……（78）
図56　池田市石橋2丁目の銅に集積された五輪塔ほか……（78）
図57　摂津地域における韓式系土器の分布……（87）
図58　法量の変化……（88）
図59　猪名川流域における中期後半以降の主要古墳の分布……（97）
図60　猪名川流域における中期後半の円筒埴輪……（98）
図61　猪名川流域における後期の円筒埴輪……（98）
図62　乙訓地域における中期後半以降の主要古墳の分布……（99）
図63　乙訓地域における中期後半の円筒埴輪……（100）
図64　乙訓地域における後期の円筒埴輪……（100）
図65　南山城地域における中期後半以降の主要古墳の分布……（101）

図66　南山城地域における中期後半の
　　円筒埴輪……（103）
図67　南山城地域における後期の円筒埴輪…（103）

表　目　次

表1　円筒埴輪の属性比較……（55）
表2　摂津地域における韓式系土器の
　　集成……（86・87）
表3　造付けカマドを有する住居から出土した
　　煮炊器の様相……（89）
表4　猪名川流域における円筒埴輪の特徴…（104）
表5　乙訓地域における円筒埴輪の特徴……（105）
表6　南山城地域における円筒埴輪の特徴…（106）

第1章　遺跡の環境と調査経過

1　遺跡の立地と歴史的環境

（1）地理的環境

①周辺の地形

待兼山遺跡は大阪府北西部の豊中市、箕面市そして池田市の市境にある刀根山丘陵の北側に所在する。遺跡範囲のほとんどは、豊中市（旧桜井谷村）に属する。刀根山丘陵の北側は待兼山丘陵と呼ばれており、茨木市、吹田市から分布する広い丘陵地である千里丘陵の西端をなす。また、丘陵西側は千里川により、北側は箕面川により分断され、独立した丘陵地を形成している。待兼山は標高77mをはかる。

また、丘陵地は稜線が北寄りに位置しているため、稜線から南側には穏やかな傾斜が長く続くのに対して、北側の箕面市方面では短い急斜面が連続している。また、小規模な開析谷が発達している。

②待兼山遺跡の地形

大阪大学豊中地区、通称豊中キャンパスは待兼山丘陵上に位置し猪名川を西方に望むことのできる場所にある。標高の高い最頂部付近からの眺望は極めて良好で、北の箕面川流域・西の猪名川流域、そして南は大阪湾付近までが一望できる。その丘陵最頂部は豊中キャンパスの北西隅にあり、待兼山と呼称されている。

待兼山丘陵は、かつては尾根や谷からなる起伏に富んだ地形を呈していた。しかし、現在はキャンパスの造成や宅地開発などで丘陵上は大きな改変を受けており、旧地形をとどめる場所は少ないとみられるが、旧医療技術短期大学跡地付近や中山池南側付近は旧地形を比較的とどめているものと思われる。

旧医療技術短期大学跡地は待兼山丘陵の西端に位置する。待兼山の最頂部にあたる部分はその跡地内に存在している。現在は雑木林と遊歩道となっており、北西部、標高45m付近に位置する旧医療技術短期大学本館は改修を受け、現在は修学館と改名され、大阪大学総合学術博物館展示施設として利用されている。

一方、旧医療技術短期大学跡地の南側は東から西に向かってひらける大きな谷地形となっており、待兼山最頂部から谷底に向かい緩やかな斜面を形成している。この谷地形を利用して、上山池・中山池・下山池の三つのため池が造られていた。このうち下山池は豊中キャンパス外に存在しており、宅地開発に伴い埋め立てられた。その後、豊中キャンパス内に存在する二つの池のうち上山池も埋め立てられ、現在は中山池を残すのみとなっている。

（2）歴史的環境

①待兼山の由来

待兼山の名は、新古今和歌集にある周防内侍の「夜をかさねまちかね山の子規雲井のよそに　声ぞきく」で知られる。また、清少納言も『枕草子』のなかで「山は小倉山。三笠山。‥‥まちかね山」と称えている。六帖の歌には「津の国の待兼山のよぶこ鳥なけど今来（いまく）といふ人もなし」と歌われたことでも知られている。現在は開発の進んだ豊中市内に残る数少ない緑地として「とよなか百景」にも選ばれている。

②縄文時代の周辺遺跡

待兼山遺跡周辺における人間の生活の痕跡は旧石器時代に遡る。待兼山丘陵周辺の蛍池西遺跡（22）、蛍池北（宮の前）遺跡（15）、柴原遺跡（17）や五月山丘陵南麓の伊居太神社参道遺跡からナイフ形石器などが発見されている。

縄文時代になっても明確な遺構はみつかっていない。五月山丘陵南麓には石鏃が出土した伊居太神社参道遺跡、石鏃・石匙が出土した京中遺跡がみられる程度である。待兼山丘陵裾の低位段丘では、宮の前（蛍池北）遺跡で石棒が採集され、内田遺跡（12）や豊島南遺跡で後・晩期の土器が、丘陵北麓の瀬川遺跡で前期と晩期の土器が石鏃・石匙と共に出土し

ている。

③弥生時代の周辺遺跡

弥生時代になると大規模な集落が形成され始める。前期では勝部遺跡（33）、小曽根遺跡が拠点的集落として形成され中期まで継続して営まれる。宮の前（蛍池北）遺跡は弥生時代中期に発達した。新免遺跡（31）も大規模な集落であり、方形周溝墓や住居跡などの遺構や遺物が多くみつかっている。また、中期後葉には待兼山遺跡（10）においても集落が形成される。立地からいえば、高地性集落に区分される可能性が高く、その場合は眼下の宮の前（蛍池北）遺跡との関係が想定される。

弥生時代後期になると豊中台地南方の沖積地で、穂積遺跡や服部遺跡、小曽根遺跡などが新たな展開をみせる。とくに穂積遺跡では銅鏃の未製品が出土するなど青銅器の生産に関わる大規模な集落であったことがわかる。待兼山遺跡北方の箕面川流域では弥生時代に属する集落は不明であるが、上流の箕面市如意谷からは突線紐式6区袈裟襷文銅鐸がみつかっており、この地域にも集落が存在した可能性が高い。

④古墳時代の周辺遺跡

古墳時代前期の遺跡は弥生時代後期後半から継続するものが多い。代表的な集落遺跡としては、穂積遺跡、利倉西遺跡、島田遺跡など豊中市域南部の沖積地に立地している。また、猪名川支流の河川ごとに古墳が築造される。箕面川右岸の池田市周辺では前方後円墳の池田茶臼山古墳、銚子塚古墳が出現し、待兼山丘陵でも待兼山古墳（5）が、豊中台地では大石塚・小石塚古墳が築かれる。

中期になると池田市周辺や待兼山丘陵は大規模な古墳が築造されなくなる。その一方で豊中台地の桜塚古墳群（35）に古墳築造が集中し、大塚古墳、御獅子塚古墳、狐塚古墳、南天平塚古墳が築かれる。この古墳群からは多量の武器・武具が出土し、大阪府南部の百舌鳥・古市古墳群との関係が注目されている。

また、古墳時代中期中葉頃には蛍池東遺跡（18）において、大阪府法円坂遺跡や和歌山県鳴滝遺跡の大型倉庫に匹敵する大型掘立柱建物群が検出されていることは注目に値しよう。現状でこの建物群は短期間で消滅するとみられるが、蛍池東遺跡と待兼山遺跡は1kmも離れておらず、桜塚古墳群と共に両者の関係は当地域と中央権力との関係を考えるうえで重要であるといえよう。

ただし、桜塚古墳群も中期後半にはしだいに古墳の規模が縮小し、中期後葉の南天平塚古墳をもって大規模古墳の造営が停止するとみられる。これに対し、中期中葉以降、桜塚古墳群の周辺地域では、小規模な古墳が数多く作られるようになる。蛍池北（宮の前）遺跡、利倉南遺跡、穂積遺跡で方墳・円墳数基が発掘調査でみつかっている。新免遺跡においても帆立貝式古墳を中心に古墳群が新たに形成される。待兼山遺跡でこれまでみつかっている古墳時代中期に属する古墳も、これら共通する背景のなかで築造されていたとみられる。

また、池田市域では古墳時代後期になると前方後円墳の二子塚古墳（4）、大型円墳の鉢塚古墳といった大古墳が再び顕在化する。とくに鉢塚古墳の横穴式石室は猪名川流域のみならず、摂津地域でも抜きんでた規模を誇り、当地域の勢力の大きさを物語る。

千里川水系では新免古墳群に続き、太鼓塚古墳群（6）、新免宮山古墳群（28）が形成されるが、首長墳や大規模な群集墳は発達しない。

また、千里丘陵には5世紀以降、陶邑と並ぶ須恵器生産の一大拠点である千里窯跡群がみられ、待兼山遺跡もその西端の桜井谷窯跡群（23）と近接している。先述の太鼓塚古墳群などからは、陶棺を棺に採用しているものもあり、桜井谷で須恵器を生産した工人集団の奥津城であるかもしれない。

桜井谷窯跡群は6世紀に生産を拡大する。これに伴い千里川沿いに立地する集落遺跡、本町遺跡（26）、新免遺跡などの集落が発達する。これらの遺跡からは不良品を含む多量の須恵器が出土していることから、千里川沿いに須恵器が運ばれ、これらの集落で出荷品の選別がなされた可能性がある。

1．野田塚古墳　2．狐塚古墳　3．石橋古墳　4．二子塚古墳　5．待兼山古墳　6．太鼓塚古墳群　7．野畑遺跡
8．野畑春日町遺跡　9．野畑春日町古墳群　**10．待兼山遺跡**　11．少路遺跡　12．内田遺跡　13．桜井谷石器散布地
14．羽鷹下池南遺跡　15．蛍池北（宮の前）遺跡　16．北刀根山遺跡　17．柴原遺跡　18．蛍池東遺跡　19．蛍池遺跡
20．麻田藤陣屋跡　21．南刀根山遺跡　22．蛍池西遺跡　23．桜井谷窯跡群　24．上野遺跡　25．熊野田遺跡　26．本町遺跡
27．金寺山廃寺　28．新免宮山古墳群　29．箕輪遺跡　30．箕輪東遺跡　31．新免遺跡　32．勝部北遺跡　33．勝部遺跡
34．山ノ上遺跡　35．桜塚古墳群　36．岡町北遺跡　37．岡町遺跡　38．下原窯跡群

図1　周辺の遺跡

⑤歴史時代の周辺遺跡

飛鳥時代以降は、西国街道と能勢が移動が交わる低位段丘上に立地する蛍池北（宮の前）遺跡の盛行が目立つ。当遺跡では楼列をともなった掘立柱建物群が検出されている。中心部は未発見であるが、豊島郡家（郡衙）がこの付近に存在した可能性が高い。千里川流域では飛鳥山田寺系の瓦が出土する金山廃寺（27）が成立し、これに近接する本町遺跡が有力な集落となったとみられる。一方、低地部では湾港機能が整備されていったとみられる。とくに上津島南遺跡では大規模な建物群と共に帯金具が出土しており、官衙的な性格を有する遺跡ではないかと考えられる。

9世紀以降になると、低位段丘上でも最も南端に位置する曽根遺跡が有力となる。当該期において豊中市域では確認できる遺跡数が減少していくようである。また、穂積遺跡などをはじめとする沖積地に位置する集落の営みが活性化し、遺跡数も増加する。

鎌倉・室町時代には、これらの低地部遺跡における水上交通の要所としての繁栄が出土品から推定されている。とくに旧猪名川と神崎川の合流地点付近に位置する庄本遺跡では中国製の白磁や青磁などの貿易陶磁が数多く出土している。また、池田市の神田北遺跡では建物跡が検出されており、後白河院領として開発された呉庭荘との関連が指摘されている。また、室町から戦国時代には豊島郡一帯を掌握した国人池田氏の池田城が五月山丘陵南麓に営まれる。この池田城や豊中市曽根内町に位置する原田城、そして待兼山遺跡周辺にその存在が想定できる刀根山城は、天正六年（1578年）以降の織田信長による荒木村重の有岡攻めの際に最前線として利用されていたことが、『信長公記』などからうかがわれる。刀根山城についての考古学的情報は乏しいが、北刀根山遺跡では掘建柱建物の柱穴や井戸共に16世紀後半頃の備前大甕を使用した埋甕群がみつかっており（図2－B）、その関係が注目されよう。

近世遺跡としては、蛍池東遺跡の南西部にあたる麻田藩陣屋跡（20）があげられる。（寺前直人）

2　待兼山遺跡における　これまでの発掘調査

（1）経　過

待兼山丘陵は考古学研究者の間では戦前から考古資料の出土する地区として知られていた。1983年、理学部ラジオアイソトープセンター建設工事の際に弥生時代の集落跡が見つかり、丘陵一帯が「待兼山遺跡」として遺跡台帳及び遺跡地図に登録されることとなった。また、マチカネワニに代表される、それ以前に遡る第四紀の種々の化石も発見されている。以下では簡単にこれまでの調査状況を概観しておきたい。豊中キャンパス内におけるこれまでの調査では、弥生時代より前に遡る遺構・遺物は検出されていない。しかし、周辺の遺跡からは旧石器時代や縄文時代の遺構・遺物が発見されていることから、今後豊中キャンパス内においてもそうした時期の遺構・遺物が発見される可能性はある。

（2）弥生時代

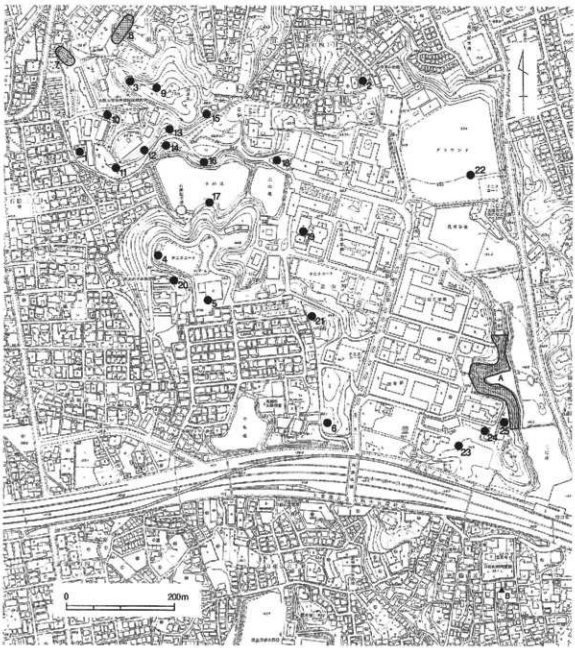
弥生時代の遺物としては、キャンパス南東のモノレール柴原駅近くに位置する理学部ラジオ・アイソトープ総合センター地点（図2－25）や、南東の刀根山テニスコート地点（図2－4）などから、弥生時代中期から後期に属すると考えられる土器や、石庖丁の製作途中品や石鏃などの石器が検出されている。

ラジオ・アイソトープ総合センター地点の遺物は、弥生時代中期に属するものであり、遺構が伴わないことなどから、この地点の西方に位置するやや高い地点より流出して堆積したものであると考えられている（都出編1984）。また、この調査地点北側（図2－A）では、豊中市民病院建設に際して豊中市教育委員会によって調査が行われていおり（豊中市教育委員会編1986：p.34）、弥生土器や石斧などが出土している。ただし、明確な遺構は検出されておらず、ラジオ・アイソトープ総合センター地点付近のやや高い地点から流出して堆積した遺物であると考

えられよう。

刀根山テニスコート地点では壺・甕・高坏・器台などの弥生土器が出土しており、これらは弥生時代後期中頃から終末期に属するものである。これらの弥生土器は埴輪片などと共に出土しており、削平された古墳の盛土中に含まれていたと考えられる。

こうした調査結果を踏まえれば遺構は検出されていないものの、キャンパス内に弥生時代中期から後期まで集落が存在していた蓋然性が高い。



1．**待兼山５号墳**　2．待兼山古墳　3．待兼山２号墳　4．刀根山テニスコート地点（待兼山３号墳）
5．服飾物質研究センター地点（待兼山４号墳）　6．石塁古墳　7．旧医療技術短期大学第１調査地点
8．旧医療技術短期大学第３調査地点　9．待兼山遺物散布地（銅鐸跡）　10．旧医療技術短期大学第６調査地点
11．旧医療技術短期大学第８調査地点　12．旧医療技術短期大学第９調査地点　13．散策路階段地点
14．中山池北岸遺物散布地（須恵器・土師器）　15．旧医療技術短期大学第10調査地点　16．中山池北岸遺物散布地（土師器）
17．中山池南岸銅鐸跡・石塊堆積地点　18．上山池北岸須恵器窯跡　19．上山池南東Ｖ字溝検出地点　20．Ｖ字溝検出地点
21．ラフォレ駐車場地点　22．乳母谷池北岸窯跡　23．古銭出土地　24．理学部ポンベ庫地点
25．理学部ラジオ・アイソトープ総合センター地点　A．待兼山遺跡第２次（弥生土器・石斧）B．待兼山遺跡第１次（磯国時代埋葬群（A．Bは豊中市教育委員会待兼山遺跡調査地点）

図２　豊中地区とその周辺で検出された主な遺構と遺物出土地点

（3）古墳時代

古墳時代にはこの丘陵上にも多くの古墳が営まれたことが判明している。キャンパス北東に位置する大阪大学プール付近には、柴原待兼山古墳（待兼山1号墳）が所在していたことが知られている（図2－2）。当古墳は待兼山丘陵の頂部標高65m付近に立地しており、1916（大正5）年から1922（大正11）年の間に、唐草文帯四神四獣鏡1面、鉄形石1点、車輪石3点、石釧1点が発見されている。現在墳丘は完全に失われており、明確な出土位置や墳形等は不明であるが、藤澤一夫は現地地形等から南面する前方後円墳である可能性を指摘している。

また、1987年に調査されたテニスコート用地内地点（図2－4）点や極限物質研究センター用地内地点（図2－5）から古墳に関連する遺物が出土している（福永編1988）。テニスコート用地地内地点（待兼山3号墳）では、丘陵斜面の堆積土中よりTK208型式の須恵器と共に無黒斑でヨコハケが施された小型の円筒埴輪と少数の2次調整が省略された小型の円筒埴輪が出土している。

極限物質研究センター用地内地点（待兼山4号墳）においても、丘陵頂部下の遺物包含層より、無黒斑の埴輪片が出土している。その構成は他の地点とは異なり、1点のヨコハケがみられる個体を除き、突帯貼付以前に施されたタテハケのみで調整を終えた小型の円筒埴輪片で占められる。同層からはTK47型式と思われる須恵器坏蓋片が出土している。

さらに今回報告する旧医療短期技術短期大学敷地内第2地点では、1998年度の範囲確認調査において古墳が検出された。この試掘調査段階では2つのトレンチにおいて溝状遺構が検出され、溝埋土から多数の埴輪片が検出されている（清家編2001）。

なお、中国道に面する正門の西北側にある、現在「大高の森」として整備されている地区には、過去に前方後円墳とされる石塚古墳が存在したといわれ、埴輪片が採集されている（図2－6）。この埴輪に関してはすでに報告されている通り（福永編1988：pp.29－32）、中期に所属する可能性が高い。さらに、旧医療技術短期大学跡地の丘陵の最頂部付近には、古墳状の高まり（図2－3）があり、現在は待兼山2号墳と呼ばれている。墳丘の裾にあたる場所から中期末葉から後期初頭の須恵器片が採集され、2号墳とはなんらかの関係が想定されている（福永編1988：pp.29－30）。

また、待兼山丘陵の東側に広がる丘陵地には、大規模な須恵器生産地として知られる桜井谷窯跡群が存在しており、豊中キャンパスはその西端に位置する。乳母谷池の北岸（図2－22）や旧上山池北側（図2－18）などで、その窯跡の一部が発見されている。7世紀頃の須恵器は旧医療短期技術短期大学敷地内第3調査地点からも検出されている。

（4）歴史時代

歴史時代に属する遺構としては、土器棺（12）が特筆されよう。土器棺は待兼山最高地点から南へ延びる尾根上で中山池のほとり、標高61m付近より出土している。土師器甕2点の合口土器棺であり、8世紀前半頃に属するとみられる。副葬品等は出土していない。また、土器棺出土地点より北北東80m付近では時期不明の溝状遺構と、鉄製ヤリガンナ1点が出土している（寺前編2004）。

このほかには、中山池付近で人為的なものと推定される集石が発見されているが（図2－17）、その性格は不明である。しかし、過去、旧上山池南東側（図2－19）や刀根山登付近（図2－20）でV字状の溝が検出されたことや、見晴らしのよい立地条件なども考えると、山城などの施設が中世に存在していたと考えることもできよう。待兼山丘陵付近には、先述したように戦国時代には刀根山城が置かれたとされている。こうしたことから豊中キャンパス内におけるこれらの遺構が刀根山城に関連するものである可能性も考えられる。このほかにも待兼山の最高所西の地点（図2－9）で須恵器、中山池北岸（図2－14）で須恵器や土師器が採集されている。また、それらより時代が下るが、理学部南東の土壇状の高まり（図2－23）からは寛永通宝が採集されている（福永編1988：pp.29－32）。（寺前直人）

3　調査経過

（1）調査の契機

2005年に豊中キャンパス内の環境整備を目的とした「待兼山周辺修景整備工事」が計画された。計画は豊中キャンパスから阪急宝塚線に向かう坂道（通称阪大坂）の拡幅と、入口部分の環境整備および駐輪場の新設を主眼としていた。とくに後者の駐輪場設置予定範囲は旧医療短期技術大学敷地内にあたる。この付近は1998年度に実施した試掘調査（清家編2001）において古墳周溝とみられる遺構を地表下0.9～1.3m、標高約44.5m付近で検出しており、修景工事に伴う土地の平坦化や外灯設置に関わる工事により、これらの遺構が破壊される可能性があった。そこで2005年5月25日に開催された埋蔵文化財調査委員会での協議をふまえ、古墳の存在が予想される約600㎡の発掘調査と修景工事に関わる周辺の調査に着手した。

（2）調査の経過

現地調査は2005年7月26日に着手した。まず、表土30～50cmをバックホーにより掘削し、その後、人力による遺構掘削に進めた。調査開始直後の7月28日には調査区南東付近の地表下50cmにおいて、須恵器片（図39－63）が検出された。これは後に判明することであるが、調査地点における遺構面は南東が高く北西に下がる地形であり、結果として南東付近では予想よりやや浅い深度で遺構が検出されるに至ったのである。

その後、過酷な猛暑に悩まされつつも、人力掘削による調査を進めていった。造成土を除去した後の包含層中には1cm四方以下の白色粒が混じることがあった。当初この性格は不明であったが、後に被熱した人骨細片であることが判明する。調査開始後9日目（8月8日）には、当初近現代の攪乱と思われた黒褐色層を除去する過程で瓦器の出土が確認された。これにより、当初、遺構面は古墳時代面の一面

図3　調査風景

であるという認識であったが、古墳削平後に堆積した土砂の上面に中世の火葬墓群が営まれていることが判明したのである。これらの発見により調査計画は大幅な見直しが必要となった。中世遺構面の精査を開始し、2次的堆積とみられる炭や骨片の混じる浅い窪みと共に、火葬灰集積遺構1箇所、被熱遺構が4箇所以上で検出されることになった。結果として中世遺構面の全貌が明らかとなったのは、まだ残暑の厳しい9月14日、調査開始から30日がたった頃であった。

次に課題となったのは、1998年の試掘調査において確認していた待兼山5号墳の周溝範囲とその残存状況である。各所の攪乱のため周溝の確定に手間取りながらも10月前半には直径15m程度の円墳であり、墳丘盛土のほとんどは削平されていることが判明したのである。

以上のような成果をふまえ、10月13日には記者発表を行い、続く15日には現地説明会を行った。現地説明会当日はあいにくの雨天となったが、それでも200人近い見学者が現地にこられた。その後は工事工期に迫られながら古墳周溝の調査を土日、昼夜を問わず進めることとなった。5号墳の調査が終了したのは朝晩の冷え込みが厳しくなり始めた11月8日、調査67日目のことであった。

また、遺構の分布および深度をふまえ、施設部と駐輪場等の建設に伴う掘削および植栽範囲を協議し、中世の火葬墓2基、火葬灰集積遺構1箇所、古墳の周溝の大部分を現地に地中保存することができた。

(3) 調査参加者

調査は寺前直人が担当し、西本和哉、青木美香、戸根比呂子、今西康子、木村雅美、磯村隆弥、北山真也、竹内結、藤原光平、石井智大、田中由理、東影　悠、吉田知史、中久保辰夫、横田真吾、酒井将史、木村理恵、古谷暢也、村田　肇、佐藤瑠衣、谷川友里恵、金澤雄太、友田智津子が参加した。整理作業は寺前と柏原龍嗣の指導のもと、西本、戸根、木村（雅）、吉田、東影、中久保、谷川、金澤、藤原のほか、田中智子、入江初佳、近藤麻美子、山本明奈、岡村早紀、仲田有里、松山あい子、松本　彩、安原早恵、木戸紘子、椎野文香、西堀栄子、藤田佐代美、神原優介、梅田政志、高松雅文、高上　拓、田村美沙、高塚沙知、森　葵がこれに参加した。

(4) 謝　辞

本調査および整理作業を遂行するにあたり、多くの方々から援助を受けた。まず、調査の計画と実施にあたり、大阪大学施設部長大谷晃一氏、同企画課長田代文彦氏、同企画課総務係長中嶋昌士氏・西川恵司氏ならび同整備課長馬久地敦昭をはじめとする整備課の皆様には調査と建設計画の調整に尽力いただいた。また、豊中市教育委員会社会教育課文化財保護係には調査に関する行政的な指導を与えていただいた。煙害の川組には現地作業に関する便宜をはかられた。

また、出土品の整理作業を遂行するにあたり、市本芳三、小栗明彦、清水　篤、清家　卓、高橋克壽、橋田正徳、藤田三郎、和田一之輔の各氏には資料の実見や様々な有益なご教示をいただきました。記して謝意を表します。　（寺前直人）

参考文献

清家章編　2001『待兼山遺跡Ⅲ』大阪大学埋蔵文化財調査委員会
都出比呂志編　1984『待兼山遺跡』大阪大学
寺前直人編　2004『大阪大学埋蔵文化財調査年報』1、大阪大学埋蔵文化財調査委員会
豊中市教育委員会　1995『豊中市埋蔵文化財年報』3
豊中市教育委員会　1996『豊中市埋蔵文化財年報』4
福永伸哉編　1988『待兼山遺跡Ⅱ』大阪大学埋蔵文化財調査委員会

第２章　待兼山５号墳の調査

１　調査区の概要

（１）地形と層位

調査地点は現地表面高が標高45.5mであり、東側に位置する待兼山頂部からは約30m低い地点にあたる。巨視的にみると千里丘陵の最西端に位置し、現猪名川まではさらに西へ約２km、猪名川支流の箕面川へは北西へ約200mと刀根山（待兼山）丘陵から下った地形変換点に位置するといえよう。

先に述べたように当地点では1998年度の試掘調査において古墳周溝とみられる遺構を地表下0.9～1.3m、標高約44.5m付近で検出しており、修景工事に伴う土地の平坦化および外灯設置に関わる工事により、これらの遺構が破壊される可能性があった。そこで大阪大学施設部との協議の結果、工事の影響が予想される地表下1.5mまでの遺構範囲を確認するために、調査を実施した。

調査区は南北28.5m、東西26.5m、面積572㎡である（図４）。調査開始前段階の現地表高は標高45.5mほどであった。また、周辺地域については1998年度の試掘調査により大幅な撹乱がおよんでいたことが予想されたが、修景工事に伴う掘削範囲に該当する調査区の北側にも南北22.6m、幅5.0mのトレンチを設置し土層関係の確認を行った（図６）。結果として地表下0.2～0.7mまで現代の造成土が検出され、それ以下は地山面で構成されていることが判明している。

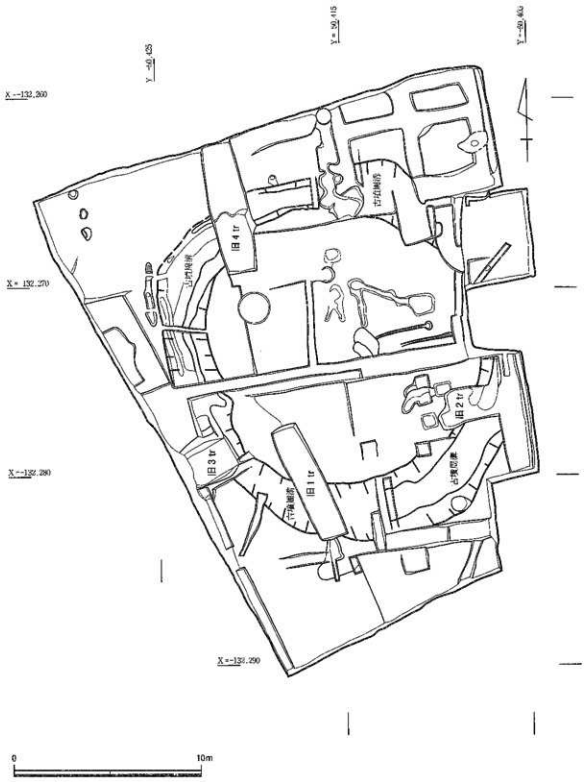
調査区内の土層関係について、図５を参照に比較的覆土が残存していた調査区南西を中心に確認しておこう（図版７－４～６）。調査区全体において、地表下0.5～0.9mの範囲は現代の撹乱層であった。第１・２・４層は染付などを含む近世の覆土である。後述するSX30はこの段階で掘削されたとみられる。第６層は後述する中世火葬墓群が営まれた最終面を形成するとみられ、第６～８層は多数の骨片と炭片を含む暗褐色系の土層である。ただし、図５の南壁土層図よりみてとれるように第６層は西端より約９mの地点までは薄く続くものの、それ以東では認められない。同様の状況は調査区北半でもみられ、これらの範囲では古墳周溝と中世以降の遺構が同一面で検出されており、とくに北端では多くの中世遺構は削平されていると予想される。

また、第９～11層までは埴輪片含むことから、古墳築造後に堆積した覆土であると考えられる。第15層は古墳築造のベースとなった地山であり、調査区南西では標高43.6m、調査区西壁で最も低い箇所では標高43.3m、一方、調査区南壁東端では標高44.7mと約1.5mの比高差が認められた。つまり、古墳築造時の地形は東側が高く西側が低く、およそ８度の緩斜面を呈していたと考えられる。

（２）５号墳の検出状況

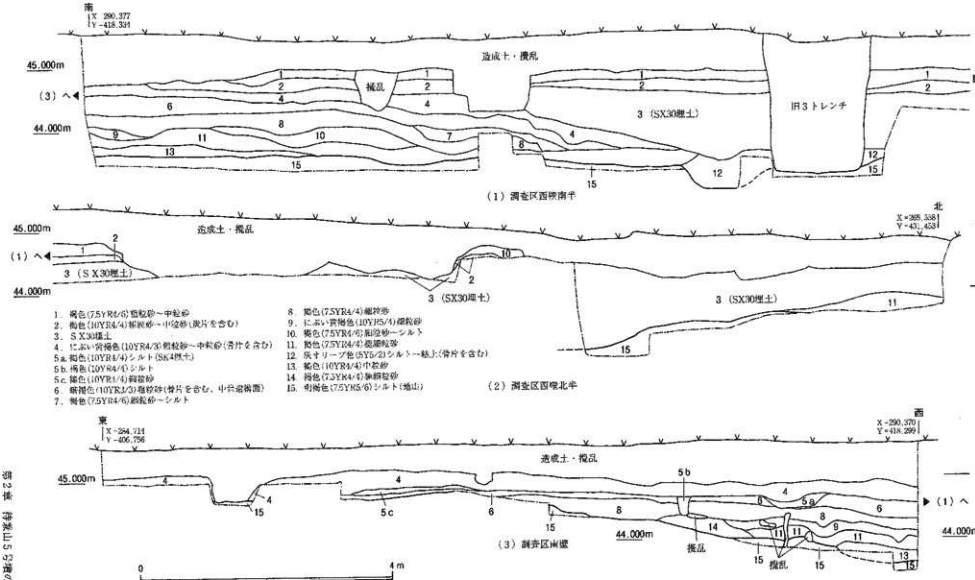
また、調査区南西半では後述する中世遺構面の下から遺構面が浅い調査区北東側では中世遺構面と同一面から1998年度の試掘調査で確認されていた待兼山５号墳の周溝が検出された。試掘段階での推定に基づき当初は一辺10m程度の方墳周溝を予想して調査を進めたが、予想外に周溝検出範囲が広く、またゆるやかに円弧をえがき周溝がカーブしていくことが、しだいに明らかとなった。

結果として直径15m程度の円墳であることが判明した。周溝規模は箇所によって大きく異なるが、最大で残存深度は0.5m、幅は３mであった。周溝埋土の上層からは多数の埴輪片が検出されたが、須恵器の出土は極少量にとどまっている。須恵器型式はほぼTK23型式期に属する。また円筒埴輪は少数の静止ヨコハケをもつ個体と多数の１次調整のみにとどまる無黒斑のものであった。これらの状況から古墳の築造は５世紀後半であると推定される。これは後述する埴輪の編年観とも矛盾しない。それでは調査の詳細について報告していこう。　（寺前直人）



Y=-50.425
Y=50.415
Y=-60.400
X=-132.260
X=-132.270
X=-132.280
X=-132.290
旧4tr
旧3tr
旧1tr
旧2tr
0
10m

図4　調査区全体図



1. 褐色(7.5YR4/6)粗粒砂～中粒砂
2. 褐色(10YR4/4)細粒砂～中粒砂(炭片を含む)
3. SX30埋土
4. にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂～中粒砂(骨片を含む)
5a. 褐色(10YR4/4)シルト(SK4埋土)
5b. 褐色(10YR4/4)シルト
5c. 褐色(10YR4/4)細粒砂
6. 暗褐色(10YR3/3)粗粒砂(骨片を含む、中粒砂層面)
7. 褐色(7.5YR4/6)細粒砂～シルト
8. 褐色(7.5YR4/4)細粒砂
9. にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂
10. 褐色(7.5YR4/6)粗粒砂～シルト
11. 褐色(7.5YR4/4)粗細粒砂
12. 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト～粘土(骨片を含む)
13. 褐色(10YR4/4)中粒砂
14. 褐色(7.5YR4/4)細細粒砂
15. 明褐色(7.5YR5/6)シルト(地山)

図5　調査区土層断面図

2　待兼山５号墳の遺構

（１）周溝検出に至る過程

掘削は調査区南半から開始した。また、1998年度試掘調査で確認されていた第２調査地点第１トレンチ（以後、旧１トレンチと呼称）と同第２トレンチ（以後、旧２トレンチと呼称）を再掘削し（清家編2001：pp.14－22）、層序関係および遺構深度を確認したうえで調査を進めた。調査開始直後には旧１トレンチと旧２トレンチ間の周溝層部より須恵器（図39－63）が検出された（図版６－４）。また、試掘調査第２調査地点第３トレンチ（以後、旧３トレンチと呼称）および第４トレンチ（以後、旧４トレンチと呼称）もわずかながら周溝と接していることが判明した。そこで、既掘の４トレンチをそれぞれ区画として利用する。旧１－２トレンチ間周溝部分をSE区、旧２－３トレンチ間のそれをNE区、旧３－４トレンチ間のそれをNW区、そして旧４－１トレンチ間のそれをSW区と命名し、以下の事実報告を進めていきたい。なお、周溝SW区およびSW区南端部分については検出深度が深く、修景工事の影響が及ぶ可能性がないことが判明したので、今回の調査では埋土の掘削は行っていない。また、旧２トレンチから北側のNE区についても直上に形成されている中世遺構（SK31）の保存が決定したため、その下層に遺存するとみられる周溝部分については未掘である。したがって、以下で報告する埴輪の多くはNW区およびSE区そしてNE区の一部から出土している。

（２）周溝の状況

検出された周溝は残存していた最大幅3.0mであり、やや不定形ながら内径15m、外径20mの円形を呈する（図版３）。注目されるのは東西における周溝底高の著しい差である。東側が高く、西側が低いのだ。最も高い東側部分では標高44.54m付近で周溝底が検出されているのに対し（図８のB、図版５－２）、西側では標高43.28m付近で周溝底が検出されている（図８のE、図版５－３）。その比高は実に１mをこえる。同様の様相はNW区およびNE区でも認められ、NW区のもっとも西に設置した土層観察用アゼ（図８のD）でも周溝底は標高43.38mに達する。一方、NE区東端では周溝埋土自体がほとんど削平されていたが、周溝底は標高44.31m付近であるとみられる。

先に紹介したとおり、当古墳は丁里丘陵の西端に位置する待兼山頂部から急激に扇状地性低地にむか

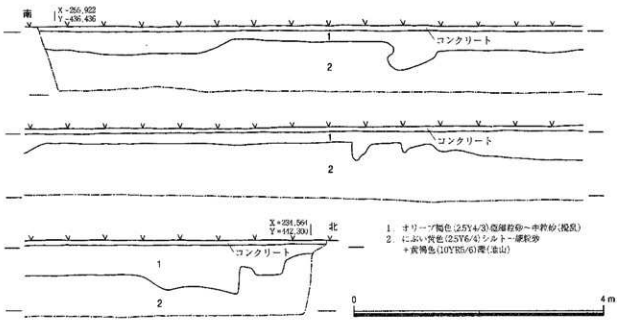


図６　北調査区土層断面図

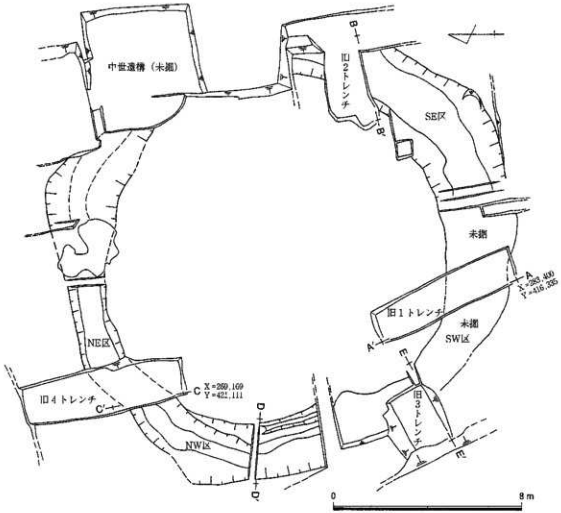


図7　古墳周溝平面図

う地形変換点に位置している。古墳築造当時も傾斜地に古墳が造営されたと予想され、西が浅く、東が深い周溝も地形にあわせて周溝が掘削された結果と理解できよう。また、周溝埋土の残存も周溝底の深さにほぼ比例し、西側では深さ50cmの堆積が認められるのに対し（図版４－２）、東側では深さ10cmの周溝埋土が検出されたにすぎない（図版４－１）。古墳の正面観を考えるうえで興味深い。小古墳の周溝底にこのような比高差が認められる例としては、京都府木津川市（旧木津町）瓦谷古墳群（石井・有井編1997）などが知られるが、本古墳ほどの比高差を形成する類例は見当たらない。尾根を切断した掘割をもつ小古墳などとの比較検討が必要であろう。

なお、埴輪をはじめとする古墳に伴う遺物は周溝最下層では乏しく、上層（図８Ａ－１層、Ｃ－１層、Ｄ－２層）からの出土が顕著であった（図版５・６）。このことは墳丘上に樹立されていたであろう埴輪群の倒壊あるいは墳丘削平時期を考えるうえで重要である。次に述べるようにNE区周溝埋土からは７世紀に属するとみられる須恵器が複数点検出されている。また、第３章で述べる中世火葬墓群が墳丘の中心部付近で比較的深い遺構を形成しているため、これらが営まれた段階ではすでに墳丘は削平されていたと考えられるのである。したがって、７世紀から13世紀の間に墳丘は削平された可能性が高い。

（３）周溝内における遺物の出土状況

では、次に周溝内における遺物出土状況についてみていこう。周溝肩部を検出した段階で掘削をとめたSW区（図版４－６）を除き、各区からは多数の

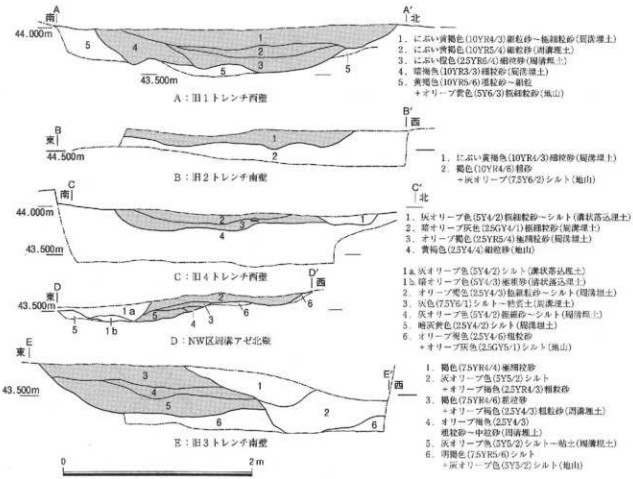


図8　古墳周溝土層断面図

埴輪、土器類が検出されている。

まず、NW区からは多数の円筒埴輪のほかに馬形埴輪（4a～41）、人物埴輪（1a・1d・2）、建物形埴輪（11）、鳥形埴輪（10）、蓋形埴輪（15）、土師器甕（74）が検出されている。馬形埴輪と人物埴輪、そして建物形埴輪は近接して検出されており（図版5－5・6－1）、墳丘での樹立時にも近接して配置された可能性が高い。また、土師器甕（図42－74）は埴輪群の取り上げ後に面的に広がって細片となった状況で検出されており、埴輪に先行して周溝に転落したか、もともと周溝内に廃棄された可能性がある。また、その他の器種が土師器、須恵器を問わず検出されていない点にも注意が必要である。

NE区からは円筒埴輪、蓋形埴輪、馬形埴輪の尻尾部分（図17－4m）、人物埴輪の一部（図9－3・1b）須恵器が出土している。とくにNW区検出の馬形埴輪と同一個体とみられる尻尾部分（4m）が検出されていることは興味深い。

SE区から円筒埴輪、須恵器、不明形象、土師器椀が検出されている（図版5－6・6－2）。SE区で注目されるのは土師器椀（図42－75・76）が2点出土していることであろう。SE区周溝肩部からは須恵器坏身（図39－63）も出土しており（図版6－4）、さらに坏蓋（図39－59・60・62）と坏身（図39－64）も周囲から検出されているのである。土師器、須恵器を問わず供膳具が比較的集中して墳丘南東部で検出されている点は興味深い。

また、周溝埋土に伴う資料ではないがSW区付近からも円筒埴輪のほかに馬形埴輪（図版6－3）が出土している。

また、出土した遺物の時期として注目されるのはNE区周溝埋土から出土した須恵器高坏（図41－69）と蓋宝珠つまみ部（図41－72）そして蓋（図41－73、図版6－5）である。いずれも7世紀以降に

属するとみられ、今回の調査地点での５号墳築造後の継続する人間活動を示唆するものとして興味深い。５号墳の北東150m付近でもTK209型式期からTK217型式期に属するとみられる須恵器が検出されている（清家編2001：pp.23－26）。

なお、周溝内そして調査区においても石の検出はほとんどみられない。したがって、墳丘に葺石は使用されていなかったと推定される。

（４）盛土と埋葬施設

埋葬施設の残存はまったく認められなかった。埋葬施設の手がかりとなるような石材等の出土もなく、どのような埋葬施設が構築されていたかは不明である。古墳の規模や時期から木棺直葬等が予想できるが、根拠はない。

また、前回の試掘調査では第１トレンチにおいて、盛土の可能性のある土層が指摘されているが（清家編2001：p.15図12－第22層）、今回の調査においても積極的に盛土とする堆積関係をもった層位を確認することはできなかった。（寺前直人）

３　待兼山５号墳に伴う遺物

（１）遺物の概要

コンテナ約95箱の出土遺物のうち大部分を占めるのは待兼山５号墳に伴う埴輪である。復元できた円筒埴輪だけでも約20本ある。円筒埴輪は無黒斑で約１割にもの に突帯貼り付け後の横方向ハケメが認められるものの、大部分は突帯貼り付け前の縦方向のハケメで表面の調整を終えているものがほとんどである。また、形象埴輪としては馬形埴輪、馬曳人形埴輪、建物形埴輪、鳥形埴輪、壺形埴輪などが確認できた。とくに馬と馬曳形および建物形埴輪が周溝内から近接して検出されており、これらが完形に復元できたことは大きな成果である。一方、須恵器は坏、高坏などの出土が認められるがいずれも細片である。さらに土師器甕や鉢などの出土している。以下ではその詳細について報告を進める。（寺前直人）

（２）形象埴輪

①人物埴輪（図９～11・図版11）

馬曳を表現したと思われる人物埴輪部位片（図９－１）が数点と、それとは別個体の可能性のある美豆良（図９－２・３）が２点確認されている。馬曳に関しては腰帯部（１ｄ）、肩部（１ｃ）、左腕（１ｂ）、顔面部（１ａ）が検出されており、うち１ａと１ｂ、２は後述する馬形埴輪（４）と近接して出土している。それぞれの部分に関しては直接の接合関係は認められない。残存している顔面部の形態および線刻表現が、奈良県田原本町笹鉾山２号墳（田原本町教育委員会2005）の人物埴輪に酷似していることから、これを馬曳と判断した。

馬曳（図９－１）　推定復元全長65cm、器厚1.2～1.5cmで、復元に際しては笹鉾山２号墳出土の人物埴輪を参考にした。色調は全体的に茶褐色であるが、肩部は比較的赤みが強い。焼成は良好ではあるものの、表面の依存状態があまり良いとはいえず、薄く剥離している部分も多い。

顔面部（１ａ）は、鼻および左眼窩下まで残存している。鼻の上に扇状の線刻、目尻から頬の部分にかけてヒゲ状の線刻が認められる。笹鉾山２号墳の人物埴輪も、鼻の上と顎付近に同様の表現があり、共通性が高い。表面の調整に関しては若干の風化の影響もあるが、元々丁寧に指でナデ消されていたと思われ、衣裳共にほとんど残っていない。

左腕（１ｂ）は、径6.0cm程の筒状の形態を呈する。表面はユビナデで整形されている。内面に粘土接合痕が数条、正置で縦方向に走っているのが確認でき、これと数カ所残されたユビオサエから判断すると、腕を先に作ってから胴部に接合したのではなく、胴体方向から粘土を順次輪積みして腕を成形したと考えられる。なお、手のひらに関しては、別作りのものをソケット状に腕部の先端に差し込んで、その後粘土で隙間を埋めて作っている（図11）。指先は５本の指をそれぞれ切り出しではなく、貼り付けて成形していることがわかる。

肩部（１ｃ）は、胴部に連続する下方の推定径が

15.0cm、首の径が7cm前後である。本例のみSE区から検出されている。土師器壺の頸部に近い形状を呈すること、他の部分の破片と異なり若干赤みの強い色調でもあることから、当初は土師器壺として認識していたが、腰帯部の径と近似する点と、土師器壺としては考えがたい歪みが認められる点、そして小片ながら人物埴輪と考えていた茶褐色の破片が接合した点などから、これを人物埴輪の肩部と認識し直した。調整はほぼ全面にわたってユビナデで行われており、内面の粘土接合痕の方向から推察するかぎりでは、下の台部から順に粘土を輪積みして製作されたと考えられる。

腰帯部（1d）は復元径14.0cm程で、焼成は良好であるが、表面の風化は激しい。調整は、左腰の帯下に一部タテハケが残存していることから、最初にタテハケが施され、それがユビナデで丁寧に消され

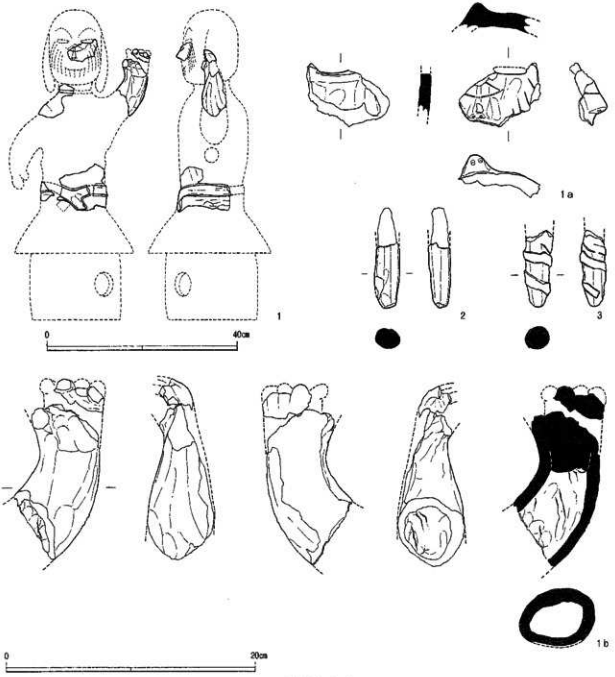


図9　人物埴輪（1）

ていると考えられる。これは、本来腰帯部に限らず、全身で施されていた可能性も高いが、タテハケが残存するのはこの部分だけであることから本来の調整は不明である。内面には縦方向のユビナデ痕が複数認められるのみである。装飾などに関しては、正面の十字帯が一部欠損しているものの良好に残存している。帯の幅は2.0cm、高さは1～2mm程度で、貼り付け成形である。また、左腰帯下のタテハケが認められる付近に、岩干赤色顔料と思われる付着が確認でき、元々は赤色顔料で彩色されていた可能性も指摘できる。

美豆良1（図9－2） 残存長7.9cm、幅2.0cm、厚さ2.0cmの棒状の形態である。NW区出土。美豆良の端部まで破損せずに残存してるが、基部は欠損したうえ表面も剥離しているので他の部分との接合関係は不明である。色調は茶褐色で無黒斑、焼成は良

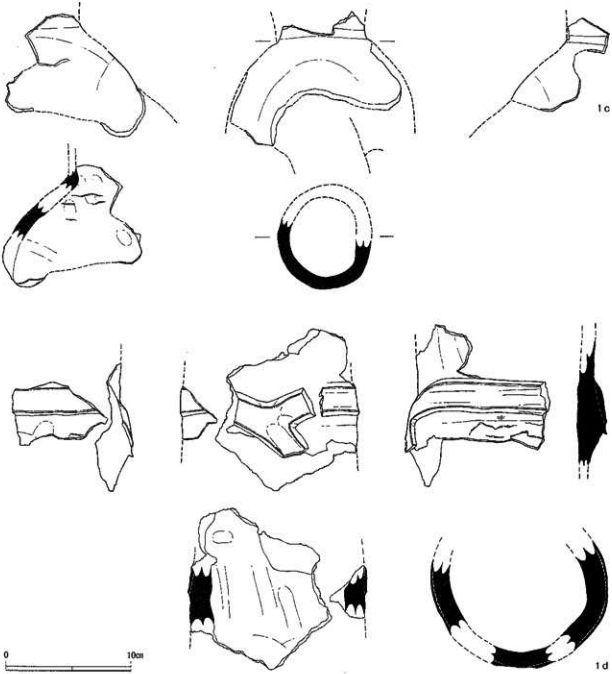


図10 人物埴輪（2）

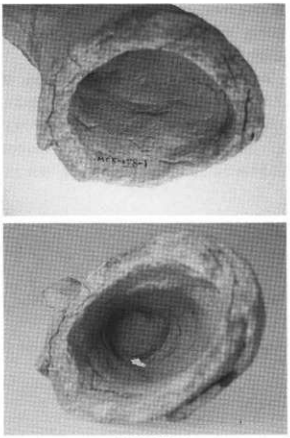


図11　人物埴輪腕内部（1b）

好である。馬曳の出土位置でもあるNW区の埴輪溜まりからの出土であるため、馬曳と同一個体の可能性もあるが、今回の接合作業では1に組み込まなかった。調整は全て縦方向のユビナデである。粘土紐などによる装飾あるいはその痕跡などは、現状では認めがたく、もともと棒状の単純な形態であった可能性が高い。ただ、詳細に観察すると、貼り付けた粘土紐が剝がれたような痕跡が若干認められ、単純な棒状の構造と断言できない要素もある。

美豆良2（図9－3）　残存長6.0cm、幅1.8cm、厚1.9cmの、棒に粘土紐を巻き付けた形態である。端部まで残存しているが、基部に接合する破片は確認できない。色調は赤褐色で無黒斑、焼成も良好である。NE区出土で、馬曳とは若干距離の離れた出土地点である。円筒埴輪では、NE区とNW区出土の破片で接合関係のあるものがあるため、出土地区の違いのみで個体の識別はできないが、色調が明らかに異なるうえ、馬曳と考えられる人物埴輪の類例のなかで、紐巻きのみられる美豆良をもつ事例は見出しがたく、この個体が馬曳と同一個体とは考えがたい。したがって、もう一体の人物埴輪に伴うものであると考えられる。　（柏原龍嗣）

②馬形埴輪（図12～21・図版10）

馬形埴輪1（図12－4）　ほとんどの破片はNW区から検出されている。4はたてがみ（4a）、頭部（4b）、鞍部（4c・d・e）、脚部（4f・g・h）、障泥および鐙表現（4i）、胴部（4j・k・l）、尻尾部（4m）の各法量および表現から、類例として奈良県田原本町笹鉾山2号墳出土の馬形埴輪（田原本町教育委員会2005）を参考にそれらを用いて全体復元したものである。図12からみてとれるように馬形埴輪の全体に比して、復元に利用できた破片量は少ない。ただし、鞍部と障泥および鐙部、そして2本分の蹄部分から脚部上半部など馬形埴輪を構成する主要な部位が集中して検出されていること、さらに普及・活用に際しての有効性を勘案して今回の全体復元に挑んだ（図版10）。

4aは残存高6.8cmで全体がナデ調整を施されている棒状の破片である。下半の粘土塊に棒状の粘土を貼り付け、先端を折り返している。下半の粘土塊部がたてがみで先端の折り返された棒状部分がたてがみ端の結び目を表現しているとみられる。

4bは残存幅長辺・短辺とも10.2cmをはかる厚さ1.3cmのわずかに湾曲をもつ破片であり、表側には革紐を表現しているとみられる幅1.6cm、厚さ0.4cmほどの粘土帯が貼り付けられている。内面はナデ調整であるが、外面はナデ調整と共に若干のハケメも認められる。革紐の表現は後述する馬形埴輪2頭部のそれと同様、2条の長方形刺突文がみられる。この表現は鞍部を表現している4cのそれとも共通している。

4cは残存幅長辺8.4cm、短辺3.8cmの湾曲を有する破片であり、屈曲方向に直交して幅0.5mm程度の線刻が3条施され、その線刻に沿って、幅2mmで長さ4～5mm程度の長方形の刺突が認められる。湾曲と施文から鞍の居木部分を表現した破片であると考えられる。線刻面側からみて右側がせり上がっていることから、右半は鞍部と接していた可能性がある。

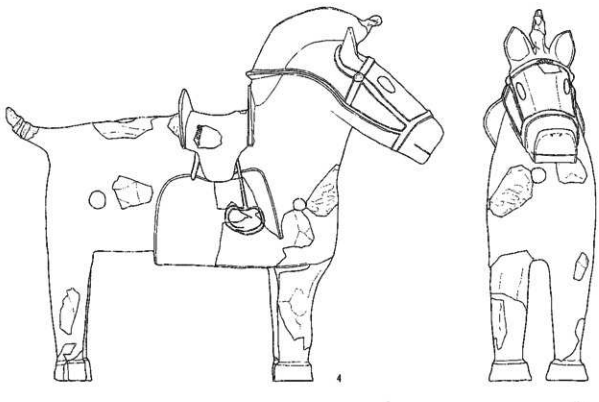


図12　馬形埴輪（1）

興味深いのは右側斜離面の下半は本来の外表面を形成しており、再び下端側に斜離面が観察される点である。下端部斜離面は馬背部と鞍部との接合面である可能性が考えられよう。

4dは残存長辺7.3cm、短辺5.3cm、厚さ1.5cmをはかる板状の破片である。4b・cと共通する2条の長方形刺突文がみられることから鞍部を構成する破片である可能性が高い。また長辺端部破面には面が観察できることから、鞍部は別作りであり、馬背部との間には空洞が形成されていた可能性がある。

4eは鞍部後輪を表現したとみられる破片である。笹鉾山2号墳出土例などをみるかぎり、前輪であるとすればたてがみとの接合箇所がみられるはずであるが本例には認められないことから、後輪と判断した。残存幅20.9cm、残存高12.5cm、厚さ1.2cmをはかる。鞍部を上面から観察した左上図に2条の凹線とその両側に長方形刺突文がみられる一方で、下面側には認められない。後輪であるとすれば、本例は尻繋をもたない馬装を表現しているのかもしれない。

後輪部分の表現は非常に精緻である（図16上）。まず、内外面に強めのハケメを施した後、後輪端部より0.8cm内側に1条の沈線を施す。さらに沈線で区画された範囲のハケメのみをナデで消しているのである。後輪端に対するこのような調整は覆輪を表現しており、強めに施されたハケメは木製の海部分を表現しているとみられる。

また、線刻が施された内面側は外面と内面が二重となっており、居木側の斜離面と背部の斜離部との間にわずかながら空洞が認められるのである（図16下）。この空洞は先述の4cや4dと共通し、この馬形埴輪の鞍部の製作技法の特徴であるといえよう。

5は4.5cm四方で厚さ1.5cmほどの板状片であるが弧を描く3条の線刻内に長さ3mm程度の三角形刺突が充填された線刻を有する破片である。鞍部片の可能性もあるが、該当する部位を特定することができなかったので、4の復元には用いていない。

4fは残存高13.3cm、もっとも径の大きい底部で直径8.8cmをはかる円筒状の破片である。底部より

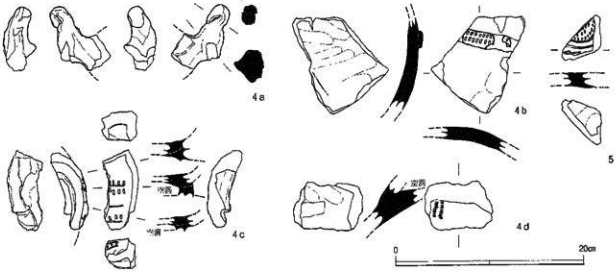


図13　馬形埴輪（2）

急速にすぼまり、高さ4cmのところで径6.7cmとなる。3.5cmまでは粘土を貼り付け、径を増している。内外面とも丁寧なナデ調整が施されている。また、底部一端に幅3.0cm程度の切り込みをいれ、蹄を表現している。

4gは残存高8.2cm、復元径8.4cmをはかる円筒状の破片である。底部より3.2cmまでは径が減少し、それより上位では段差を形成し、直径5.9cmまですぼまる。また、下位は粘土を貼り付けることにより、径を増している。また、底部の一端幅3.5cmの範囲を高さ1.6cmまで半円状に切り抜いている。4f同様、馬脚部の蹄を表現していると判断できよう。内外面共にナデ調整が施されており、とくに内面はタテ方向のナデが顕著であった。

4hは残存高22.4cm、筒状部径8.8cmをはかる破片である。上半の屈曲度から右前脚上半であると推定した。内外面共にナデにより調整されている。とくに内面についても粘土接合痕はほとんど観察できず、丁寧なナデが印象的である。

4iは残存長辺22.4cm、短辺18.2cmをはかる板状破片である。形態と線刻の特徴から障泥部分であると判断できる。外面右上の部分には円形透孔とみられる痕跡が確認できる。また、平坦面中央上半には左端に2条のゆるやかに屈曲する沈線を施文後に長方形刺突文を充填した表現が認められる。唇木を表現したとみられる。また、その右側には幅1mm程度の沈線が上下に一直線に6cmほど伸びた後、横8.5cm、縦5.0cmのひしゃげた楕円形が幅0.3～0.6cmほどの間隔を保つ二条の沈線で表現されている。興味深いのは楕円形下半では内側の線が最大1cm近く互い違いになっている点である。これらの線刻表現から輪鐙を表現していると読みとることが可能である。さらに、板状部にはハケメが顕著であることも重要である。後輪を表現した4cの海部同様、ハケメとナデを使い分けることにより、馬装各部位の素材ごとの質感を表現していると推定できる。また、障泥部を裏面から支持するための粘土板が胴部との間に貼り付けられている。

4jは残存長辺13.6cm、短辺9.6cm、器厚0.9～1.3cmをはかる湾曲した板状片である。左上面に径3cm程度の円形透孔の一部が、右下にも径2cm程度の円形透孔の一部が認められる。内外面ともナデで仕上げられており、線刻等の表現は一切認められない。湾曲度とスカシ孔の位置から正面右前脚上部にあたると推定した。

4kは残存長辺22.2cm、残存幅14.6cm、厚さ0.9～1.8cmをはかり、わずかに湾曲する板状破片である。ほぼ中央に直径4.6cmの円形スカシが穿かれている。また、表面の遺存状況が良好でないため調整等はほとんど不明であるが、内外面ともナデ調整であると推定できる。この破片については馬形埴輪のどの部位に該当するかを決定することが非常に困難

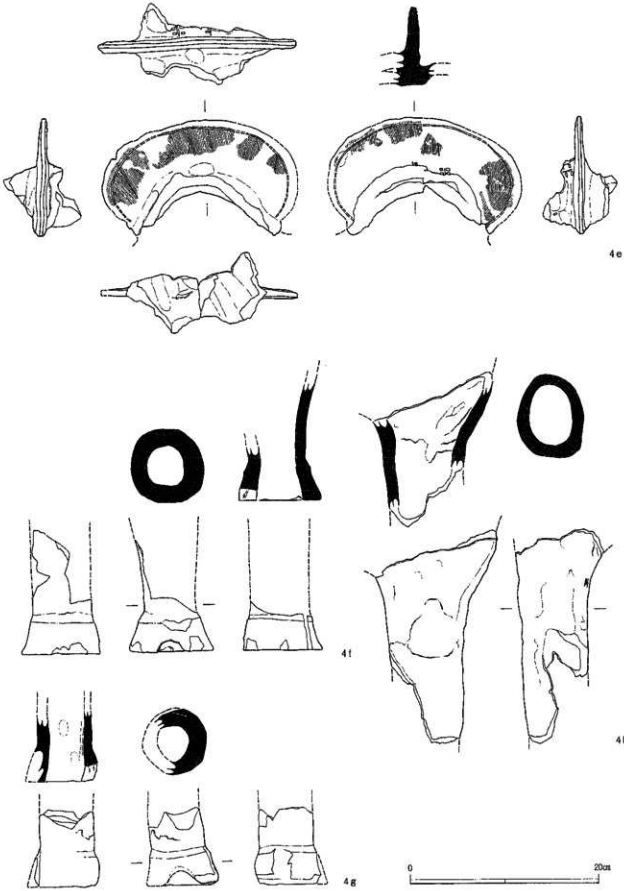


図14　馬形埴輪（3）

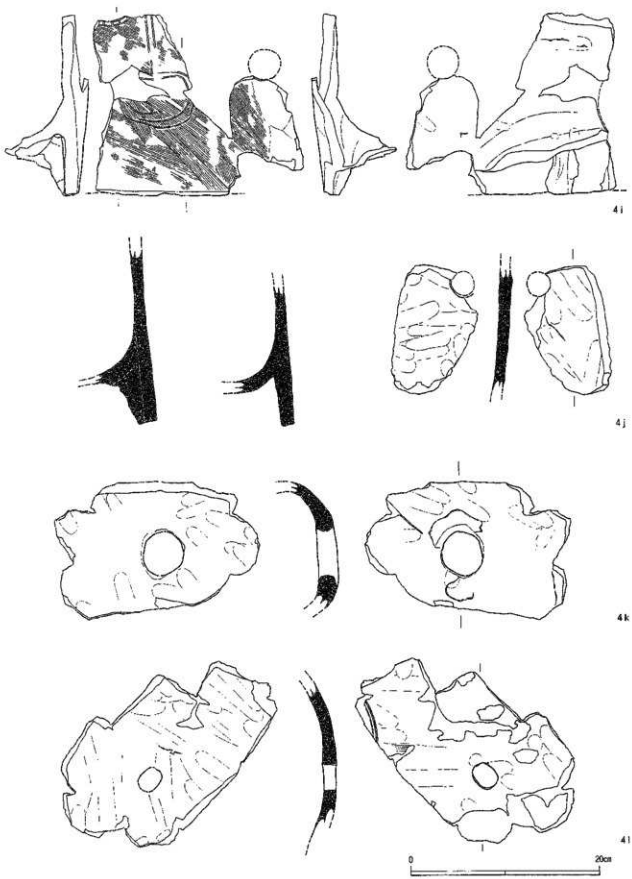


図15　馬形埴輪（4）

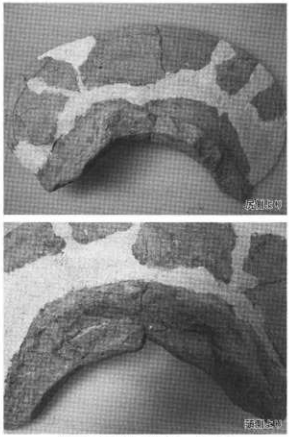


図16　馬形埴輪鞍部（４ｅ）内面

であった。一つは緩やかな屈曲と線刻等がみられないこと、そして比較的大きな円形透孔を有することを根拠に馬腹部とする理解である。そして、もう一つの解釈は尻繋周辺、とくに尻繋頂部付近であるという推定である。円形透孔の周囲には刺突痕の可能性のある痕跡がみられ、何らかの粘土貼り付けによる装飾が施されていた可能性も完全には否定できない。また、鞍部を表現した部位である４ｅの観察では、そもそも当馬形埴輪には尻繋装飾をもたなかった可能性もあるのである。これらの条件を勘案し、４の復元にあたって、４ｋは背部後半から尻頂部の破片と解釈した。ただし、腹部片である可能性も否定できない。

４ｌは残存長辺23.5cm、短辺20.1cm、厚さ1.2～1.6cmをはかる湾曲した板状破片である。ほぼ中央には直径2.8cm程度の円形透孔を有する。また、外面左端にはゆるやかに弧を描く２条の線刻が認められ、この周囲にのみハケメが認められる。線刻を有する外面からみて左側は直線上を呈する一方で、反対側右側は屈曲度が増していく。線刻が４ｉのような障泥外縁を表現していると仮定し、線刻とスカシ孔の距離を勘案して、本破片は左後脚付け根付近の破片であると判断した。線刻付近を除き、内外面共にナデ調整である。

４ｍはNE区から検出された数少ない馬形埴輪の破片である。現存長9.8cm、最大径3.9cmをはかる。尻尾部を表現しているとみられる。尻尾内部は中空であるが、内面に粘土紐単位が認められないことから、粘土を何らかの芯材に巻きつけて製作したとみられる。これに、直径１cm程度の粘土紐を巻き付けて、尻尾の巻き上げ処理を表現している。

（寺前直人）

馬形埴輪２（図18・19－６～９）　調査区南西において包含層中から検出された破片を接合した馬形埴輪頭部片である（図版11）。頭部破片が50％程残存しているほかは、３点程の体部の小破片しか発見されず、復元可能であったのは頭部のみである。また、SE区からも２と同一個体である可能性のある破片（図19－７～９）が検出されている。

２は、残存長29.2cm、残存高16.6cm、残存幅28.0cm、器厚1.3cmの頭部である。馬形埴輪の頭部としては大きく、体部全体を復元すれば、大型の個体になると推察される。色調は赤褐色、焼成は良好で無黒斑である。比較的硬質のため、残存部に関しては、外表面の風化も進行せず良好な状態を維持しており、以上の観点から、野焼きではなく窯焼成と推察される。後に述べるが、鏡板や飾り表現が伴わないこと

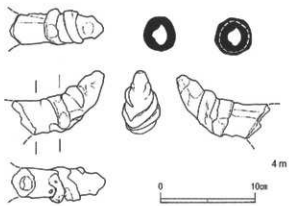


図17　馬形埴輪（５）

から、裸馬あるいは鞍馬であると考えられる。

比較的残りが良いのは下顎から右頬部分中心で、眼窩下部を一部含む。頭部外面および内面の調整はすべてユビナデで、面繋・手綱・辻金具などは粘土貼り付けで立体的に表現されている。鏡板に関しては該当する表現が認められず、元々存在していたものが剝離したような痕跡も認められないことから、本来存在していなかった可能性が高い。面繋の革紐表現部分は幅1.7～2.0cm、高さ0.3～0.4cm、手綱は幅1.2cm、高さ5㎜程である。手綱には特に文様表現など認められないが、面繋には0.3～0.4cm×0.1cm程度の長方形状の刺突が0.5cm間隔程度で2条並んだ列点文が施されている。

頭部左側は、右側と比べると遺存状況が悪く情報も少ないが、右側では失われている耳の後ろ側からたてがみにあたる部分が若干残っており、1cmにつき10条程の条線密度のハケメがわずかに残存していること確認できる。このハケメが外面調整かあるいはたてがみの表現として施されたものなのか、現状では判然としないが、他の部分がすべて指で丁寧にナデられている点や先述の4eや4iにおけるハケのもちい方をみるかぎり、たてがみを意識した調整の使い分けとみてよかろう。

顎裏も、基本的には頭部外面・内面と同じくユビナデで整形されているが、頭部外面・内面が丁寧にナデ調整で粘土接合痕を消しているのに対し、顎裏の調整は非常に雑で、明瞭な接合痕も確認できる。また、顎裏と頬部裏側の接合部に粘土塊をあてて補強している部分も認められるが、ここも調整によって表面をならすのではなく、粘土塊の形をそのまま残した状態で焼成工程に移行している。このように、顎裏の整形が雑であるのは、完成時に目につきにくい部分であるため、手間を省いているためという解釈も可能であるが、顎裏以外の頭部外面はともかくその内面まで丁寧に調整されている事を考えれば、むしろ顎裏の丁寧な調整を行うのが困難な状況が生じた可能性を考える方が妥当ではないかと思われる。頭部そのものは、逆U字の頭部上面に下顎の板をあてて閉塞する事によってなされたと考えられるが、この下顎板の接合が胴体も含めたこの個体の最終閉塞である場合、顎の内面に手を入れて押さえる事が不可能であるため、必然的に調整も弱くならざるをえない。この考え方に基づくならば、頭部上面あるいは下顎のどちらかを前もって胴体と一体で成形し、

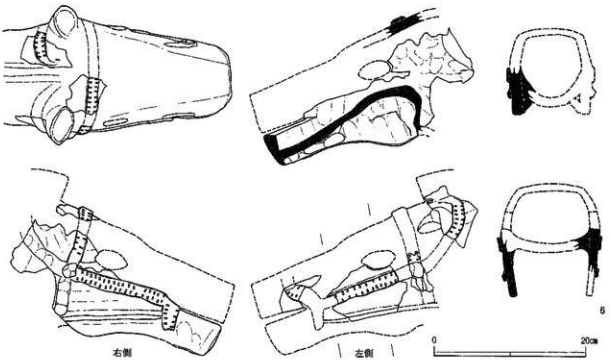


図18　馬形埴輪（6）

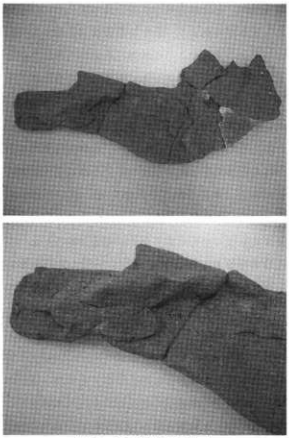


図19　馬形埴輪２頭部内面

その後にもう一方の部品を接合して頭部をつくり、それをもってこの個体の完成という製作手順が復元できよう。

７は、残存長6.2cm、残存幅3.5cm、器厚0.6～1.0cmの馬形埴輪２の耳部である可能性が高い破片である。色調・焼成・無黒斑などの特徴は６とほぼ同じである。調整は明瞭に確認することができないが、内外面共にユビナデでなされている可能性が高い。外面には特筆すべき点はないが、内面に関しては0.2～0.3cm間隔で鍛状の線が横断しているのが認められる。外見上は粘土接合痕に似ているが、その間隔の狭さから、接合痕の可能性は低いと思われる。ここでは耳として粘土で成形した後、乾ききる前にその角度を変えるなどの変形処理を受けて鍛が寄ったものと考えておきたい。

８、９は、共に馬形埴輪２の体部破片であるとみられる。８は残存長6.0cm、残存幅6.4cm、器厚1.4cmで９は残存長6.8cm、残存幅4.2cm、器厚1.5cmである。いずれも接合する破片は存在せず、どの部分

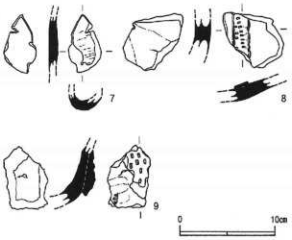


図20　馬形埴輪（７）

の破片かの特定が困難である。８は面繋にみられる２条の刺突列点文と同様のものをもつ突帯が認められるため、頭部付近の破片である可能性も考えられるが、９に関しては、面繋の２条刺突列点文とは明らかに異なる、糸をなさない列点文が施されており、何らかの革表現である可能性を指摘する以外には何の手がかりもない。類例から判断するのも困難である。（柏原龍嗣）

馬形埴輪１と２の関係　以上がNW区を中心に検出された馬形埴輪に関連する埴輪片（４）と周溝南西付近で検出された馬形埴輪頭部（６～９）の様相である。４と６については同一個体であるかのか否かが調査中より大きな課題となっていた。

まず、出土位置が大きく異なる点、次に４が明黄褐色を呈するのに対し、頭部付近の破片を含めて６はやや赤みをおび赤褐色を呈するという焼成の違いは別個体である可能性を支持する。ただし、復元を進めていく過程で４、６各部位の法量が奈良県笹鉾山２号墳周溝出土例に近似しており、４、６とも同一法量であることが推定できることは同一個体説を支持する根拠になるかもしれない。ただし、笹鉾山２号墳周溝における出土状況がそうであるように、同一工人作とみまがうような類似個体が複数出土している古墳も多く、法量的類似をもって同一個体であると断定することは早計であろう。そこで今回の整理では同者を別個体として扱い復元することとなった。ただし、両者とも鞍を載せるけども飾り馬具

をもたない鞍馬であった可能性が高く、本来は同一個体であった可能性も完全には否定できない。

近畿地方における5世紀の馬形埴輪　5世紀に属する馬形埴輪の類例は少ない。したがって、馬鬼と共伴した本例は5世紀の馬形埴輪の様相を知るうえで重要な資料であるといえる。

馬形埴輪の初現は大阪府藤井寺市野中宮山古墳の南造出部出土例（藤井寺市教育委員会1993）や兵庫県赤穂市雄無山1号墳（宮崎2005）があげられ、共伴した円筒埴輪類から5世紀前半に遡ると推定されている。いわゆる大王墓に伴っていた可能性がある資料としては、大阪府藤井寺市誉田御廟山古墳や堺市大仙稜古墳出土例が著名である。ただし、両者とも出土状況が不明であり、周囲の他古墳に伴っていた可能性もあろう。確実な例としては、時期がやや下る大阪府茨木市大田茶臼山古墳出土例があげられよう（土生田1988：p.215）。本例は他の形象埴輪類と共に後円部墳の周堤帯付近から検出されており、その配置を考えるうえで興味深い。馬形埴輪の配置という点では20mの円墳である堺市陵南赤山古墳出土例も重要である。当古墳は円筒埴輪から大仙稜古墳と併行する時期であると考えられているが（十河2003：p.73）、造出部円筒埴輪区画内に鰭物形埴輪や人物形埴輪と共に馬形埴輪の樹立が確認されている（埋蔵文化財研究会1985：p.207）。待兼山5号墳を含めた小古墳への馬形埴輪の樹立も当該期以降顕著になるとみられる。

大阪市長原古墳群（大阪府文化財調査研究センター2001）では57、86、111、131号墳で、茨木市総持寺古墳群（大阪府教育委員会2005）でも7号墳と12号墳より馬形埴輪が出土している。また、京都府木津川市（旧木津町）上人ケ平遺跡でも5、6、8、9、16、17号墳周溝および隣接する1号墳輪窯（京都府埋蔵文化財調査研究センター1991）や2号墳輪窯、灰原（京都府埋蔵文化財調査研究センター1995：pp.143～144）からの出土も認められる。同様の状況は同じく木津川市瓦谷墳輪窯でも認められる（京都府埋蔵文化財調査研究センター1995：p.130）。さらに奈良盆地の例としては橿原市四条1号墳（西藤ほか1989）や葛城市寺口忍海D27号墳のものが類例としてあげられよう（新庄町教育委員会ほか1988）。

待兼山5号墳のような単独に近い小古墳出土例としては次のような類例があげられる。奈良県香芝市下田東古墳は後円部径16m、全長21mをはかる帆立貝式古墳であり、TK23・47型式期に属する須恵器が出土している。埋葬施設は不明ながら周溝埋土からは土師器把手付椀が出土している点にも注意が必要である（香芝市教育委員会2006）。田原本町笹鉾山2号墳は部分的な調査にとどまるものの陸橋部を有する直径31mの円墳であると推定されている（奈良県立橿原考古学研究所2007）。共伴した須恵器は6世紀に下る可能性があるものの、円筒埴輪からは5世紀に遡る可能性が高い（田原本町教育委員会2005）。土師器椀および把手付壺も出土している。なお、待兼山遺跡の所在する豊中市域において5世紀に遡る馬形埴輪の存在は不明瞭であるが、近隣の兵庫県川西市栄根遺跡の住居址より円筒埴輪などと共伴して出土した脚部片（川西市教育委員会1989：p.51）は集落出土例であるものの、5世紀に遡る可能性のある馬形埴輪である。

復元の模拠　ただし、以上の類例のほとんどは断片的な資料で占められている。本来であればこれらの事例を型式学的に検討したうえで、本例の全体像を推定すべきである。ただし、時間的余裕がないため次善策として、もっとも類似度が高い笹鉾山2号墳出土例を参考に本例の全体を復元した。類似点としては、①4fと4hから推定できる脚部高、②鞍の障泥および居木部をいずれも線刻のみで表現する点、③障泥内面と体部間に補強材として粘土板を充填している点（4i）、④面繋および辻金具と手綱の突出度をかえ形状の違いを表現している点（6）、などがあげられる。

②や④の特徴は先述の下田東古墳出土例や四条1号墳出土例あるいは四条畷市南山下遺跡出土例とも共通している。古墳時代中期後葉における馬形埴輪の定型化現象として興味深い。（寺前直人）

③鳥形埴輪（図21・図版12）

NW区において馬形埴輪（4）などと近接して出

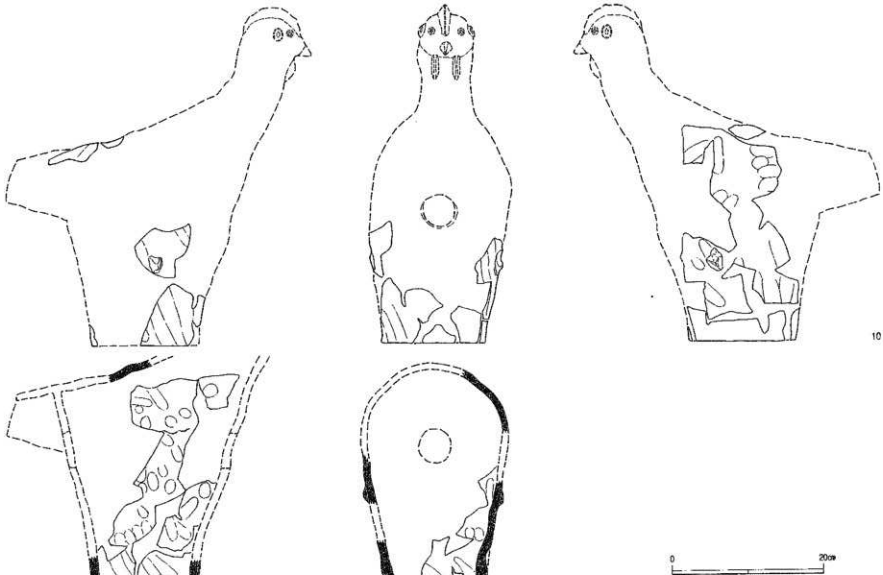


図21　鳥形埴輪

土している。基部の部分と、胴の部分が出土している。胴は一部のみで、ほとんどは基部の破片である。色調は明褐色で、比較的軟質の焼成であるため、表面の風化が激しく、基部の不整方向のユビナデ以外には調整などは確認できない。基部に2箇所、ユビで粘土をつまみ上げたような突起が認められ、左右で1対となっている。鳥の足、あるいは止まり木表現の形骸化したものである可能性が高く、これが器種判別の根拠になっている。

なお、基部にも胴部にも、突帯や透孔・線刻表現の類は認められない。復元にあたっては大阪府豊中市穂積遺跡出土の鶏形埴輪（豊中市史編さん委員会2005）等を参考にしている。（柏原龍嗣）

④建物形埴輪（図22～26・図版12）

少なくとも2個体の建物形埴輪が出土している。その構成は、切妻造り建物1棟（図23－11）、屋根部構造不明の建物片（図25－13）である。この他、棟飾りの堅魚木（図25－12）が1点出土している。以下ではそれぞれの形態的特徴を順次述べていく。部位名称については図22を参照されたい。

建物形埴輪1（11）　ほぼ全形が復元できる高さ55.5cmの切妻造り建物である。屋根部は棟を境に片側半分がほぼ残存しており、反転復元により全体の形状がわかる。両破風板の先端の長さ46.4cm、妻側の下端の幅34.2cm、高さ27.4cmをはかる。器壁の厚さは棟部で0.8～1.4cm、妻側で0.8～1.3cm、破風板で1.1～2.0cmである。破風板は棟から115°の角度で7cm立ち上がる。屋根には縦方向に4本の線刻を施すことで押縁を表現している。各押縁は2本の線刻で構成されており、中央で9.5cmの幅を空けほぼ左右対称に2本ずつ配されている。妻側には棟木の表現と考えられる半円形の透しを穿つ。この透しの中央を通るように垂直方向の斗束が一条の線刻で表現されている。また、一方の妻側には長方形の出入口が線刻で表現されている。屋根部と軸部の境には、妻側に断面台形を呈する幅2.3cm、高さ1.3cm突帯が貼り付けられる。二階部床板の表現であろうか。突帯の剝離部分には横方向の凹線が施されており、貼り付け前に刺付けが行われていたことを窺える。

つづいて軸部の構造を述べる。軸部は高さ28.1cm、軸部平側の下端で34.1cm、妻側で26.0cmをはかる。器壁の厚さは1.0～1.2cmである。軸部には下端から7cmの位置に幅2.6cm、高さ1.5cmの裾廻突帯が貼り付けられる。二階部床突帯同様に、剝離部分には凹線による刺付けが認められる。軸部はこの裾廻突帯を境に壁体部と基部に二分されている。壁体部には平側で2箇所、妻側で1箇所ずつ、計6箇所の方形の透しを配している。このことから建物の柱配置は桁行2間×梁行1間となる。平側の透し上部には横方向の線刻が施される。

調整については屋根部、軸部共にナデを主体としている。いずれも外面は丁寧なナデにより円滑に仕上げられているのに対し、内面は指頭圧痕・ナデの形状や粘土の接合痕がみられる（図24）。この他の調整としては外面軸部コーナー付近で面的な調整箇所が認められることから、ナデ調整後に板状工具による押圧が加えられていることがわかる。

また、妻側外面基部には作業台からの離脱時に、指を差し込んだと考えられる粘土のひずみが認められる。

建物形埴輪2（図25－13）　建物形埴輪の軸部の破片である。残存高11.5cm、残存幅14.4cm、基部の高さ1.6cmをはかる。器壁の厚さは1.0～1.7cmである。出入口が認められることと、破損箇所が湾曲している様子から、平側コーナー付近の破片と考えられる。出入口は方形の下辺に半円形の切り込みをもつ形状に復元できる。裾廻突帯は幅2.6cm、高さ1.5cmの断

図22　建物形埴輪部位名称

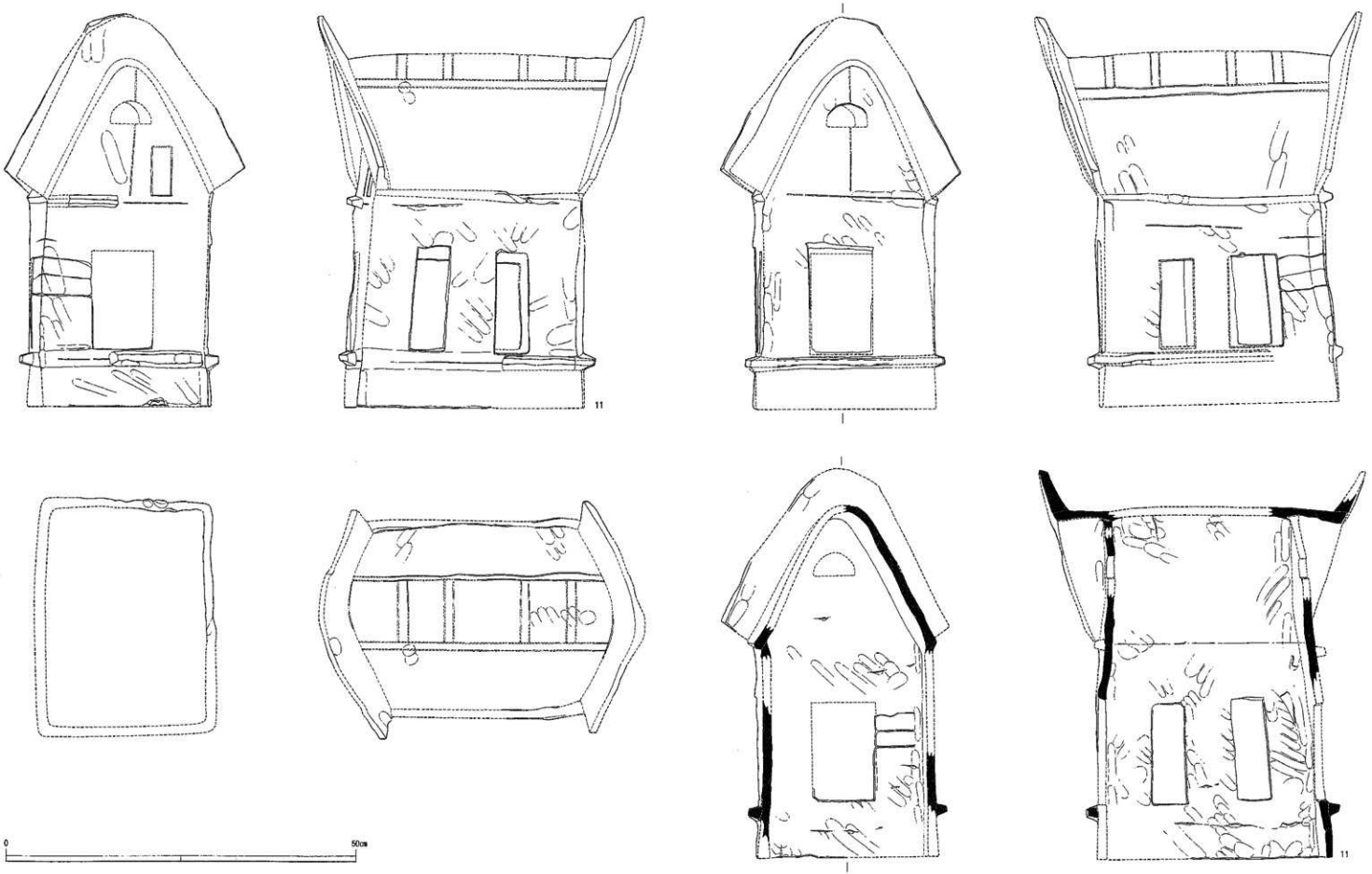


図23　建物形埴輪 1

図24　建物形埴輪１（11）内面

面三角形を呈している。

調整は内外面共にナデ調整である。内面は外面に比べナデが雑に施されておりユビの形状が残る。この他、接地面に内側から外側にかけて貫通する棒状工具の痕跡が認められる。外面には工具で生じた粘土のひずみが認められることから、作業台から離脱した際の痕跡と考えられるかもしれない。

竪魚木（図25－12）　棟飾りの竪魚木である。長さ4.5cm、径1.7～2.1cmをはかる。側面は工具により面取りされており７面を数える。よって断面の形状は七角形を呈している。

以上が建物形埴輪の形態的特徴である。これらの建物構造を踏まえて待兼山５号墳の建物形埴輪の機能面を考えてみたい。建物形埴輪１は桁行２間×梁行１間の掘立柱建物である。このように軸部の方形透しはいずれも柱表現によるものであり、出入口や窓は認められない。本例では屋根部妻側に線刻で方形の出入口が表現され、窓は存在しない。また妻側の屋根部と軸部の境に突帯を貼り付けることで床表現としている。このことから建物形埴輪１は屋根倉式高床建物を表していると考えられる。同様の例は奈良県室大墓古墳、大阪府弓削遺跡、大阪府玉手山１号墳、兵庫県行者塚古墳、鳥取県長瀬高浜遺跡、福岡県月ノ岡古墳、宮崎県西都原169号墳などで出土している。一方、建物形埴輪２は屋根部の構造が不明なものの、整体部平側に出入口を設けていることから平屋建物であることがわかる。

以上から待兼山５号墳の建物形埴輪には倉の機能をもつ建物と、住の機能をもつ建物が併存していることがわかる。

建物形埴輪１の製作工程復元（図26）　建物形埴輪１は残存状況が良好であり、全体の形状を把握することができた。そこで器面にみられる調整技法や粘土の接合痕から、製作工程の復元をおこないたい。

工程①　軸部の製作１

接地面となる基部には比較的幅広な高さ５cmの粘土帯を用い、土台となる１段目とする。

工程②　軸部の製作２

軸部の製作は基本的に下方から上方へ粘土紐を輪積みもしくは、巻き上げて成形していく。２段目以降は高さ2.5～2.8cmの粘土紐を用いる。調整は内、外面共にナデを施し、板状工具で粘土のゆがみを修正する。

工程③　屋根部妻側の製作

屋根部妻側はあらかじめ成形した粘土板を、軸部に積み上げる。

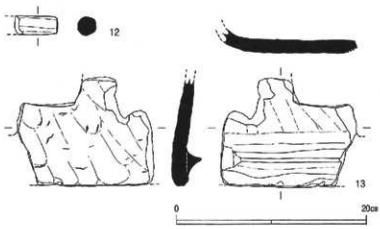


図25　建物形埴輪２

工程④　突帯貼り付け、透しの穿孔、線刻

縁廻・二階床を表現する突帯を貼り付ける。この際、貼り付けの目安とする位置に線刻による割付をおこなう。壁体部には柱表現のための方形透しを穿孔する。屋根部妻側には棟木を表現する半円形の透しを穿孔し、斗束を表現する線刻を施す。また、屋根部妻側の一方には出入口を表現する方形の線刻を施す。（ここでは突帯貼り付け、透しの穿孔、線刻を一連の工程としているが、各部位の製作段階で個別におこなわれている可能性もある。）

工程⑤　棟の製作

棟部は幅3.5cm程の粘土帯をアーチ状に渡していく。この際、軸部との接合部分は、軸部上端面全体で屋根部を支える構造となる。粘土帯の貼り付けはナデによる。

工程⑥　破風板の製作と押縁の線刻

屋根部両端部の上部に幅5cm～6.3cmの粘土帯を貼り付け、破風板を製作する。棟部には押縁を表現する線刻を施す。

以上が建物形埴輪1の製作工程である。このような復元をおこなったうえで比較しておきたいのが、青柳泰介による家形埴輪の製作技法の研究成果である（青柳1995）。青柳は軸部と屋根部の接合方法について、軸部と屋根部を一括して成形する一括成形技法と、これを分割して成形する分割成形技法を設定している。建物形埴輪1は軸部上端全体で屋根部を支える構造をしていることから一括成形技法に含まれることがわかる。つづいて、青柳は屋根部の製作方法を2つに分類している。それは棟部を製作したのち妻側を製作する閉塞技法A類と、逆に妻部を

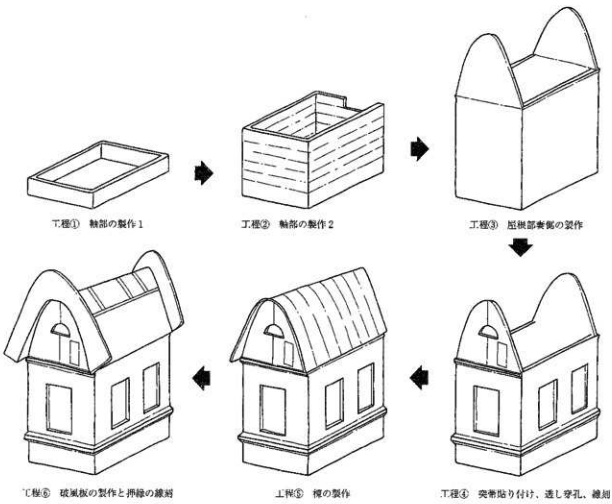


図26　建物形埴輪1（11）の製作過程

製作したのち棟部を製作する閉塞技法B類である。建物形埴輪1は内面調整の粗粗から妻側の製作が棟部の製作に先行しておこなわれたことが明らかであることから閉塞技法B類に比定されよう。しかし、棟部の製作技法において青柳の復元と大きく異なる点が指摘される。それは棟部を平側に平行する粘土板を積み上げて製作するのではなく、建物形埴輪1（11）では平側に対し垂直に粘土帯をアーチ状に渡して製作するということである。この製作方法では粘土の加重によるひずみが生じやすいと考えられるため、適度な粘土帯の乾燥を必要とすると思われる。したがって、青柳が区分したものとは異なる系統の製作技術と評価できよう。本資料によって建物形埴輪の屋根部の製作に新たな技法を指摘できたことは重要な成果といえる。（西本和哉）

⑤蓋形埴輪（図27・図版12）

蓋形埴輪と確認できた破片は約10点である。そのうち6点を図化することができた。これらは、笠部と台部の接合箇所が4点（14～17）、笠部の先端が2点（18・19）である。以下においては、破片ごとに特徴を述べていくこととする。

14はNE区付近検出の笠部と台部の接合箇所である。破片は全周の約8分の1程度が残存している。残存部の復元最大径は28.4cmであり、台部の復元最大径は21.2cmとなる。残存高は5.0cmをはかる。笠部は比較的ゆるやかに開く形状であり、台部はほぼ直立する。外面は遺存状況が悪いため、調整は確認できず不明である。台部外面においては、粘土紐の接合痕が認められる。内面はいずれもユビナデによる調整が認められ、笠部においてはヨコ方向を、台部においてはタテ方向をそれぞれ基本としている。笠部と台部の接合部においてはユビオサエの痕跡が横方向にめぐっており、その下部には粘土紐の接合痕が観察される。破断面における粘土紐の接合痕跡より、笠部を成形したのち台部を笠部に接合したことが確認できる。接合部の外面には粘土の補充による補強が認められ、上述した内面の横方向にめぐるユビオサエ痕は接合の際に入念に施したものであると考えられる。

15はNW区出土の笠部と台部の接合箇所である。破片は全周の約10分の1程度が残存している。残存部の復元最大径は28.0cmであり、台部の復元最大径は20.0cmとなる。残存高は5.2cmをはかる。笠部はやや傾斜が強くなる形状であり、台部はほぼ直立する。笠部外面は遺存状況が悪いため、調整は確認できず不明である。台部外面においては、ヨコ方向の

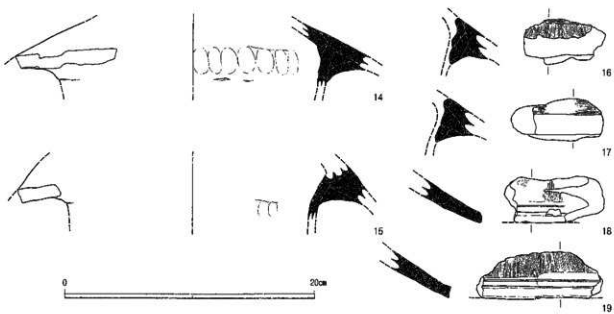


図27　蓋形埴輪

ナデが認められる。内面はいずれもユビナデによる調整が認められ、笠部と台部の上端においてはヨコ方向を基本としている。笠部と台部の接合部より約2cm下部においてはユビオサエの痕跡が認められる。残存状況が十分ではないものの、破断面における粘土紐の接合痕跡より、笠部を成形したのち台部を笠部に接合した可能性が高い。接合部の外面には粘土の補充による補強が認められ、上述した内面のユビオサエ痕は接合の際に施したものであると考えられる。

16はSE区出土の笠部と台部の接合箇所である。破片の残存幅は6.4cmであり、残存高は3.6cmをはかる。笠部は比較的ゆるやかに開く形状となるようである。笠部の外面調整としては、残存部位の大半においてタテハケが確認でき、残存部上端においてはそのタテハケを消すようにヨコハケが施されている。ハケメの条線密度は、タテハケ・ヨコハケ共に1cmあたり10条である。台部外面にはナデが施されている。内面は剝離により器壁が残存していないことから、調整などの観察はできなかった。小破片であることから破断面における粘土紐の接合痕跡の観察は一部にとどまるものの、上述した2例に類似することから、笠部を成形したのち台部を笠部に接合したものと考えてよかろう。接合部の外面には粘土の補充による補強が認められる。

17はSW区出土の笠部と台部の接合箇所である。破片の残存幅は7.3cmであり、残存高は3.3cmをはかる。笠部は比較的ゆるやかに開く形状となるようである。笠部の外面調整には、ヨコハケが施されている。ヨコハケの条線密度は、1cmあたり13条である。台部外面にはユビオサエが施されている。内面は剝離により器壁が残存していないことから、調整などの観察はできなかった。小破片であることから破断面における粘土紐の接合痕跡の観察は一部にとどまるものの、上述した2例に類似することから、笠部を成形したのち台部を笠部に接合したものと考えてよかろう。接合部の外面には粘土の補充による補強が認められる。

18はSW区出土の笠部先端の破片である。破片の残存幅は7.9cmであり、残存高は3.6cmをはかる。比較的ゆるやかに開く笠部の形状が想定される。外面調整にはタテハケが施され、端部と端部から約2cmの範囲にはタテハケを消すようにヨコ方向のナデが施されている。さらに、端部から約1.5cmの部位には1条の沈線がヨコ方向にめぐらされている。タテハケの条線密度は、1cmあたり10条である。内面調整にはヨコ方向のユビナデが施されている。

19はSE区出土の笠部先端の破片である。破片の残存幅は10.0cmであり、残存高は3.7cmをはかる。比較的ゆるやかに開く笠部の形状が想定される。外面調整にはタテハケが施され、端部と端部から約2cmの範囲にはタテハケを消すようにヨコ方向のナデが施されている。さらに、端部から約1.2cmの部位には1条の沈線がヨコ方向にめぐらされている。タテハケの条線密度は、1cmあたり10～11条である。内面調整にはヨコ方向のユビナデが施されている。

蓋形埴輪の復元とその位置づけ　以上、当古墳より出土した蓋形埴輪について辞述してきた。断片的ではあるものの、これらの情報から当古墳における蓋形埴輪について復元を試み、さらにその製作技術を検討する。

まず、当古墳において確認されている破片は笠部と台部の接合部および笠部先端のみである。立ち飾りや軸部・軸受け部などは確認されていないが、本来立ち飾りを伴っていた可能性がある。古墳時代中期末以降の小形の蓋形埴輪には、当古墳と同様に立飾りの破片の確認されない例が多い。蓋形埴輪は立ち飾りを有することを基本とするものであり、これらも本来は有機質、例えば滋賀県八ノ坪遺跡から出土した木製の立ち飾り（岩崎編1997）のようなものを伴っていたことも想定されよう。

笠部の形状についてみると、基本的に笠部はゆるやかに開く形状となり台部は直立する。笠部と台部の接合部の外面付近と笠部先端には、突帯をめぐらせていたような痕跡は認められない。突帯をめぐらす代わりに、笠部先端付近には沈線が1条めぐらされている。ただし、笠部に縦方向に施される沈線は認められないことから、沈線による装飾は笠部先端

を1周するもののみであったと考えられる。

また、肋木の表現もなかったものと考えられる。

笠部の調整についてみると、笠部と台部の接合部付近の上端においてはヨコハケが確認されることから（16・17）、笠部全体にタテハケを施したのち笠上部においてはヨコハケを施したものと考えられる。

また、法量についてみると、笠部と台部の接合部分の復元最大径が約20cm前後になることから、蓋形埴輪としては小型の部類に属するものであることがわかる。製作技術についてみると、笠部と台部の接合部分の観察から、笠部を一括して成形したのちに別作りの台部を接合したことがわかる。これは、伊賀高弘によって「笠部一括成形」とされたものである（伊賀1989）。伊賀によると笠部一括成形は小型の蓋形埴輪にもちいられることが多く、また古墳時代中期後半以降において主に認められるという。

その他、蓋形埴輪の編年をおこなったものとして高橋克壽、田中秀和、松木武彦、川村和子、小栗明彦などの研究が挙げられるが（高橋1988、田中1988、松木1990、川村1997、小栗2007）、これらを参考にすると当古墳出土資料が中期後半を遡らないことは確実である。中期後半以降の蓋形埴輪の形態化・地域色の発現の中で捉えられる資料であることは間違いないと考えられるものの、資料が断片的なためその詳細な位置づけについては今後資料が増加した際の課題としたい。（東影　悠）

⑥不明形象埴輪（図28・図版11）

20は図化した方向の上下左右共に湾曲する器形であることから、形象埴輪の破片と考えられる。内面に認められた粘土接合痕を元に上下を判断し図化したものであり、残存高8.8cm、残存幅13.2cmをはかる。外面、内面共に調整としてナデが施されている。外面には直線状の沈線が施されており、このことと器形とを考えあわせるならば人物形もしくは馬形埴輪のいずれかの可能性が高いものの、詳細については明らかにできなかった。

21は断面の観察により、湾曲を呈し円筒形をなすと想定される器壁に鱗状の粘土板を貼り付けたものとみられる。形状から円筒状の器形の両側に粘土板の貼り付く可能性が考えられることと、円筒部とみられる内面の粘土接合痕の方向をもとに、器形を推定し図化した。残存高は10.0cm、残存幅は10.3cmをそれぞれはかる。一部ではあるものの斜め方向に延びる粘土板の端部が確認できる。形状から形象埴輪の破片であることは間違いない。

粘土板は円筒部の真横ではなく、やや片側に偏って貼り付けられており、調整として片側に横方向のハケメが、もう一方にはナデが施されている。ハケメの施される側には斜め方向の沈線が1条確認できる。一方、ナデの施される側には円筒部と粘土板部の間に粘土が充填されている。この粘土は、粘土板の接合を補強するためのものと考えられる。粘土板の調整の差異や沈線あるいは粘土の補強の有無などから、ハケメによって調整され沈線の認められる側がこの形象埴輪の正面であったことがわかる。

（東影　悠）

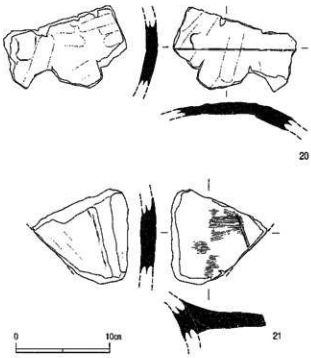


図28　不明形象埴輪

（3）円筒埴輪（図29～38、図版13～17）

待兼山5号墳出土の円筒埴輪には、普通円筒埴輪と朝顔形埴輪が認められる。出土埴輪片は三千点以上になるが、そのうち朝顔形埴輪はごくわずかしか認められず、ほとんどが普通円筒埴輪である。普通円筒埴輪は7点がほぼ完形に復元でき、約10点は本来の半分程度を復元することができた。完形に復元できた普通円筒埴輪はいずれも3条突帯4段構成になる。このことから、当古墳に樹立された普通円筒埴輪はいずれも3条突帯4段構成であった可能性が高い。円筒埴輪はいずれも土師質に焼成されており、無黒斑であることから、窯窯で焼成されたものと考えられる。以下においては、出土した円筒埴輪のうち主なものについて述べ、最後にその特徴をまとめることとする。

①普通円筒埴輪

待兼山5号墳において出土した普通円筒埴輪には、外面調整に工具の静止痕を伴うヨコハケ（以下、静止ヨコハケとする）が突帯貼り付け後に施されるもの[31]と、静止ヨコハケが施されずに突帯貼り付け前のタテハケのみのものの両者が認められる。図30には静止ヨコハケの施されるものを図示し、図31から33にはタテハケのみが施されるものを図示した。

また、1998年度に試掘をおこなった際に出土し、すでに報告したもの2点（清家編2001）を図36に再録し、今回改めて資料化した2点と併せて図示した。

図30－22は、SE区から出土し全体の9割が残存し完形に復元できた個体で、3条突帯4段構成になる。第2段と第3段には、円形の透孔がそれぞれ2孔ずつ対向する位置に穿たれており、第2段と第3段で直交するように配置されている。器高42.7cm、口縁部径26.8cm、底部径18.5cmをはかる。各段の高さは、第1段9.5cm、第2段9.5cm、第3段10.5cm、第4段11.0cmであり、第4段を除いてほぼ等しくなるように突帯が貼り付けられている。

形態は、ゆるやかに外反しながら立ち上がることを特徴とする。突帯はいずれも器壁からの高さが0.5～0.6cmであり、端部はわずかに内湾している。

外面調整は、突帯貼り付け前にタテハケが施され、第4段のみ突帯貼り付け後に静止ヨコハケが施されている。静止痕は不明瞭であるものの、静止ヨコハケは約3～4cmの単位で施されている。ハケメの条線密度は、タテハケとヨコハケ共に1cmあたり7条である（図38－3・4）。

また、各突帯から3～4cm下位の外面には、横方向の直線的な痕跡が複数認められる。直線的で角を有するものであることから、こうした痕跡は板状工具の端部が当たった際に残されたものと考えられる。突帯の端部の傾きを見ると、その延長線上にこの痕跡がほぼ対応して認められる。また、ナデにより消されているものの、突帯の端部には面が認められ、その範囲が器壁の個々の痕跡にほぼ対応しているようである。こうしたことから、この痕跡は、突帯を

図29　円筒埴輪の部分名称

貼り付ける際に突帯の端部を板状工具により押さえつけ、その工具の端部が器壁に当たることによって形成されたものと考えられるのである。このように突帯を板状工具によって押さえつける技術は「押圧技法」と呼称されており（川西1978、藤井2003）、「押圧技法」によって突帯下部もしくは上部に板の端部の痕跡が残されることもすでに指摘されている（藤沢2003）。

内面調整には、タテもしくはナナメ方向のユビナデが基本的に施され、口縁部付近のみヨコ方向のユビナデがおこなわれる。各突帯が位置する内面にはユビによって押さえつけられた痕跡が横方向にめぐっている。これは、突帯を貼り付ける際に内面にユビをあてがっていたことから形成されたものであるといえる。

23は、SE区から出土しており、全体の5割、口縁部から2条の突帯までが残存している。本来は、3条突帯4段構成だったものと考えられ、残存する下から2段目には円形の透孔が2孔対向する位置に穿たれている。残存高29.1cm、口縁部径26.6cmをはかる。各段の高さは、下から2段目が10.0cm、最上段が9.0cmであり、それぞれがほぼ等しくなるように突帯が貼り付けられている。

形態は、ゆるやかに外反しながら立ち上がることを特徴とする。突帯はいずれも器壁からの高さが0.7～0.8cmであり、端部はわずかに内湾している。

外面調整には、突帯貼り付け前にタテハケが施され、各段いずれにも突帯貼り付け後に静止ヨコハケが施される。静止痕は不明瞭であるものの、ヨコハケが約3cmごとに弧状の単位を示すことから、静止ヨコハケであることは間違いない。ハケメの条線密度は、タテハケとヨコハケ共に1cmあたり7～8条である。

最上段には、ヨコハケを消すようにタテ方向のナデとみられる痕跡が、2～3cmの間隔をおいて認められる。ナデの痕跡は等間隔かつ5条以上認められることから、手を添えて埴輪を持ち上げた際のものというよりは、意図的にハケメを消すことを目的として施されたものと考えられよう。最上段にヘラ記号が施されていることからも、こうしたタテ方向のナデは意図的に施されたものである可能性が考えられる。

ヘラ記号は、縦に1条の直線が施されたのち、その左側にやや左下がりに4条の直線が加えられる（図38－1）。一般的に「矢羽」といわれるヘラ記号に類似するが、「矢羽」が縦の直線の両側に複数の直線を配置するのに対し、本例は片側のみであり、そうした点は特殊であるといえる。内面調整には、タテもしくはナナメ方向のユビナデが基本的に施され、最上段の内面のみにヨコハケがおこなわれる。ハケメの条線密度は、1cmあたり7条である。下から1番目の突帯が位置する内面には、ユビによって押さえつけた痕跡が横方向にめぐっている。これは、突帯を貼り付ける際に内面にユビをあてがっていたことから形成されたものであるといえる。

24はSW区から出土した口縁部の破片であり、残存高10.0cm、復元口縁部径は26.1cmである。形態は、口縁部にかけて比較的外反の強くなることを特徴とする。口縁部は強いナデによって調整されており、外面において特に顕著に認められる。

外面調整は、タテハケが施されたのちに、静止ヨコハケが施されている。静止痕はやや不明瞭であるものの、5cm単位で認められる。静止ヨコハケは1回の工程によって施されたものであることから、この最大幅である7.5cmが工具の幅にほぼ相当するとみられる。ハケメの条線密度はタテハケ・静止ヨコハケ共に1cmあたり7～8条である。なお、外面の静止ヨコハケを消すようにユビのあたった痕跡が3ヶ所認められる。

内面調整は、ヨコあるいはナナメ方向のハケメが複数認められる。このハケメは左上りに施されることを基本とするが、その方向はそれぞれ一定ではない。また、ハケメの幅は最大でも2.5cmであり、工具の幅は狭いものであったと考えられる。ハケメの条線密度は1cmあたり5条である。

以上のように、外面と内面の調整にそれぞれ用いられたハケメ工具は異なっていた可能性が高い。

25はSE区から出土した円筒埴輪胴部の破片であ

り、2条の突帯と透孔が残存する。残存高15.2cmで突帯間隔は7.5cmとなり、最大径は23.5cmをはかる。形態はほぼ垂直に立ち上がり、突帯は器壁からの高さが0.5～0.6cmとやや低く、端部は平滑となる。器厚は約1.8cmであり、他の個体と比べて厚くなることを特徴とする。

器壁は磨耗が激しく、外面・内面共に調整はほとんど観察できない。外面には、ごく一部においてヨコハケが観察されるのみである。ハケメの条線密度は1cmあたり9条である。内面には、縦方向を基本とするユビナデが施されている。

突帯の剥離した部分においては水平方向に凹線が認められ、突帯の貼り付ける位置の目印として「突帯設定技法」(鐘方1998・辻川1999)がもちいられていたことがわかる。

器形は直線的な形態を呈し器壁が厚い、突帯が低く突帯間隔が狭いことなど、他の円筒埴輪とは特徴が大きく異なっている。こうしたことから、25が普通円筒埴輪である可能性を否定するものではないものの、形象埴輪の基部などの可能性を想定することも可能である。

26はNW区から検出された胴部片である。突帯が1条残存し、その上下に円形の透孔がそれぞれ2孔ずつ対向する位置に穿たれ、上下で直交するように配置されている。残存高14.3cmであり、最大径22.8cmをはかる。器厚は約0.9cmであり、他の個体に比べて薄くなることを特徴とする。

形態は、突帯をはさんで上下段がそれぞれ内湾するように湾曲しながら立ち上がることを特徴とする。突帯は、器壁からの高さが0.6～0.7cmであり、端部はわずかに突出する。

外面調整は、突帯貼り付け前にタテハケが施され、突帯貼り付け後には静止ヨコハケが各段に施されている。ヨコハケは静止痕が不明瞭ではあるものの、ハケメの方向の変化などから静止ヨコハケであると判断できる。上段の透孔の左側においては、ヨコハケを別のヨコハケが消すことから、静止ヨコハケは各段に1回の工程のみではなく、複数が施されたものといえる。ヨコハケの静止痕は約5cm単位で認められる。ハケメの条線密度はタテハケ・静止ヨコハケ共に1cmあたり4～5条である(図38－5)。なお、下段の外面には静止ヨコハケの上から、粘土の粒が数点付着する状況が認められる。

内面調整は、タテハケが確認でき、タテハケの施されない部分にはユビナデが施されている。タテハケの条線密度は、1cmあたり5条である。

27はSE区から検出された、突帯が1条残存している破片である。残存高7.1cmであり、復元最大径21.0cmをはかる。ゆるやかに外反しながら立ち上がる形態となる。突帯は器壁からの高さが約0.8cmとなり、端部はわずかに突出する。

外面調整は、突帯貼り付け前にタテハケが施され、突帯より上段には突帯貼り付け後に静止ヨコハケが施されることを特徴とする。静止ヨコハケは下のものを上のものが消していることから、少なくとも2工程がおこなわれたと考えられる。ヨコハケの静止痕は明瞭ではないものの、約3.5～4.0cmの単位で施されていたとみられる。1センチあたりの条線密度はタテハケが7条、静止ヨコハケが9条である。なお、突帯より下段の外面には、タテハケを消すように、ユビの当たった痕跡が認められる。

内面調整は、ナナメ方向のハケメの施されることを特徴とする。左上りの複数のハケメが消しあっており、ハケメが密に施されていたことがわかる。ハケメの条線密度は1cmあたり8条である。

図31－28はSE区から出土した普通円筒埴輪である。全体の8割が残存し完形に復元できた個体で、3条突帯4段構成になる。第2段と第3段には、円形の透孔がそれぞれ2孔ずつ対向する位置に穿たれており、第2段と第3段で直交するように配置されている。器高40.1cm、口縁部径27.6cm、底部径16.5cmをはかる。各段の高さは、第1段9.5cm、第2段9.5cm、第3段9.5cm、第4段9.0cmであり、それぞれがほぼ等しくなるように突帯が貼り付けられている。

形態は、底部から第3突帯にかけてゆるやかに外反しながら立ち上がり、第3突帯付近においてやや傾きが強くなり口縁部にかけて比較的外反の強くな

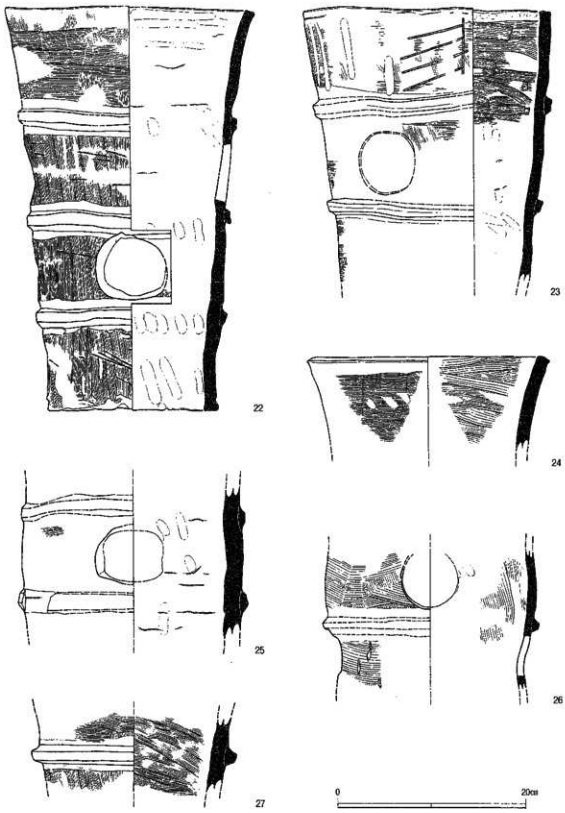


図30　普通円筒埴輪（1）

ることを特徴とする。突帯はいずれも器壁からの高さが0.9cmであり、端部はわずかに突出している。

外面調整は、突帯貼り付け前にタテハケが施されたのみであり、ハケメの条線密度は1cmあたり7条である。第4段には、口縁部にかけてタテハケを消すようにタテ方向の痕跡が認められる。この痕跡はユビによるものと考えられるが、調整として意図的に施されたものかどうかは不明である。ただ、痕跡がいずれもタテ方向に平行するように位置することに着目するならば、埴輪を持ち上げる際に手をあてがったことによる痕跡と考えるのが妥当といえよう。

内面調整には、タテもしくはナナメ方向のユビナデが施されている。底部内面には、板状工具によるとみられる直線的な圧痕が残されている。底部内面の粘土をケズリ取るか、押さえ込んだ痕跡と考えられるが、磨耗が激しいためどちらであるかの確証を得ることはできなかった。ただし、他の個体には底部内面にケズリの施されるものが少なからず認められるため、この痕跡もケズリによるものと考えることができよう。

29はSE出土の全体の8割が残存し完形に復元できた個体で、3条突帯4段構成になる。第2段と第3段には円形の透孔がそれぞれ2孔ずつ対向する位置に穿たれており、第2段と第3段で直交せずに配置されることを特徴とする。器高46.2cm、口縁部径24.3cm、底部径17.0cmをはかる。突帯が水平ではなく波打って貼り付けられることから、方向によって各段の高さがやや異なるものの、計測できた残存部位においては、第1段7.5cm、第2段11.5cm、第3段10.0cm、第4段15.0cmとなる。第1段が低くなること、第4段が高くなることが他の個体と比べて特徴的である。

形態は、底部から口縁部にかけての外反はごくわずかであり、器高が高いこともあって全体的に直線的となる。突帯はいずれも器壁からの高さが0.7cmであり、端部はわずかに内湾する。突帯の下部には器壁との隙間が認められることから、ナデがあまり強く施されなかったことがわかる。突帯の下部は波打つような形状を呈しており、ナデが強く施されていないことから、突帯を成形した際にユビによってつまみ上げた痕跡が残されたものといえる。こうしたつまみ上げて突帯を成形する技術は、特に古墳時代中期に認められるようであり、古墳時代後期に認められる「断続ナデ技法」(川西1978、鍾方・中島1992)とは区別されるものである(藤井2003)。

外面調整は、突帯貼り付け前にタテハケが施されたのみであり、ハケメの条線密度は1cmあたり4～5条と他の個体に比べて粗いものである(図38－6)。第4段には、突帯付近にタテハケの前に施されたと見られるナデが部分的に認められる。タテハケの施された際にハケ工具が器壁に当たりきらずに、ナデの痕跡が残されたものと考えられる。

また、第3段には突帯の下約1cmの器壁には、タテハケを消すように横方向の凹線が認められる。この凹線は突帯設定の基準とするためのものと考えられ、通常は凹線上に突帯を貼り付けるのであるが、29は突帯より約1cm下位に凹線がめぐらされている。突帯が剥離した部分を観察したものの凹線は認められないことから、突帯を貼り付ける位置の目印を付けたものの、それに従わずに突帯を貼り付けたといえる。

内面調整には、タテ方向を基本とするユビナデが全体に施されている。第3段より上には部分的にタテハケと、角を有してへこんだ直線状の痕跡が縦方向に認められる。この痕跡は、角を有する直線状のものであること、同方向のハケメも認められることから、ハケ工具などの板状の工具によって施されたものであると考えられる。底部内面には、横方向にケズリが施されている。ケズリが水平ではなくやや斜め方向に抜けていくように認められることから、円筒埴輪を倒立させてケズリを施したものと考えられる。

29は、形態や製作技術の特徴が他の個体と大きく異なっており、待兼山5号墳における普通円筒埴輪の中でも特異なものである。タテハケの施し方が粗いため前工程のナデの痕跡を残すことや、突帯設定の目印を施しながらそれを利用しないことなど、粗雑に製作されたものといえよう。

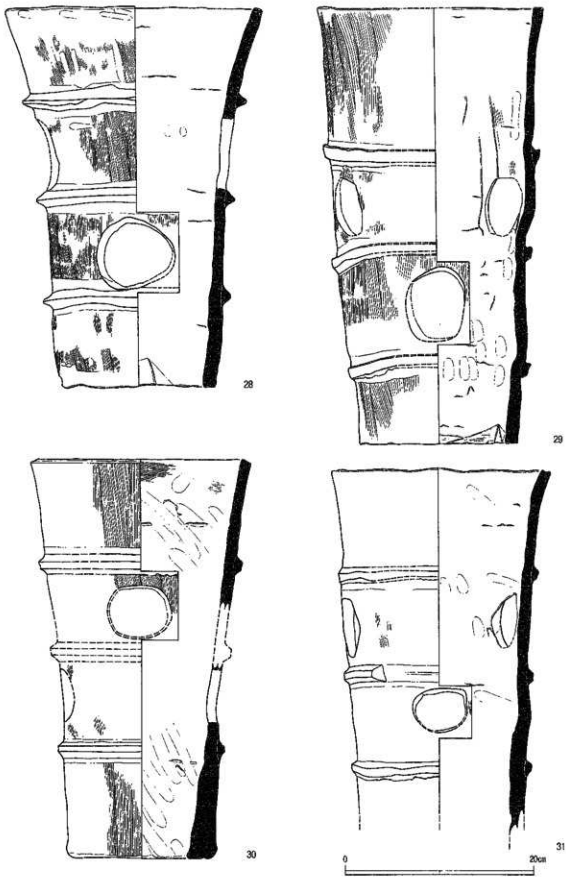


図31　普通円筒埴輪（2）

30はNE区出土の口縁部から1条の突帯と透孔が残存する破片と、底部から1条の突帯と透孔が残存する破片を組合せて、同化したものであり、全体復元は行っていない。器形や色調、その他の特徴が類似することから、同一個体と判断した。3条突帯4段構成になると考えられ、下から2番目の突帯は欠損している。第1段および第4段の高さと、類似する他の個体における突帯間隔をもとに器高を復元するならば、器高は42cm前後となると想定される。復元口縁部径は23.9cm、復元底部径は16.2cmである。第2段と第3段には円形の透孔がそれぞれ2孔ずつ穿たれている。各段の高さは、第1段11.5cmであり、第4段が10.5cmとなる。

形態は、ゆるやかに外反しながら立ち上がるが、直線的になることを特徴としている。底部が器厚2.8cm前後と他の個体に比べて厚くなることが特徴である。

外面調整は、突帯貼り付け前にタテハケを施すのみである。タテハケの条線密度は1cmあたり7条である。内面調整には、ナナメ方向を基本とするユビナデが全体に施されている。口縁部内面のみに、ヨコ方向のハケメを施している。ハケメの条線密度は1cmあたり8条である。

31はNW区から出土している。口縁部から3条の突帯までが残存し、下から2段目と3段目には透孔が認められる。残存する最下段は透孔が認められないことから第1段になるものと考えられ、このことから3条突帯4段構成に復元される。第2段と第3段には、円形の透孔がそれぞれ2孔ずつ対向する位置に穿たれており、第2段と第3段で直交するように配置されている。残存高39.2cm、口縁部径23.6cmをはかる。各段の高さは、第2段9.0cm、第3段9.5cm、第4段10.5cmであり、最上段がやや高いものの、突帯間隔はほぼ等しくなる。

形態は、口縁部にかけてゆるやかに外反しながら立ち上がることを特徴とする。突帯はいずれも器壁からの高さが0.6cmであり、端部はわずかに内湾している。第2突帯と第3突帯の剥離した部分には、その中央にそれぞれ「突帯間隔設定技法」であるの凹線が水平に施されている。

外面調整は、器壁の磨耗が激しくほとんど観察することができないが、突帯貼り付け前にタテハケが施されたのみである。ハケメの条線密度は1cmあたり8条である。内面調整には、タテもしくはナナメ方向のユビナデが施されている。

図32－32はSE区出土である。口縁部から2条の突帯までと下から1段目と2段目には透孔が残存している。透孔は円形のものが対向する位置に2孔穿たれており、下から1段目と2段目で直交するように配置されている。残存する最下段に透孔が認められることから、さらに突帯が1条あったものと考えられ、このことから11は3条突帯4段構成に復元される。残存高は30.2cmであり、口縁部径は29.0cmをはかる。各段の高さは、下から2段目が10.0cm、3段目が10.3cmであり、それぞれがほぼ等しくなるように突帯が貼り付けられたといえる。

形態は、ゆるやかに外反しながら立ち上がり、下から2番目の突帯付近から口縁部にかけて比較的外反の強くなることを特徴とする。突帯はいずれも器壁からの高さが0.7cmであり、端部はわずかに突出している。

外面調整は、突帯貼り付け前にタテハケが施されたのみであり、ハケメの条線密度は1cmあたり7条である。内面調整には、タテもしくはナナメ方向のユビナデが施されている。

33はSE区出土である。口縁部から2条の突帯までが残存し、下から1段目には透孔が残存しているものの、下から2段目には透孔が認められない。透孔は、円形のものが対向する位置に2孔穿たれている。残存する最下段に透孔が認められることから、さらに突帯が1条あったものと考えられ、このことから33は3条突帯4段構成に復元される。当古墳の一般的な円筒埴輪では、第2段と第3段において直交するように透孔が配置されるが、33には第3段に透孔が認められないことから、特徴的な個体であるといえる。残存高は27.2cmであり、復元口縁部径は23.2cmをはかる。各段の高さは、下から2段目が9.5cm、3段目が10.5cmであり、最上段がやや高く

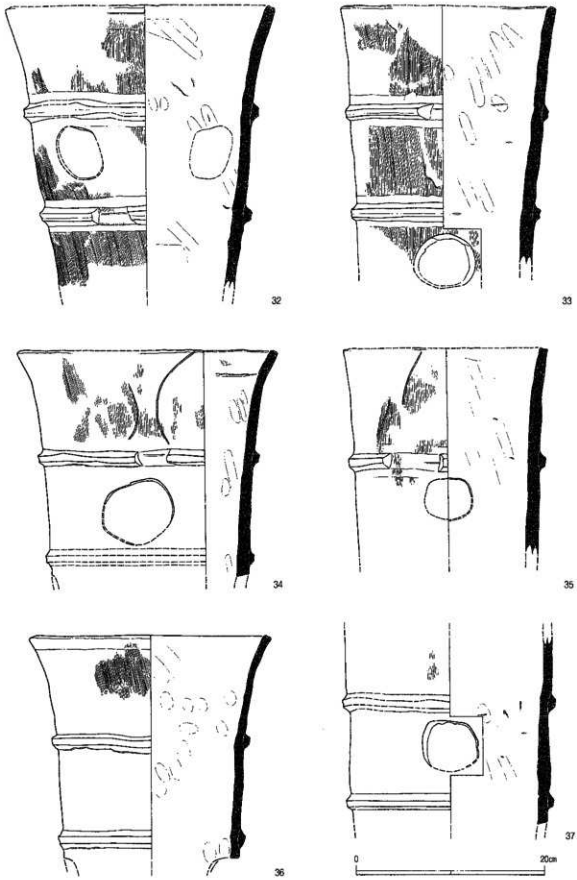


図32　普通円筒埴輪（3）

なる。

形態は、口縁部にかけてゆるやかに外反しながら立ち上がることを特徴とする。突帯の器壁からの高さは下から1条目が0.7cm、2条目が0.5cmである。端部はわずかに内湾している。下から2条目の突帯が剥離した部分には、その中央に「突帯間隔設定技法」である凹線が水平に施されている。

外面調整は、突帯貼り付け前にタテハケが施されたのみであり、ハケメの条線密度は1cmあたり7条である。内面調整には、タテもしくはナナメ方向のユビナデが施されている。

34はNW区出土の資料である。口縁部から2条の突帯までが残存し、下から1段目と2段目には透孔が残存している。透孔は、円形のものが対向する位置に2孔穿たれており、下から1段目と2段目で直交するように配置されている。残存する最下段に透孔が認められることから、さらに突帯が1条あったものと考えられ、このことから34は3条突帯4段構成に復元される。残存高は23.7cmであり、復元口縁部径は28.0cmをはかる。各段の高さは、下から2段目が9.5cm、3段目が10.5cmであり、最上段がやや高くなる。

形態は、口縁部にかけてゆるやかに外反しながら立ち上がり、口縁部付近においてやや外反が強くなることを特徴とする。突帯はいずれも器壁からの高さが0.5cmであり、端部はわずかに内湾している。下から2条目の突帯が剥離した部分には、その中央に「突帯間隔設定技法」である凹線が水平に施されている。

外面調整は、突帯貼り付け前にタテハケが施されたのみであり、ハケメの条線密度は1cmあたり7条である。内面調整には、タテもしくはナナメ方向のユビナデが施されている。

最上段の外面には口縁部から突帯にかけて「)(」状のヘラ記号が施されている。

35はNE区出土で口縁部から1条の突帯までが残存する。下から1段目には透孔が残存しており、透孔は円形のものが対向する位置に2孔穿たれている。残存高は22.0cmであり、最上段の高さが11.0cmとなる。復元口縁部径は22.0cmをはかる。

形態は、口縁部にかけてゆるやかに外反しながら立ち上がることを特徴とする。突帯は器壁からの高さが0.6cmであり、端部はわずかに内湾している。突帯が剥離した部分には、その中央に「突帯間隔設定技法」である凹線が施されている。

外面調整は、突帯貼り付け前にタテハケが施されたのみであり、ハケメの条線密度は1cmあたり7条である。内面調整には、タテもしくはナナメ方向のユビナデが施されている。

34と同様に、最上段の外面に口縁部から突帯にかけて「)(」状のヘラ記号が施されている。

36はNW区出土の資料である。実測図は34と別々に掲載したが、その後の復元作業で両者を一個体の塩釜として復元している（図版15）。口縁部から2条の突帯までが残存し、下から1段目には透孔が残存しているものの、下から2段目には透孔が認められない。透孔は、円形のものが対向する位置に2孔穿たれている。残存する最下段に透孔が認められることから、さらに突帯が1条あったものと考えられ、このことから36は3条突帯4段構成に復元される。残存高は23.5cmであり、復元口縁部径は26.0cmをはかる。各段の高さは、下から2段目が9.5cm、3段目が10.5cmであり、最上段がやや高くなる。

形態は、ゆるやかに外反しながら立ち上がり、下から2条目の突帯付近においてやや外反が強くなることを特徴とする。突帯はいずれも器壁からの高さが0.5cmである。端部はわずかに内湾している。

外面調整は、突帯貼り付け前にタテハケが施されたのみであり、ハケメの条線密度は1cmあたり8条である。内面調整には、タテもしくはナナメ方向のユビナデが施されている。

37はNW区出土の資料である。2条の突帯が残存し、下から1段目と2段目には透孔が残存している。透孔は、円形のものが対向する位置に2孔穿たれており、下から1段目と2段目で直交するように配置されている。残存する最下段に透孔が認められることから、さらに突帯が1条あったものと考えられ、このことから37は3条突帯4段構成に復元される。

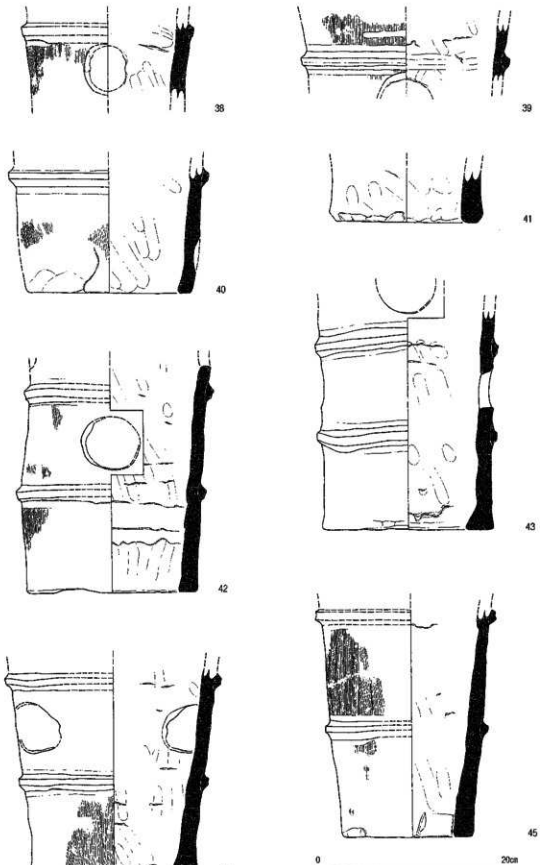


図33　普通円筒埴輪（1）

残存高は22.3cmであり、最大径は22.2cmをはかる。各段の高さは、下から2段目が9.5cmである。形態は、ゆるやかに外反しながら立ち上がることを特徴とする。突帯はいずれも器壁からの高さが0.5cmであり、共に端部はわずかに内湾している。外面調整は、突帯貼り付け前にタテハケが施されたのみであり、ハケメの条線密度は1cmあたり7条である。内面調整には、タテもしくはナナメ方向のユビナデが施されている。

図33－38はNW区出土で1条の突帯が残存し、下から1段目には円形の透孔が残存している。残存高は8.3cmであり、最大径は18.0cmをはかる。形態は、ゆるやかに外反しながら立ち上がることを特徴とする。突帯は器壁からの高さが0.5cmであり、端部はわずかに内湾している。外面調整は突帯貼り付け前にタテハケが施されたのみであり、ハケメの条線密度は1cmあたり7条である。内面調整には、タテもしくはナナメ方向のユビナデが施されている。

39はSE区出土の資料である。1条の突帯が残存し、下から1段目には円形の透孔が残存している。残存高は6.0cmであり、最大径は22.4cmをはかる。形態は、ゆるやかに外反しながら立ち上がることを特徴とする。突帯は器壁からの高さが0.7cmであり、端部はわずかに内湾している。

外面調整は、突帯貼り付け前にタテハケが施されたのみであり、ハケメの条線密度は1cmあたり7条である。下から2段目の外面には、タテハケを消すようにユビナデとみられるヨコ方向の痕跡が認められる。内面調整には、タテもしくはナナメ方向のユビナデが施されている。突帯の位置する内面には、ヨコ方向のナデが連続して施されており、突帯を貼り付けた際にユビをあてがっていたことによるものと考えられる。

40はSE区出土で底部から1条の突帯が残存している。残存高は13.3cmで、第1段高は12.5cmとなり、底部径は17.4cmをはかる。形態は、ゆるやかに外反しながら立ち上がることを特徴とする。突帯は器壁からの高さが0.7cmであり、端部はわずかに内湾している。外面調整は、突帯貼り付け前にタテハケが施されたのみであり、ハケメの条線密度は1cmあたり7条である。内面調整には、タテもしくはナナメ方向のユビナデが施されている。

41はSE区出土の底部破片である。残存高5.6cm、底部径15.2cmをはかる。形態は、ゆるやかに外反しながら立ち上がる。外面調整にはタテハケが施されており、ハケメの条線密度は1cmあたり7条である。外面のタテハケを消すように、ユビのあたった痕跡が数ヶ所認められる。底部外面には、幅2cm・高さ1cm程度の器壁にケズリを施したような平滑な痕跡が連続してめぐっている。この痕跡が底部のさらに下に抜けていく状況が認められることから、円筒埴輪を倒立させて調整が施されたものと考えられる。当古墳において底部外面にこうした調整が施されるものはSE26のみであるが、底部内面にケズリの施されるものは複数点認められることから、そうした個体との関連の中で捉えられるものといえよう。内面調整には、タテもしくはナナメ方向のユビナデが施されている。

42はNW区出土で底部から2条の突帯までが残存し、第2段と第3段には透孔が残存している。透孔は、円形のものが対向する位置に2孔穿たれており、第2段と第3段で直交するように配置されている。第3段に透孔が認められることから、さらに突帯が1条あったものと考えられ、このことからNW04は3条突帯4段構成に復元される。残存高は24.0cmであり、底部径は18.4cmをはかる。各段の高さは、第1段10.5cm、第2段9.5cmであり、第1段がやや高くなる。

形態は、底部からゆるやかに外反しながら立ち上がることを特徴とする。突帯はいずれも器壁からの高さが0.6cmであり、端部はわずかに内湾している。外面調整は、突帯貼り付け前にタテハケが施されたのみであり、ハケメの条線密度は1cmあたり7条である。内面調整には、タテもしくはナナメ方向のユビナデが施されているが、粘土紐の単位が比較的良好に観察できる（図35上）。

43はNW区出土である。底部から2条の突帯までが残存し、第2段と第3段には透孔が観察できる。

透孔は、円形のものが対向する位置に2孔穿たれており、第2段と第3段で直交するように配置されている。第3段に透孔が認められることから、さらに突帯が1条あったものと考えられ、このことから43は3条突帯4段構成に復元される。残存高は23.3cmであり、底部径は18.4cmをはかる。各段の高さは、第1段10.0cm、第2段9.5cmであり、第1段がやや高くなる。

形態は、底部からゆるやかに外反しながら立ち上がることを特徴とする。突帯はいずれも器壁からの高さが0.6cmであり、端部はわずかに内湾している。底部内面には自重により歪んだと考えられる痕跡が認められ、底部の器厚が3cm前後と他の個体に比べて厚くなることを特徴とする

外面調整は、器壁の摩耗が激しく観察できなかった。内面調整には、タテもしくはナナメ方向のユビナデが施されている。

44はNE区出土の資料である。底部から2条の突帯までが残存し、第2段には円形の透孔が残存している。残存高は22.1cmであり、底部径は17.9cmをはかる。各段の高さは、第1段10.0cm、第2段9.5cmであり、第1段がやや高くなる。形態は、底部からゆるやかに外反しながら立ち上がることを特徴とする。突帯はいずれも器壁からの高さが0.5cmであり、端部はわずかに内湾している。

外面調整は、突帯貼り付け前にタテハケが施されたのみであり、ハケメの条線密度は1cmあたり7条である。内面調整には、タテもしくはナナメ方向のユビナデが施されている。

45はNW区出土で底部から2条の突帯までが残存している。破片が部分的であることから、残存する範囲に透孔は確認されない。残存高は24.1cmであり、底部径は13.6cmをはかる。各段の高さは、第1段・第2段共に11.5cmであり、それぞれ等しくなるように突帯が貼り付けられている。

形態は、底部からわずかに外反しながら直線的に立ち上がることを特徴とする。突帯はいずれも器壁からの高さが0.5cmであり、端部はわずかに内湾している。

外面調整は突帯貼り付け前にタテハケが施されたのみであり、ハケメの条線密度は1cmあたり7条である。内面調整には、タテもしくはナナメ方向のユビナデが施されている。底部内面には、板状工具によるとみられるタテ方向の直線的な圧痕が約5cm間隔で認められ、ヨコ方向に移動したとみられる。この痕跡は、自重によって底部内面にはみ出した粘土を削り取った痕跡と考えられる。

図34－46は、普通円筒埴輪の口縁部の破片である。突帯が1条残存しており、その直下には円形の透孔の上部が確認できる。外面にはヘラ記号が認められ、その形状から「)(」状の一部と考えられる。残存高は10.0cm、残存幅は14.1cmをはかり、突帯から口縁部までの高さは、11.0cmである。突帯は器壁からの高さが0.6cmであり、端部は中央部が屈曲するようにやや内湾している。外面調整にはタテハケが施されており、タテハケを消すように上下方向あるいは左右方向のユビによるとみられる痕跡が認められる。タテハケの条線密度は1cmあたり7条である。内面調整には、縦方向のユビナデが施されている。口縁部には、外面・内面共にヨコナデが施されている。

47は突帯の残存する破片であり、突帯直下には透孔の一部が残存している。残存高は8.1cm、残存幅は7.9cmをはかる。突帯は器壁からの高さが0.5cmとやや低く、端部はゆるやかに内湾している。外面調整としては静止ヨコハケが認められる。静止ヨコハケは、上下の2回にわたって施されていることが観察でき、下部のものが先に、上部のものが後に施されている。静止ヨコハケの条線密度は、1cmあたり7～8条である。内面調整は縦方向のユビナデが基本的に認められるが、一部に横方向のユビナデも認められる。

48は突帯の残存する破片であり、残存高6.6cm、残存幅7.3cmをはかる。突帯は器壁からの高さが1.0cmと高く、端部はやや外湾する。突帯の剥離した部分の器壁には、「突帯間隔設定技法」である横方向の凹線が1条認められる（図35下）。外面調整には静止ヨコハケが施されており、突帯の剥離部にはタ

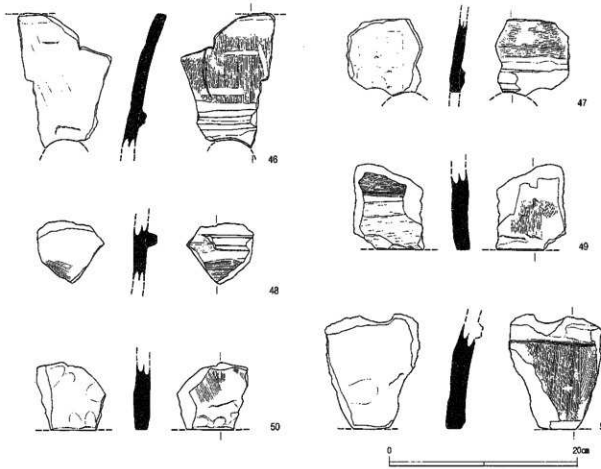


図34　普通円筒埴輪（5）

テハケが認められる。このことから、タテハケの施されたのちに突帯が貼り付けられ、その後に静止ヨコハケの施されたことがわかる。内面調整には、斜め方向のハケメのちにユビナデが施されている。ハケメの条線密度は、外面のタテハケと静止ヨコハケがいずれも1cmあたり8条であり、内面のハケメが1cmあたり10条である。

49は円筒埴輪の底部の破片であり、残存高9.0cm、残存幅7.5cmをはかる。外面調整にはタテハケが施されており、ハケメの条線密度は1cmあたり7～8条である。内面調整には、底部端から約5cmの幅にケズリが施されている（図38－2）。ケズリは基本的に正面から見て左方向に向かっており、残存範囲においては4回に渡って施されていることが確認できた。また、ケズリの上部には横方向のハケメが施されている。ハケメの条線密度は1cmあたり8～9条である。底部内面に認められるケズリは、底部下端の方向へ抜けていくことが観察されるため、ケズリを施す際には円筒埴輪を倒立させ、底部を上に向けてケズリを施したものと考えられる。

50は円筒埴輪の底部の破片であり、残存高6.9cm、残存幅7.2cmをはかる。外面調整にはタテハケが施されており、ハケメの条線密度は1cmあたり7条である。外面の底部付近には、ユビの圧痕が認められる。内面調整にはユビナデが施されており、底部付近にはユビの圧痕がめぐっている。こうした底部付近のユビ圧痕は、底部を成形する日的で外面・内面の両方向からユビによってはさんだことによって形成された可能性も考えられる。

51は円筒埴輪の底部の破片であり、残存高12.0cm、残存幅10.0cmをはかる。残存部位の上端には粘土が剥離した痕跡が認められることから、当該箇所には本来突帯が貼り付けられていたものと考えられる。また、粘土の剥離した痕跡の最下端には水平方向に

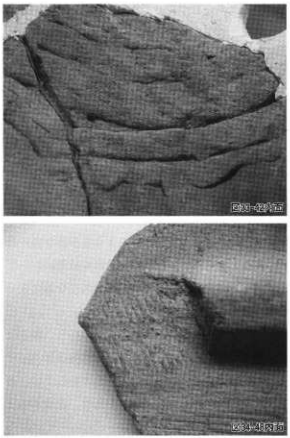


図35　普通円筒埴輪の細部

凹線が認められる。この凹線は「突帯設定技法」の可能性も考えられるが、突帯の剥離部の中心ではなく下端に認められるため、仮に「突帯設定技法」であったとしても突帯は凹線を中心に貼り付けられていたのではない。底部から第1段目突帯までの高さはおよそ10cmであったとみられる。外面調整には、タテハケが施されており、ハケメの条線密度は1cmあたり8条である。内面調整にはユビナデが施されており、底部付近には比較的強く施されたユビの圧痕が認められる。

図36には、1998年度調査時に当古墳から出土した円筒埴輪を掲載した。なお、52と53はすでに報告されているものであるが（清家編2001）、今回改めて報告することとした。54および55については今回新たに図化して報告するものである。

図36－52は、全体の約7割が残存し完形に復元できた個体で3条突帯4段構成になる（清家編2001：p.18図21－5）。今回の調査のSE区とSW区の境界に位置する旧1トレンチ出土である。第2段と第3段には円形の透孔がそれぞれ2孔ずつ対向する位置に穿たれており、第2段と第3段で直交するように配置されている。器高41.1cm、口縁部径20.2cm、底部径14.7cmをはかる。各段の高さは、第1段9.5cm、第2段9.3cm、第3段9.7cm、第4段10.5cmであり、第4段をのぞいてほぼ等しくなるように突帯が貼り付けられている。

形態は、ゆるやかに外反しながら立ち上がることを特徴とする。突帯は、最下段のものが断面三角形になる以外はいずれも断面台形である。器壁からの高さは0.5～0.6cmであり、端部はわずかに内湾している。なお、最上段突帯が剥離した部分には、その中央に「突帯間隔設定技法」である凹線が水平に認められる。

外面調整は、突帯貼り付け前にタテハケが施され、最下段以外には突帯貼り付け後に静止ヨコハケを施す。ただし、静止痕は極めて不明瞭で、認められる箇所もわずかである。ハケメの条線密度は、タテハケとヨコハケ共に1cmあたり6～7条である。

内面調整には、タテもしくはナナメ方向のユビナデが基本的に施され、口縁部付近のみヨコ方向のユビナデが施される。ただし、底部から約2cm上までの範囲には、ヨコ方向に粘土をケズリ取ったような平滑な面が認められる。おそらく、製作工程の最終段階において円筒埴輪を倒立させ、底部内面にケズリが施されたものと考えられる。

53は全体の約5割が残存し完形に復元できた個体で3条突帯4段構成になる（清家編2001：p.18図21－6）。52と同じく今回の調査のSE区とSW区の境界に位置する旧1トレンチ出土である。第2段と第3段には、円形の透孔がそれぞれ2孔ずつ対向する位置に穿たれており、第2段と第3段で直交するように配置されている。器高43.1cm、口縁部径26.3cm、底部径19.6cmをはかる。各段の高さは、第1段9.5cm、第2段9.5cm、第3段9.5cm、第4段10.5cmであり、第4段をのぞいてほぼ等しくなるように突帯が貼り付けられている。

形態は、外反しながら立ち上がり、最上段突帯付近においてやや外反が強くなることを特徴とする。

突帯は、いずれも器壁からの高さが0.6～0.7cmであり、断面台形で端部はわずかに内湾している。なお、最上段突帯が剥離した部分には、その中央に「突帯間隔設定技法」である凹線が水平に施されていることが観察できる。

外面調整は、突帯貼り付け前にタテハケが、最下段以外には突帯貼り付け後に静止ヨコハケがそれぞれ施される。内面調整は、最下段突帯より下にはユビナデが観察でき、それより上にはナナメ方向のハケメが認められる。

53で注目されるのは、ハケメの条線密度である。タテハケは1cmあたり7～8条であり一定だが、外面の静止ヨコハケおよび内面のナナメハケは最上段突帯付近を境としてその様相が大きく異なるのである。つまり、外面の静止ヨコハケの条線密度は、第2・3段が1cmあたり5～6条であり、最上段は9条である。一方、内面のナナメハケは最上段突帯付近より下位において1cmあたり9条であるのに対し、最上段部分においては4～5条である。

以上のように、調整の観察から最上段突帯を境として、内外面共に使用したハケメ工具が異なっていたことがわかる。こうした現象から、おそらく最上段突帯付近を製作した段階において作業を一旦止め、乾燥させる「小工程」(川西1978)をはさんだものと想定されるのである。また、底部から約5cm上までの範囲には、ヨコ方向に粘土をケズリ取ったような平滑な面が認められる。おそらく、製作工程の最終段階において円筒埴輪を倒立させ、底部内面にケズリを施したものと考えられる。

54は、残存する破片の割合がごくわずかであるものの、それぞれの破片の特徴から同一個体と認識し、3条突帯4段構成に復元したものである。前回の旧1トレンチ出土の破片とSE区出土の破片の両者を含む。第2段には円形の透孔が確認できる。器高は約40cm、復元口縁部径約26cm、復元底部径約16cmをそれぞれはかる。

形態は、ゆるやかに外反しながら立ち上がることを特徴とする。突帯は、器壁からの高さが0.8～1.0cmと比較的突出し、端部がわずかに内湾している。

なお、最上段突帯が剥離した部分には、その中央に「突帯間隔設定技法」である凹線が水平に施されていることが観察できる。

外面調整は、突帯貼り付け前にタテハケが施され、最下段以外には突帯貼り付け後に静止ヨコハケが施される。ハケメの条線密度は、タテハケが1cmあたり5～6条であり、ヨコハケは第2段が6～8条、第3段が4～5条である。

内面調整には、タテもしくはナナメ方向のユビナデが施される。底部から約1cm上までの範囲には、ヨコ方向に粘土をケズリ取ったような平滑な面が認められる。おそらく、製作工程の最終段階において円筒埴輪を倒立させ、底部内面にケズリをおこなったものと考えられる。

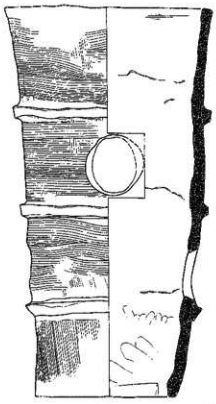
55は、底部から2条の突帯までが残存し、第2段には円形の透孔が残存している。残存高は26.3cmであり、底部径は17.6cmをはかる。各段の高さは、第1段が10.5cm、第2段が10.3cmであり、各段がほぼ等しくなる。

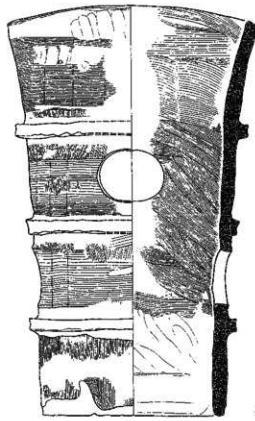
形態は、底部からほぼ直立気味に立ち上がることを特徴とする。突帯はいずれも器壁からの高さが0.6cmであり、端部はわずかに内湾している。
外面調整は、突帯貼り付け前にタテハケが施されたのみであり、ハケメの条線密度は1cmあたり7条である。内面調整には、タテもしくはナナメ方向のユビナデが施されている。　(東影　悠)

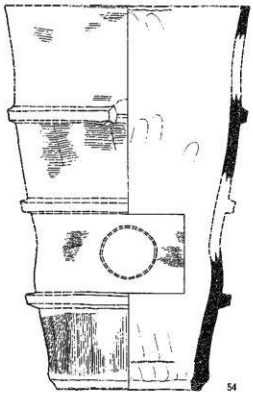
②朝顔形埴輪（図37）

待兼山5号墳においては朝顔形埴輪と確認できた破片はわずかであり、数点のみにとどまる。これは、朝顔形埴輪体部の破片のみでは普通円筒埴輪と区別することができないことがその一因である。しかしながら、当古墳において朝顔形埴輪と特定できる口頸部の破片が非常に少ないこともまた事実である。このことから、当古墳においては普通円筒埴輪に比べて朝顔形埴輪の樹立本数がかなり少なかったものと考えられる。以下において朝顔形埴輪の個々の特徴を述べていくこととする。

56はSE区から出土した口縁部の破片である。小破片であり口縁部の約10分の1のみの残存であるが、







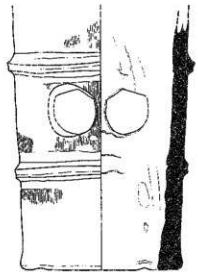


図36　普通円筒埴輪（6）

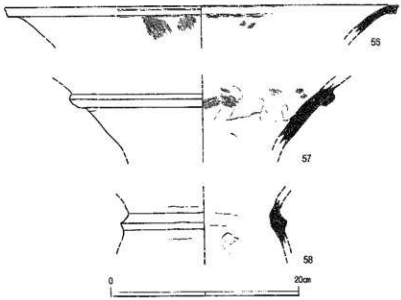


図37　朝顔形埴輪

径を復元し図化した。復元口縁部径は42.1cmとなり、残存高は3.2cmである。口縁部にかけて外反し、口縁端部付近は強いナデが施されることによりさらに大きく外反する形状を呈する。

外面調整はタテハケが施され、口縁部はタテハケののちにヨコ方向のナデによって調整がなされている。タテハケは残存部位においてそれぞれ2～3cm幅の4単位が確認でき、比較的小さい単位でハケメが施されていたことがわかる。

内面調整はヨコ方向にハケメが施されており、残存部中央においては静止痕とみられるタテ方向の圧痕がみられる。口縁部内面にはヨコ方向に強いナデが施されており、やや稜をもつ屈曲が認められる。内外面共にハケメの条線密度は1cmあたり11～12条である。

57はNE区から出土した口縁部突帯の残存する破片である。復元最大径は29.6cmとなり、残存高は7.0cmをはかる。突帯の器壁からの高さは0.7cmである。

器壁は上方に向かって大きくゆるやかに外反していくことを特徴とする。残存部位の下端では、器壁がやや直立気味になることから、この下端が朝顔形埴輪の頸部につながるものと考えられる。

外面は器壁の残存状況が悪く調整は不明である。内面はユビナデが施されたのち、口縁部突帯付近より上部にはヨコ方向のハケメが施される。ハケメは基本的に左上りに施されるが、一部左下がりのものも認められる。ハケメの条線密度は1cmあたり10～11条である。

なお、口縁部突帯より約2cm下部の内面には、粘土紐を接合した痕跡が明瞭に認められる。この部位より上位のみに内面調整としてハケメが施されていることから、この接合痕がいわゆる「小工程」（川西1978）の単位の境界になる可能性が考えられる。

58はNW区から出土した頸部突帯付近の破片である。復元最大径は17.8cmとなり、残存高は5.4cmをはかる。器壁は頸部突帯を境として上下に大きく外反することを特徴とする。突帯は通常みられる円筒埴輪の突帯とは異なり、1つの稜のみもつことから断面三角形を呈する。突帯の器壁からの高さは0.6cmである。

外面調整は、残存部位においては突帯とその上下面へのヨコ方向のナデのみが確認できる。内面調整は頸部より下にややナナメ方向のナデが確認でき、頸部より上にはヨコ方向のナデが施されている。

③円筒埴輪の形態・法量と製作技術

当古墳において出土した普通円筒埴輪のうち、口縁部から底部まで復元できたものは5個体ある。これらは、いずれも3条突帯4段構成に復元され、器高は約40～46cmである。口縁部径は22～29cmをはかり、底部径は概ね16～18.5cmにまとまる。形態は、いずれも底部から口縁部にかけてゆるやかに外反しながら立ち上がる円筒形を呈する。

各段の高さについては、以下のような基準により計測をおこなった。つまり、当古墳において認められる突帯設定技法は「凹線技法」とされるもので、突帯の剝離した器壁にはほぼ必ず1条の凹線が認められる。突帯の剝離した器壁の観察から、突帯は凹線を中心として貼り付けられたことがわかる。また、後に詳述するが、当古墳における突帯設定のための

工具はやや特異なものであると考える。つまり、従来想定されてきたように突帯ごとに下段の突帯上部を基準として凹線を施す（鋳方1998、辻川1999）のではなく、全ての突帯貼り付け位置に一気に凹線を施すようなものと想定している。よって各段の高さについては、底端部もしくは下段の突帯中央から上段の突帯中央までを計測した値とする。この基準をもとに計測したところ、底部高は9.5～11.5cm、突帯間隔は9.5～10cm、口縁部高は10.5～11.5cmに概ねまとまる[2]。

透孔は第2段と第3段で直交する位置に、それぞれ2孔対置して穿孔されることを基本とする。ただし、33のように第2段のみに透孔の配置されるものもごくわずかではあるが存在する[3]。

なお、朝顔形埴輪として認識できたものはいずれも口縁部から頸部にかけての破片であることから、突帯数や突帯間隔など全体の形状を復元する情報を得ることはできなかった。そこで、当該期の一般的な様相を参考にするならば、朝顔形埴輪の胴部は普通円筒埴輪と同様の突帯間隔で4条突帯になると想定される。つまり、普通円筒埴輪の口縁部と朝顔形埴輪の第4突帯が同じ高さで揃うこととなり、朝顔形埴輪は第4突帯より上段が肩部になるものと考えられるのである。

つづいて、円筒埴輪の製作技術の特徴について見ていくこととする。円筒埴輪の製作にあたっては、まずおよそ4～5cm程度の高さの粘土帯により底部を製作する。そこから上部においては、2～3cm前後の粘土紐を円筒形に積み上げていく。

当古墳出土の円筒埴輪において、粘土紐の積み上げをおこなう過程での「小工程」（川西1978）といわれる一定の乾燥期間をおいた作業単位が明確に確認できる個体はごくわずかであり、53においてのみ認識できる。また、普通円筒埴輪において外面調整にタテハケのみが施される個体を観察すると、第3突帯付近においてその上下のタテハケの単位が変化するもの（30・33など）も認められる。直接的な証拠とはなり得ないものの、そうした現象が「小工程」に伴うものである可能性も考えられよう。

当古墳の普通円筒埴輪が3条突帯4段構成の小型のものであることを考慮すれば、「小工程」を有さずに底部から口縁部まで一気に製作された個体が存在する可能性も想定しなければならないが、そうした根拠となりえるような確実な痕跡は認められない。「小工程」を有した可能性の考えられる個体が若干ではあるものの存在することから、当古墳においては基本的に1回の乾燥期間をはさんで製作がおこなわれたものと考えられる。

粘土紐を巻き上げ外面調整にタテハケをほどこしたのちに、突帯を貼り付ける。その基準となるように、突帯貼り付け位置には横方向の凹線をめぐらせる。凹線の施し方については鋳方正樹や辻川哲朗によってその工具と共に復元されているが（鋳方1998、辻川1999）、当古墳の円筒埴輪には底部外面や突帯上面に形成されるはずである工具の当たりと見られる痕跡が認められない。突帯上辺については、工具痕をナデ消した可能性も考えられるものの、ナデ消しきれずに残された工具痕なども全く認められないことから、従来の想定とは異なる工具を使用した可能性が考えられる。

また、口縁部直下に凹線を有する個体も認められ（23など）、おそらく口縁部の基準となる位置を定めたものと考えられる。

前述したように、当古墳の普通円筒埴輪は、第3突帯付近において乾燥期間をはさんだものと考えられる。第3突帯上面のナデあるいは第3突帯設定に伴う凹線がその上部のタテハケに消されるような状況は認められないことから、突帯の設定および貼り付けは、口縁部まで成形し外面調整タテハケを全て施したのちにおこなわれた可能性が高い。

以上のような状況から想定される突帯設定のための工具とは、凹線を施す部分以外が円筒埴輪の器壁に接することなく、かつ第1突帯から口縁部までを一気に設定することの可能なものと考えられる。参考として、大阪府高槻市新池遺跡出土の普通円筒埴輪の突帯設定工具を復元した辻川哲朗の研究が挙げられる（辻川2003）。辻川が想定した工具は、まさにそうした条件を備えるものといえる。新池遺跡出土資

料に認められる突帯設定工具痕は刺突によるものであるが、同様の工具を用いて凹線を施すことも可能であろう。

突帯設定痕に関して待兼山5号墳の円筒埴輪とほぼ同様の状況を呈する奈良県天理市五合瀬古墳の埴輪を検討した鈴木裕明と坂靖も、従来想定されてきたものとは異なる工具の存在する可能性を指摘する（鈴木・坂2007）。その具体的な復元案は提示されていないものの、おそらく五合瀬古墳においても当古墳と同様の工具によって突帯の設定がおこなわれたものと考えられるのではないか。五合瀬古墳は待兼山5号墳とほぼ同時期の築造と考えられることから、古墳時代中期末頃にこのような工具による突帯の設定がおこなわれていた可能性は高い[4]。

なお、29には凹線が施されてはいるものの、凹線とはややずれた位置に突帯を貼り付けている。こうした個体の存在は、技術の複雑化の様相を窺わせる。古墳時代後期になると、凹線による「突帯間隔設定技法」は認められなくなることから（辻川2003）、こうした個体はその過渡的な様相を示すものと考えられるのである。

突帯の貼り付けに関しては、突帯の上面および下面がほぼ指圧痕の幅分波打つように認められることから、粘土紐を指ではさんで押し付けるように貼り付けたものと考えられる。これは、一見するといわゆる「断続ナデ技法A」（鐘方・中尚1992）に類似するが、指の動作や貼り付け方が異なるものである（藤井2003）。また、22には、各突帯の下の器壁に板の端が当たったことによるとみられる複数の圧痕が突帯とほぼ平行にめぐっており、その整形に関しては板状工具による「押圧技法」（川西1978、藤井2003）がもちいられたものと考えられる。ただし、突帯端面は板押圧がおこなわれた後にナデを施されていることから、突帯そのものに板状工具の痕跡を認めることはできない。つまり、22に関しては確実に板押圧をおこなっていると認識できるものの、器壁に板状工具の圧痕を残さない個体に関しては、板押圧が確実におこなわれたのかどうかを判断することは難しい。28などは突帯の端面が突出することから、必ずしも全ての個体に板押圧がおこなわれていたわけではないといえる。

突帯貼り付け後には、突帯間あるいは口縁部にヨコ方向のハケメを施すものも認められる（図30－22～27）。ヨコハケはいずれも静止痕を有するものであり、突帯間を2周ないしは1周[5]することにより調整をおこなう。

内面調整には基本的にタテ方向のユビナデのみを施すことを基本にしているが、一部のものは第3突帯より上部の内面にヨコハケを施す（23、53など）。また、ごく一部の資料に限られるが、タテハケ状に板工具によって調整された痕跡も認められる（29）。

口縁部を成形したのちに普通円筒埴輪は倒立され、自重による底部の歪みを調整した個体も存在する。底部調整は内面へのヨコ方向のケズリが多く（28・29など）、外面に細かい単位でケズリを施すものも1個体のみではあるが認められる（41）。普通円筒埴輪の器高の大きさや、底部内面のケズリが底面方向に抜けていくことなどから、埴輪を倒立させて底部調整をおこなったことは間違いない。ケズリ以外の底部調整は認められないが、底部調整を施さない個体も多い。

④円筒埴輪の分類とその系譜

近年の円筒埴輪研究の進展に伴い、その分類に関する分析方法も精緻になってきている（犬木1995、城倉2005など）。そうしたミクロな研究は参考にすべき点も多いが、円筒埴輪の検討をおこなう際に重要なことは、その全体形を把握し系譜を認識するのに有効な分類をおこなうことである。当古墳のように残存状況のそれほどよくない資料では十分な分析はおこなえないものの、残存状況の比較的良好な資料を分類し、その系譜を検討していくこととする。

待兼山5号墳出土の普通円筒埴輪は、いずれも3条突帯4段構成になるものであり、器高はいずれも42cm前後になる。底部高・突帯間隔・口縁部高についてみると、9.5～10.5cmを基本とするようであるが、個体によってややばらつきが認められる。ただし、このようなばらつきはわずかなものであり、また全体形の判明する資料も少ないため、その微差の中に

規則性を認めることもできない。よって、円筒埴輪の規格をもって分類の指標とすることは困難である。

そこで、円筒埴輪製作技術の中でも特徴的であり、主要な要素と考えられる、外面調整、内面調整、底部調整について検討する。各個体の製作技術の様相をまとめたのが表1である。

表1をみると、その属性の組合せが多様であることがわかる。このため、外面調整・内面調整・底部調整のいずれを優先するかによってその分類の内容が大きく変わっていく。しかしながらある程度の傾向を把握することは可能である。つまり、外面調整に静止ヨコハケを施すものは、内面調整にヨコハケ、底部調整にケズリを施す[6]。また、外面調整タテハケのみの個体は、内面調整にナデを施されるものが大半で、底部調整にはケズリと無調整のものがほぼ同数認められる。

このような傾向から、外面調整と内面調整が相関性をもっていることがわかる。外面調整に静止ヨコハケが施されるものは、タテハケのみのものに比べて均整な器形をしており、胎土も精緻である。また、器壁の色調もその胎土の違いを反映したためか、あるいは焼成の差違とも考えられるが、ヨコハケのものは赤褐色を、タテハケのものは黄褐色を呈する傾向にある。

以上のように、当古墳の円筒埴輪を分類する際には、外面調整が最も有効な指標となり得ると考えられるのである。さらに、内面調整と底部調整によってそれらを細分することが可能といえる。

よって、外面調整をもって分類の指標とし、静止ヨコハケを施すものを1類、タテハケのみのものを2類とする。それらをさらに細分する要素として底部調整に着目するならば、ケズリが施されるものをa類、無調整のものをb類とする。

1a類に分類されるものは、52・53の2個体であり、23・24・27もこれに属する可能性が高い。いっぽう、1b類に分類されるものは22の1個体である。なお、25・26は、全体の形状や器壁の厚さが他の円筒埴輪に比べて特徴的で形象埴輪の基部となる可能性も考えられることから、普通円筒埴輪の分類によっては位置づけられないと考えた。

2a類に位置づけられるものとしては28・29・44・45が挙げられる。2a類には、突帯が非常に高くその端部が内湾しない28、器高が大きく全体の形状と突帯間隔が他の個体と異なり、内面にタテハケ状の工具痕の認められる29など特徴的な個体が顕著である[7]。

2b類には、30・40・42・43が位置づけられる。ほぼ全形の判明する資料は30のみであるものの、先述した2a類が特徴的な一群であったのに対して、2b類は斉一的な様相を示す一群であるといえる。このような様相を参考にするならば、底部が残存していないことから分類が困難であった31～36なども2b類に位置づけられる可能性が高い。

2類の器形に着目すると、第3突帯から口縁部にかけて大きく外反する個体と、ほぼ直立する個体がそれぞれ認められることがわかる。この器形の違いが系譜の差違につながる可能性も考えられたが、そうした器形の異なる34・35が共に口縁部外面に同様の「)(」状のヘラ記号を有していることから、器形の違いを系譜の差違として認識することは困難と判断した。断片的な資料であることから十分な検討はできないものの、同一系譜の中における工人個人の差違などを反映したものという可能性も考えられよう。

表1　円筒埴輪の属性比較

属性	番号	外面調整		内面調整		底部調整	
		ヨコハケ	タテハケ	ヨコハケ	ナデ	ケズリ	無調整
1a	H36-52	■		■		■	
	H36-53	■		■		■	
1a?	H30-23	■		■			
	H30-24	■		■			
	H30-27	■		■			
1b	H30-22	■		■			■
2a	H31-28		■		■	■	
	H31-29		■	タテ		■	
	H33-44		■		■	■	
	H33-45		■		■	■	
2b	H31-30		■		■		■
	H33-40		■		■		■
	H33-42		■		■		■
	H33-43		■		■		■
2b?	H31-31		■		■		
	H32-32		■		■		
	H32-33		■		■		
	H32-34		■		■		
	H32-35		■		■		
	H32-36		■		■		

また、2類の透孔の配置についてみると、33は第3段に透孔を有さないという点において他の個体と異なる特徴をもつものである。先述したように、口縁部や突帯の形状、突帯間隔などの規格からは、底部調整を有さない2b類と類似することから、2b類の中においてさらに細分される可能性が考えられるものとして位置づけられよう。

なお、待兼山5号墳出土埴輪におけるハケメの差違を観察したところ、その条線密度の異なりによって大きく5種類のハケメを確認することができた[8]。特徴的なものは、29のタテハケにもちいられた1cmあたり4～5条と条線が非常に粗いものである。その他の普通円筒埴輪には1cmあたり7～8条のハケメが施されており、その差違を識別することはできなかった。ただし、53のヨコハケには1cmあたり5～6条のものと9条のものがもちいられており、1つの普通円筒埴輪の製作にあたって複数のハケメ工具が使用されたことが判明している（清家編2001）。また、朝顔形埴輪には1cmあたり10～12cmと条線密度の細かいハケメが施されていたことが観察される。

以上のように、待兼山5号墳において出土した普通円筒埴輪は、外面調整の特徴から大きく2つに分類が可能であり、さらに底部調整によってそれぞれを細分することが可能である。このような分類は、製作者の系譜を反映している可能性が高い。つまり当古墳は径20mの小規模な円墳ではあるものの、複数の系譜の工人によって製作された円筒埴輪が供給されていたと考えられるのである。

待兼山5号墳の円筒埴輪の系譜についてはすでに検討がなされており、清家章は猪名川流域の円筒埴輪の様相を検討する中で当古墳には大王権力の関与があったと想定する（清家2001・2005）。これは、当古墳の円筒埴輪の規格と外面調整に注目し、猪名川流域における円筒埴輪の規格の在り方を分析した結果指摘されたものである。こうした指摘は、当古墳の円筒埴輪の位置づけを考える上で重要であり、今回はこうした視点をさらに進めるために円筒埴輪に認められる製作技術の様相からその系譜について検討をおこなう。

まず、普通円筒埴輪の規格について検討をおこなう。当古墳の普通円筒埴輪の器高や突帯間隔は、若干のばらつきが認められるものの、すでに指摘されているように古墳時代中期の猪名川流域に一貫して認められる規格が採用されている（清家2001・2005）。つまり、待兼山5号墳における埴輪生産は、当地域の秩序に則っておこなわれている。

一方、製作技術に関して見てみると、当古墳出土の円筒埴輪には底部内面にケズリの施されるという特徴がある。待兼山5号墳の位置する猪名川流域において、底部調整にケズリの施される例は現在のところ確認できない。そのため、円筒埴輪の製作技術の系譜は他地域に求める必要があるといえる。猪名川流域からさらに視野を広げてみると、当古墳の最も近隣で底部にケズリを施す例が北河内地域一帯に散見される。例として、大阪府寝屋川市太秦高塚古墳出土埴輪などが挙げられる（寝屋川市教育委員会2002）。これらは、いずれも待兼山5号墳とほぼ同時期に位置づけられるものである。

規格と形態の点からその系譜関係を検証していく。待兼山5号墳と製作技術と規格の点でもっとも類似性が高いのは、太秦高塚古墳例である。太秦高塚古墳出土埴輪は、器高約42cmで、突帯間隔などの規格も待兼山5号墳例とほぼ同一のものである。製作技術と規格がほぼ共通することから、待兼山5号墳と太秦高塚古墳にそれぞれ供給された埴輪には何らかの関連のあった可能性も考えられる。太秦高塚古墳において、円筒埴輪の外面調整として認められるのはタテハケのみであり、静止ヨコハケは認められない。待兼山5号墳において外面調整に静止ヨコハケを施す円筒埴輪が認められることから、それを仮に時期差とすれば待兼山5号墳がやや先行することになる。ただし、静止ヨコハケを有する埴輪の有無が必ずしも時期差に置き換えられるとは限らない。また、底部調整にケズリを施すものが猪名川流域には当古墳例以外は確認されず、北河内地域に一定数存在することも事実であり、製作技術の系譜が北河内地域に求められる可能性も十分にある。

ところで、底部調整のケズリは、古墳時代中期の

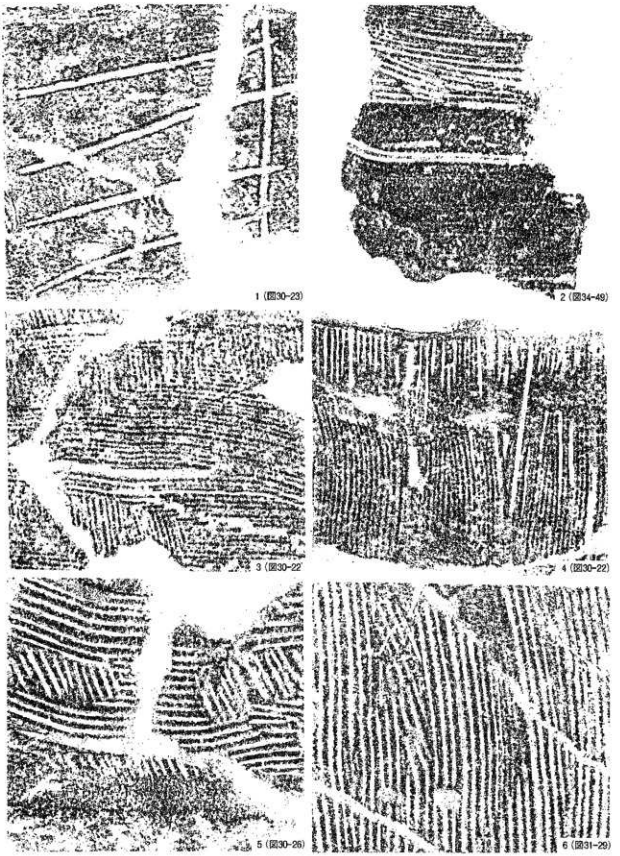


図38　円筒埴輪拓本

大和地域において中小古墳への供給を目的とした埴輪生産の中で生み出され、大和地域から各地に波及したとの指摘がある（坂1998・2007）。古墳時代中期においては、確かに大和地域においてそうした底部調整としてのケズリがよく認められ、そうした技術が他地域に拡散したことも十分に想定される。ただし、底部内面のケズリは、待兼山5号墳より遡る時期の古市古墳群などにおいても認められるようであり（上田1992）、先述したように北河内地域一帯においても認められる。このことから、当古墳における底部調整のケズリは、必ずしも大和地域との系譜関係のみで捉えられるものとはいえない。円筒埴輪の形態や規格、製作技術などを複合的に捉えるならば、北河内地域との共通性が高いものと考える。それをさらに遡れば、古市古墳群にその系譜が求められることは、地理的環境からいっても十分に考えられるのではないだろうか。

当古墳に供給された円筒埴輪は、規格こそ猪名川流域における秩序に則っているものの、その製作技術は新たに他地域から導入されたものである。これまで指摘されてきたようにその背景に大王権力の関与を認めるかどうかは別にしても、待兼山5号墳の埴輪の系譜関係を今回の検討によってより明確にできたと考える。こうした埴輪供給の様相は、形象埴輪を含めてさらに検討していくことが必要である[9]。

⑤円筒埴輪の編年的位置づけ

それでは次に円筒埴輪の編年的位置づけについて考えていくこととする。

まず、これまで検討されてきた待兼山5号墳の編年的位置づけを示しておく。当古墳は、円筒埴輪の規格および外面調整ヨコハケ・タテハケの割合、さらに猪名川流域における他古墳の円筒埴輪との比較など複合的な検討により、TK208型式期に位置づけられるとされてきた（清家編2001、清家2005）。

確かに前回の調査時においては外面調整ヨコハケの円筒埴輪が多く出土したものの、今回の調査においてはタテハケのものが多く出土しており、タテハケの割合は格段に増加している。外面調整のヨコハケとタテハケの割合が必ずしも編年的位置づけの絶対的な指標となるわけではないものの、おおよその傾向を示していることは間違いない（大野・松村1992）。さらに、当古墳の円筒埴輪における突帯間隔についてもその規格にはばらつきが見られ、「突帯設定技法」による凹線を施しながらそれとは異なる位置に突帯を貼り付けるなど、技術の粗雑化が認められる。以上のような点から、待兼山5号墳出土の円筒埴輪についてはあらためてその位置づけを検討する必要があるものと考えるのである。

まず、編年の位置づけをする際に研究史上重要とされてきた焼成と外面調整に着目して述べる。当古墳出土の円筒埴輪は、いずれの個体も器壁に黒斑の認められないことから、窖窯導入以後のものであることがわかる。また、外面調整に着目するならば、静止ヨコハケを施すものとタテハケのみのものが共伴しており、川西宏幸の分類・編年（川西1978）に照らし合わせれば、それぞれⅣ群とⅤ群に位置づけられる。ただし、Ⅳ群とⅤ群を単純にⅣ期・Ⅴ期と対照させて区分することは適当でなく、Ⅳ群とⅤ群が1古墳内において共伴することは当古墳のみならず一般的に確認される。また、近年の詳細な円筒埴輪研究を参考にするならば、単に外面調整の差違のみでⅣ群・Ⅴ群と区分するのではなく、製作技術にもとづいた区分をする必要があるといえるのである。

円筒埴輪において、外面調整タテハケのみのものとヨコハケを施すものが共伴するという事実はすでに早くから指摘がなされており（大野・松村1992）、外面調整の差違が単純に時期差には置き換えられないことを示している。つまり、長原古墳群などにおいては窖窯焼成で外面調整タテハケのみの円筒埴輪がすでに田辺昭三による須恵器編年のTK73型式期（田辺1966）より確認されており（積山1992）、このことから当古墳出土円筒埴輪の製作時期は外面調整の差違のみでは特定できないことを示している。ただし、外面調整に静止ヨコハケを施す円筒埴輪はおおむねTK23・47型式期まで認められるが、それ以降はほぼ認められない。よって、当古墳出土の円筒埴輪がTK208型式期からTK23・47型式期にかけて製作されたことは、ほぼ間違いない。そこで、以

下においては主に製作技術に着目することにより、その特徴からさらに時期を限定する要素を抽出していくこととする。

厳密な位置づけを考える上で、円筒埴輪の製作技術の復元をおこなった藤井幸司の研究が参考になる（藤井2003）。先述したように、当古墳において認められる普通円筒埴輪は、底部から第3突帯付近までを製作した段階において「小土棹」といわれる製作休止段階、つまり乾燥期間を1度おいたものと考えられるのである。このような製作技術は、TK208型式期以降に認められるという。

さらに突帯の製作技術も円筒埴輪の編年的位置づけを考える上で重要となってくる。当古墳出土資料に認められるような突帯下部の凹凸は、「2本の指で粘土紐を摘んで、器壁に対して垂直方向に押圧し、離した痕跡」（藤井2003：p.36）であり、V群に典型的ないわゆる「断続ナデ技法」（川西1978）とは異なる貼付け方法であるという。また、突帯端部を板オサエによって成形する「押圧技法」（川西1978）も当古墳においては認められる。先述した突帯の貼り付け方法と「押圧技法」は、共にIV群に確認できる技術でありTK23型式期以降は減少しTK47型式期まで存続する製作技術であるという（藤井2003）。以上のような藤井の研究を参考にするならば、当古墳の円筒埴輪はTK23・47型式期に位置づけられるといえる。

また、凹線による「突帯設定技法」が認められることも重要な編年的指標となる。辻川哲朗によれば、V群円筒埴輪は製作工程の省略が顕在化した一群であり、「突帯設定技法」が基本的には認められなくなるという（辻川2003）。当古墳においては、突帯の剥離部が観察できた円筒埴輪の全ての個体に凹線による「突帯設定技法」が確認できた。つまり、当古墳の外面調整タテハケの円筒埴輪をいわゆるV群とした場合、V群の中でも古い要素を示すものといえるのである。

以上のように、当古墳における外面調整タテハケの一群は外面調整からV群に位置づけられる要素を示すものの、製作技術に着目するならば複数の点からむしろIV群の要素を有しているといえる[25]。これは、当古墳において外面調整ヨコハケのIV群に位置づけられる普通円筒埴輪が共伴していることと密接に関わっているのであろう。これら外面調整タテハケのみの一群はIV群からV群への過渡的様相を示すものといえ、よって先行研究を参考にすれば待兼山5号墳において出土した円筒埴輪はTK23型式期に位置づけるのが最も妥当と考えられるのである。

（東影　悠）

（4）須恵器（図39～41、図版17－3）

①坏蓋（図39－59～62）

59は復元口径9.6cm、器高3.8cmの坏蓋である。復元口径が小さいため、壺蓋等の可能性もある。焼成は良好で、黄灰色を呈する。天井部と口縁部の境界には1条の凹線がめぐり、口縁端部には明瞭な段をもつ。外面には天井部1／2程度の範囲に回転ヘラケズリが施される。

60は口径が11.8cmに復元できる坏蓋である。焼成は良好で、内外面とも灰色を呈する。天井部と口縁部の境界には稜線がめぐり、口縁端部には明瞭な段をもつ。天井部の欠損によりヘラケズリの範囲は不明である。61は復元口径12.0cmの坏蓋である。内外面共に灰白色を呈し、焼成は不良である。天井部と口縁部を界する稜線はやや鈍く、凹線化が進む。口縁端部には明瞭な段をもつ。天井部は残存しておらず、ヘラケズリの範囲は不明である。62は復元口径

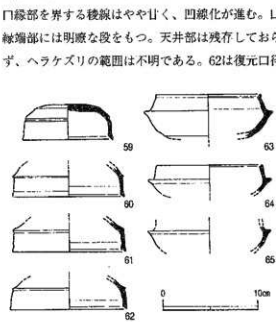


図39　須恵器（1）

12.4cmの蓋坏である。内外面共に灰白色を呈し、焼成は不良である。天井部と口縁部の境界には稜線がめぐるが、やや凹線化が進んでいる。口縁端部には明瞭な段をもつ。天井部は欠損しておりヘラケズリ等の調整については不明である。なお、接合することができず別個体と認識したが、焼成状況などの類似から61と同一個体である可能性も考えられる。

口径が12cm前後であること、口縁端部に段を有すること、そして天井部と口縁部の境に施される稜線がやや凹線化していることから、これらの坏蓋はおおよそ陶邑編年（H辺1966）TK23型式期・桜井谷編年（木下1982）Ⅰ期２段階に比定できる。

②坏身（図39－63～65）

63は口径が11.0cmに復元できる坏身である。焼成は良好で、灰色を呈する。たちあがりは1.8cm程の長さを持ち、受け部からやや内傾しながら伸びて口縁端部付近で大きく外反する。口縁端部には明瞭な段を有する。底部が欠損しているが、体部はまるみをもちながら底部にいたるものと考えられる。底部１／２程度の範囲に同転ヘラケズリが施される。64は復元口径11.0cmの坏身である。青灰色を呈し、硬く焼きしまっている。たちあがりの長さは1.6cmで、口縁端部まで直線的に伸びる。口縁端部には沈線がめぐる。底部の欠損によりヘラケズリの範囲は不明である。65は受け部径が12.8cmに復元できる坏身である。内外面共に灰白色を呈し、焼成は不良である。口縁部および底部が欠損する小片であり詳細は不明である。口径が11cm前後であり、たちあがりが比較的長く直線的に伸び、端部には沈線や段を有することから、陶邑編年TK23型式期・桜井谷編年Ⅰ期２段階に該当する遺物と考えられる。

③器台（図40－66～67）

66は器台坏部の体部と考えられる破片である。復元できる傾きから、おそらく脚部下半にあたる破片と想定される。焼成は良好で灰色を呈する。外面にはタタキのちにカキメによる器面調整が加えられ、内面には当て具痕が残る。67は器台脚部で、脚部最大径は14.6cmに復元できる。焼成は良好で、外面は自然釉の付着により

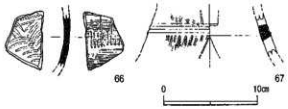


図40　須恵器（２）

灰色を、内面は暗灰色を呈する。２条の凹線を挟んで上段には四角形、下段には三角形のスカシ穴があけられている。外面には波状文もみられる。

いずれも小片であるため残存状況が悪く時期を比定することは難しいが、先述の坏類より後出する可能性がある。

④高坏（図41－68～71）

68は無蓋高坏の坏部片である。内外面とも青灰色を呈し硬く焼きしまっている。外面には２条の稜線がめぐり、その間に波状文が施される。径復元は難しく、短脚・長脚高坏のいずれの坏部であるかは不明である。ただ、器壁が最大で５mmとやや厚く、短脚高坏に伴う坏部である可能性が高い。69は高坏の脚端部と考えられる小破片で、復元底部径は9.6cmである。焼成は良好で、青灰色を呈する。脚端部は端部上端にナデが加えられるものの、まるくおさめられている。70は高坏の坏部と脚部との接合部分の破片である。内外面とも青灰色を呈し、硬く焼きしまっている。外面には脚部剝離の痕跡が残っており、長方形スカシ穴が３方向にあけられていたものと想定される。また、坏部にはヘラケズリが施されるが、脚部接合時のナデ調整により単位や方向については不明である。坏部内面は回転ナデがなされるが、底部中央には不定方向ナデがみられる。71は70と同様に、高坏の坏部と脚部との接合部分にあたる資料で

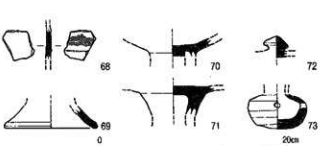


図41　須恵器（３）

ある。内外面とも灰白色を呈し、焼成は不良である。磨耗により詳細は不明であるが、回転ナデによる調整がなされているものと考えられる。

68は淡状文をもつ短脚高坏であることから陶邑編年TK23型式期からTK47型式期・桜井谷編年1期2段階から1期3段階に比定できる。

69は端部形態の特徴から、70は長方形のスカシ穴を3方向に施すことから陶邑編年TK43型式期・桜井谷編年Ⅱ期3段階以降に属する可能性が高い。71については残存状況が悪く、時期比定は難しい。器壁が最大で1.8cmと非常に厚く、古墳時代に属さない可能性もあろう。

⑤**甕**（図41－72）

つまみ部分のみが残存した甕である。青灰色を呈し、硬く焼きしまっている。つまみは宝珠形で、最大幅2.6cm、最大長1.0cmをはかる。外面はナデ調整が施され、内面には不定方向ナデがみられる。いわゆる宝珠つまみを有することから7世紀以降に属すると考えられる。

⑥**鍋**（図41－73）

体部最大径6.2cmに復元できるはそうである。頸部は欠損し体部のみが残存する。内外面とも灰白色を呈し、焼成は良好である。体部は扁平で、中央よりやや上寄りに径6㎜の穿孔をもつ。また、内面中央付近には穿孔する際にもちいる棒状の工具痕と穿孔部分の粘土が残る。体部下半には回転ヘラケズリが施されている。

体部が小さく扁平であることから、陶邑編年TK43からTK209型式期・桜井谷編年Ⅱ期4段階からⅡ期5段階に該当する資料と考えられる。

（出村美沙）

（5）土師器ほか（図42、図版18－1）

土師器壺1点（74）、椀2点（75・76）、韓式系土器片1点（77）が古墳周溝より出土している。以下、器種ごとにその特徴を詳細に述べていきたい。

①**壺**（図42－74）

74はNW区周溝埋土墳輪集中直下から出土した土師器壺である。粘性のシルト層上に張り付くように出土したため、取り上げには困難を伴った。そのため、口縁部から底部まで部分的にしか残存しておらず、胴上部と底部が接合しないために図上にて復元を行った。

口縁部は約1／3が残存しており、復元口縁部径は19.4cmをはかる。口縁部形状は厚くやや直線的であり、端部は外方につまみ出す。こうした口縁部は、布留式壺に通有な内湾・肥厚する口縁部が退化したものである。底部形状は丸底を呈する。器高に関しては、口縁部高が4cmと高いことや復元口縁部径から、比較的大型の壺であると推定される。口縁部の特徴から類例をあたると、大阪府茨木市清水遺跡3次3D区5層（合田ほか2000）、京都府大山崎町下植野南遺跡SXF212出土資料（石井ほか2004）などが参考となり、器高35cm前後の長胴のものであると考えられる。外面調整はハケを施し、内面はケズリによって仕上げている。底部内面には指の関節痕が顕著に認められ、布留式甕の製作技術と共通する。焼成は良好、煮沸痕跡は認められず、未使用である。

②**椀**（図42－75・76）

椀は共にSE区周溝埋土から出土している。75は復元口縁部径14.0cm、器高6.5cm、76は口縁部径13.2cm、器高5.2cmをはかり、体部から口縁部にかけてゆるやかに外反する。75が丸底であるのに対し、76はやや平底気味で75に比べて浅い。後者は浅いため坏とすべきかもしれない。内外面の調整は、部分的に摩耗しているが平滑なナデによって仕上げられている。両者とも焼成は良好である。

以上の特徴をもつ土師器椀は、須恵器型式でいうTK73～216型式期以降、数量的に増加することが指摘されている（辻1999：p.355）。待兼山5号墳近隣の集落遺跡では大阪府豊中市蛍池東遺跡住居2、26（合川ほか1997）、同上津島遺跡流路（服部1997）などに類例が認められる。

③**韓式系土器**（図42－77、図版17－3）

77はSE区周溝検出中に出土した軟質の韓式系土器片である。残存長6.0cm、残存幅6.1cm、器厚1.5cmをはかる。その形状から長胴甕である可能性が高い。内外面共に磨耗が激しいが、外面に格子タタキ

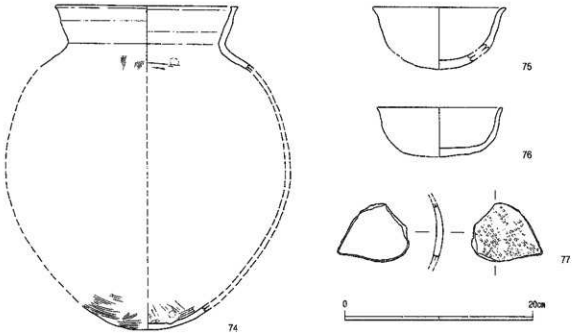


図42　土師器と韓式系土器

口が認められ、内面はナデ調整によって平滑に仕上げられる。格子タタキ目は朝鮮半島全域に認められるが、全羅道に多い傾向がある（寺井2006）。待兼山5号墳近隣においては、大阪府豊中市上津島遺跡土坑2（服部1997）、同吹田市五反島遺跡河道Ⅰ上層（加藤ほか2003）に、格子タタキをもつ韓式系長胴壺が出土している。

以上、待兼山5号墳周濠から出土した土師器・韓式系土器について、その特徴を述べてきた。古墳時代中期以降の土師器は、甕や椀は型式変化が緩慢であるため（辻1999）、待兼山5号墳の時期を考える上で参考になる情報は少ない。

また、古墳時代中期における小古墳には、周濠から土師器が出土する古墳が知られている。摂津地域において、長胴甕を出土した古墳は兵庫県神戸市住吉宮町古墳群第32次調査7号墳（安田ほか2001）、椀では同5次SX07（渋辺1990）、同第9次調査2号墳（丹治ほか1994、安田ほか2001）などが類例として挙げられる。ただし、須恵器に比べて、土師器椀が出土する類例は少ない。小古墳における葬送儀礼の場において、須恵器と土師器の供膳器がどのような関係にあったのか、今後検討する必要があるといえよう。（中久保辰夫）

4　待兼山5号墳の調査成果

（1）古墳の築造時期

今回の調査によって、待兼山5号墳は古墳時代中期後半に築造された直径15mの円墳であることが明らかになった。須恵器出土点数が少ないため明瞭さを欠くものの、いずれの埴輪にも黒斑は認められず、円筒埴輪は少数の静止ヨコハケを施すものと多数のタテハケのみのもので占められている点、さらに①乾燥期間を一度おいた製作手順、②突帯貼り付け方法の特徴、③凹線による突帯設定技法、といった製作技法の特徴からTK23型式期併行に該当すると推定できたのである（本書：p.59）。この年代観は少数出土した須恵器のそれとも矛盾しない。したがって、本古墳はTK23型式期に築造されたと考えられる。また、埋葬施設は後世の削平のために残存しておらず、葺石は葺かれていなかったと考えられるが、多数の埴輪が出土したことは特筆される。埴輪は円筒埴輪のみならず、馬曳を伴う馬形埴輪、建物形埴輪、蓋形埴輪などが出土しており、いずれも中期後葉という円筒埴輪や須恵器から導きだされた年代観と矛盾しない形象埴輪群である。

（2）墳丘における葬送儀礼

多くの墳輪類は周溝埋土から検出されており、その配置を復元することは難しいが、周濠NW区において馬と馬曳に近接して建物形埴輪が出土したことは重要である。すでに紹介したように直径20mの円墳である堺市陵南赤山古墳の造出部埴輪区画内では建物形埴輪や人物形埴輪と共に馬形埴輪の樹立が確認されている（堀蔵文化財研究会1985：p.207）。待兼山５号墳でも墳丘裾部において同様の配列がなされていた可能性があろう。

また、NW区埴輪群の直下より細片となった土師器甕が検出されている一方で、須恵器の出土は解無であり、むしろ標高の高い山側のSE区において坏身や土師器椀などが複数出土している点も興味深い。いずれも周溝出土とはいえ、待兼山５号墳では須恵器、土師器の供膳具を用いた儀礼とは別に形象埴輪の配置がなされていた可能性がある。

（3）小円墳の出現とその背景

前回の報告では、TK208型式期の方墳であるとした待兼山５号墳が[ix]TK23型式期に築造された小円墳であることが判明したことも大きな成果である。

これは和田晴吾が提唱した古墳時代後期前半（TK23型式期）における円形を主体とする古式群集墳の出現と合致するといえよう。和田はそれ以前の方形を主体とする小古墳の「被葬者にまではまだ直接的な政権の影響は及んでいない」（和田1992：p.328）とし、「ヤマト政権が推し進めた支配方式の基本は共同体を対象にその首長層の把握と序列化にあり、政権の手はいまだ首長の在地支配の内部にまでは及ばず、有力家長層は弥生時代以来の伝統をもとに在地の政治社会関係のなかで小型低方墳を造りつづけた」と述べた（和田1992：p.333）。そして、その後の古式群集墳の成立こそが、それ以前には「地域首長のもとにあった有力家長層の掌握」であり、「ヤマト政権による有力家長層掌握の証」と理解したのである（和田1992：p.333）。

ただし、当地域すなわち大阪府北部における小古墳の動向を考えるうえでは次の２点に注意が必要である。まず、１点目は盟主墳の縮小化に呼応して、小方墳が増加するという現象が中期の早い時期に進行するという点である。代表的な事例としては桜塚古墳群があげられよう。また、三島地域における古墳の築造動向もこのような理解が可能かもしれない（野上1970）。淀川北岸の古墳時代中期において大田茶臼山を除くと墳長60m以上の前方後円墳は一基も築造されなくなり[x]、墳長30～60mクラスの盟主墳と墳長20m以下の小古墳という関係が成立するのだ（寺前2001）。

２点目は方形と円形との差異から古墳の性格の違いを抽出しにくいという事実である。当地域における小円墳は前期に遡る事例として直径15mの高槻市尼ヶ谷Ａ１号墳（高槻市教育委員会1985）があげられ、その後も岡本山Ａ３号墳（高槻市教育委員会1985）や掛塚３号墳（高槻市教育委員会1996）あるいは奥坂Ａ４号墳など20mに満たない円墳が継続的に存在する。一方で、併行する時期に小方墳が主体となる総持寺古墳群などが営まれている。たしかに茨木市春日１号墳（茨木市教育委員会1997）や蛍池北古墳群（豊中市史編さん委員会2005）の様相をみるならば、中期後葉以降、待兼山古墳群を含め、小円墳の増加は肯定できるかもしれない。しかし、これら中期後葉の小円墳の存在のみをもって、それ以前の小円墳と小方墳との性格に違いをみいだすことは、少なくとも大阪北部地域では困難なのが実態であろう。

ここで興味深いのは大型前方後円墳に付随するいわゆる陪塚の墳形の変遷である。百舌鳥・古市古墳群および佐紀盾列古墳群における陪塚の変遷をまとめた山田幸弘によれば、大仙陵古墳や市野山古墳段階で円墳が陪塚の主流となるという（山田1996）。

単純な対比は危険であるが、円墳と方墳を二項対立的に捉えるのではなく、方墳が徐々に円墳化していく過程を墳丘格差や副葬品、外表施設の質量そして王権の意図した墳形秩序の典型ともいえる陪塚構造などとの比較を通して、検討する必要があろう。

（寺前直人）

注

(1)川西宏幸の設定したB種ヨコハケに該当する（川西1978）。

(2)例外として底部高7.5cm、突帯間隔11.5cm、口縁部高9cmとなるものも一部であるが認められ、これらには規格が厳密に採用されなかった可能性が考えられる。ただし、いずれも2cm程度であるので、それ程大きな差異ではない。

(3)これらは、いずれも口縁部から2条の突帯まで残存するものであり、全形を復元できたわけではない。しかしながら、残存部位の形態や法量が3条突帯4段構成の完形品と類似することから、これらも3条突帯4段構成に復元されるという想定は妥当であるといえよう。

(4)待兼山5号墳出土埴輪は新池埴輪窯出土埴輪よりも先行するものと考えられることから、この工具は本来凹線を施すことを目的として作り出されたのではないか。当古墳および五合瀬古墳の普通円筒埴輪は共に3条突帯4段構成であり底部径が20cmに満たない径の小さなものである。それに対し、新池窯の普通円筒埴輪は底部径が33cmあり、大型のものである。大型の円筒埴輪に凹線を一周させる手間を簡略化するために、新池窯においては刺突がおこなわれたとも考えられる。このような想定はあくまでも見通しを述べたに過ぎず十分な検討をおこなった上での結論ではないことから、この点については今後の課題としたい。

(5)ヨコハケが2周のものはBb種ヨコハケ、1周のものはBc種ヨコハケとそれぞれ分類されるものである（一瀬1988）。

(6)22は外面調整に静止ヨコハケが施されるものの、内面調整はナデのみで底部調整もおこなわれない。ただし、他の静止ヨコハケを施される個体と異なって静止ヨコハケが口縁部のみに施されており、おそらく省略と考えられるが、特徴的なあり方を示す。そうした点から、本来は内面にヨコハケを施し底部調整にケズリが施される系統であったものが、内面および底部も調整の省略によって特異な様相を呈したと考える。

(7)出土した破片の中でもこうした特徴を有するものは多くを占めないが、28や29といった特徴的なものがほぼ完形に近く復元されたことは重要であり、このような円筒埴輪が当古墳に一定量供給されたことを示すといえる。

(8)当古墳出土資料については、いわゆる『同工品分析』（犬木1995、城倉2005など）といわれるような精緻な分析をおこなえるような状況にはないことから、ハケメ工具の復元により工人個人を特定するというような分類ではない。

(9)先述したように、当古墳における馬形埴輪、馬曳形埴輪の類例は大和盆地中央部において認められる。

(10)このようなⅣ群・Ⅴ群という定義と区分については、今後より詳細に検討していくことが必要といえる。

(11)高槻市前塚古墳は中期前半の帆立貝式古墳であり墳長は94mをはかる。このような前方後円墳以外の墳形を考慮しても、中期中葉以降では墳長60m以上の古墳は大田茶臼山古墳以外見当たらないのである。

参考文献

青柳泰介　1995「家形埴輪の製作技法について」『日本の美術』No. 348家形はにわ、至文堂

天野末喜・松村隆文　1992「近畿」『古墳時代の研究』第9巻古墳Ⅲ埴輪、雄山閣出版

伊賀高弘　1989「上人ケ平古墳群の蓋形埴輪－14号墳出土の蓋形埴輪を中心に－」『京都府埋蔵文化財情報』第32号、京都府埋蔵文化財調査研究センター

石井清司ほか　2004『下植野南遺跡群Ⅱ』京都府遺跡調査報告書第35冊、京都府埋蔵文化財調査研究センター

石井清司・有井広幸編　1997『瓦谷古墳群』京都府遺跡調査報告書第23冊、京都府埋蔵文化財調査研究センター

一瀬和夫　1988「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要・Ⅴ』、大阪府教育委員会

犬木　努　1995「下総型埴輪基礎考－埴輪同工品論序説－」『埴輪研究会誌』第1号、埴輪研究会

茨木市教育委員会　1997『平成8年度発掘調査概報』

岩崎茂編　1997『八ノ坪遺跡発掘調査報告書』守山市文化財調査報告書第65冊、守山市教育委員会

上田　睦　1992「古市古墳群出土円筒埴輪の様相」『古代文化』第44巻第9号、古代学協会

上田　睦　2003「古墳時代中期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第5号、埴輪検討会

大阪府教育委員会　2005『総持寺遺跡－古墳時代中期の小規模古墳群の調査－』大阪府埋蔵文化財調査報告2004－2

大阪府文化財調査研究センター　2001『大阪府埋蔵文化財研究会（第43回）資料』
奥和之・酒井泰子　2000『安威遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告1999-6、大阪府教育委員会
小栗明彦　2007「鉢形埴輪の地域色発現－畿内の事例－」『埴輪論叢』第6号、埴輪検討会
笹井敏光・吉田珠巳　1992「古市古墳群の埴輪の規格性」『古代文化』第44巻第9号、古代学協会
香芝市教育委員会　2006『下田東遺跡発掘調査概報Ⅰ－平成13・14年度…』香芝市埋蔵文化財発掘調査概報21
加藤志月ほか　2003『吹田市五反島遺跡発掘調査報告書－南吹山下水処理場増設に伴う発掘調査報告書－　遺物編』吹田市教育委員会
鍔方正樹　1998「中期古墳の円筒埴輪」『史跡大安寺旧境内Ⅰ』、奈良市教育委員会
鐘方正樹・中島和彦　1992「音原東遺跡埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1991』、奈良市教育委員会
河内一浩　2003「古墳時代後期における円筒形埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第4号、埴輪検討会
川西宏幸　1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、日本考古学会
川西市教育委員会　1989『川西市栄根遺跡－第19次発掘調査報告－』
川村和子　1997「5世紀代の壺形埴輪の変遷」『西高山古墳－古市古墳群の調査研究報告Ⅲ－』藤井寺市文化財報告第16集、藤井寺市教育委員会
木下　亘　1982「摂津桜井谷古窯跡群における須恵器編年」『桜井谷窯跡群2－17窯跡』、小路窯跡遺跡調査団
京都府埋蔵文化財調査研究センター　1991『上人ケ平遺跡』京都府遺跡調査報告書第15冊
京都府埋蔵文化財調査研究センター　1995『京都府遺跡調査概報』第61冊
合田幸美ほか　1997「蛍池東遺跡（3・4）」『宮の前遺跡・蛍池東遺跡・麻山藩陣屋跡・蛍池遺跡・蛍池南地区・蛍池西遺跡1993－1996年度発掘調査報告書－大阪モノレール蛍池東線・内線建設に伴う発掘調査－』大阪府文化財調査研究センター調査報告書第22集1、大阪府文化財調査研究センター
合田幸美ほか　2000『溝咋遺跡（その3・4）－茨木・学園町地区埋蔵文化財発掘調査3次・4次報告書－』大阪府文化財調査研究センター調査報告書第50集、大阪府文化財調査研究センター
小浜　成　2003「円筒埴輪の観察視点と編年方法－畿内円筒埴輪編年に向けて－」『埴輪論叢』第4号、埴輪検討会
西藤清秀・林部均　1989「四条古墳発掘調査概要」『日本考古学年報』40、日本考古学協会
城倉正祥　2005「埴輪生産の多様性－1古墳出土埴輪の多様性に関する基礎的研究－」『古代文化』第57巻第10号、古代学協会
新庄町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所　1988『寺口忍海古墳群』新庄町文化財調査報告第1冊
鈴木裕明・坂靖　2007「五台瀬古墳出土埴輪の検討」『マバカ古墳周辺の調査』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第99冊、奈良県立橿原考古学研究所
清家章編　2001『稗業山遺跡』Ⅲ、大阪大学埋蔵文化財調査委員会
清家　章　2001「猪名川左岸域における小古墳の意義－埴輪の規格から見た埴輪支配－」『稗業山遺跡』Ⅲ、大阪大学埋蔵文化財調査委員会
清家　章　2005「猪名川左岸域の円筒埴輪と首長系譜の変動」『海南史学』第43号、高知海南史学会
積山　洋　1992「長原古墳群と難波地域の円筒埴輪」『古代文化』第44巻第9号、古代学協会
高槻市教育委員会　1985『昭和56・57・58年度高槻市文化財年報』
高槻市教育委員会1996『平成6年度高槻市文化財年報』
高橋克壽　1988「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』第71巻第2号、史学研究会
高橋克壽　1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第2号、考古学研究会
田上雅則　1987「桜塚古墳群の円筒埴輪」『摂津豊中大塚古墳』、豊中市文化財調査報告第20集、豊中市教育委員会
田中秀和　1988「畿内における壺形埴輪の検討」『ヒストリア』第118号、大阪歴史学会
出辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』、平安学園考古学クラブ
田原本町教育委員会　2005『笹鉾山古墳群第1～5次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要19
丹治康明ほか　1994『住吉宮町遺跡　第9次調査』昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
辻　美紀　1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学　－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』大阪大学考古学研究室

辻川哲朗　1999「円筒埴輪の突帯設定技法の復元－埴輪受容形態検討の基礎作業として－」『埴輪論叢』第1号、埴輪検討会

辻川哲朗　2003「突帯－突帯間隔設定技法を中心として－」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』、第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会

都出比呂志　1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』史学篇第22号、大阪大学文学部

寺井　誠　2006「土器から探る長原遺跡渡来人の故郷」『シンポジウム　古墳時代に生きた渡来人の軌跡　－長原遺跡・瓜破北遺跡・上私部遺跡を中心に－　要旨集』大阪府文化財センター・大阪市文化財協会・大阪歴史博物館

寺前直人　2001「古墳時代中期における倭王権の地域支配方式－豊島地域における小古墳の検討をとおして－」『待兼山遺跡Ⅳ』大阪大学埋蔵文化財調査委員会

土河良和　2003「和泉の円筒埴輪編年概観」『埴輪論叢』第5号、埴輪検討会

豊中市史編さん委員会　2005『新修豊中市史』第4巻考古

奈良県立橿原考古学研究所　2007「奈良県遺跡調査概報（第一分冊）」2006年

寝屋川市教育委員会　2002『歴史シンポジウム太秦高塚古墳とその時代－北河内の古墳時代を考える－』

野上丈助　1970「摂河泉における古墳群の形成とその特質（1）・（2）」『考古学研究』第16巻第3・4号　考古学研究会

服部聡志　1997『大阪府豊中市上津島遺跡第5次発掘調査報告』豊中市文化財調査報告第41集、上津島遺跡調査団・豊中市教育委員会

土生田純之　1988「三鳩豊野墓僧工事区域の調査」『書陵部紀要』第39号、宮内庁書陵部

坂　靖　1988「埴輪の規格性」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズⅣ、同志社大学考古学シリーズ刊行会

坂　靖　1998「古墳時代中期の埴輪生産をめぐって－埴輪文化の地域性・その後－」『中期古墳の展開と変革－5世紀における政治的・社会的変化の具体相（1）－』、第41回埋蔵文化財研究集会実行委員会

坂　靖　2007「円筒埴輪技法の検討」『八条遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第94冊、奈良県立橿原考古学研究所

東影　悠　2006「近畿地方における尾張型埴輪の様相」『川西市勝福寺古墳発掘調査報告』、川西市教育委員会

福永伸哉　2004「畿内北部地域における前方後円墳の展開と消滅過程」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』平成13～15年度科学研究費補助金基盤研究（B）（1）研究成果報告書、大阪大学大学院文学研究科

藤井幸司　2003「円筒埴輪製作技術の復元的研究－窯焼成導入以降を中心に－」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』、第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会

藤井幸司教育委員会　1993『新版古市古墳群』

藤沢　敦　2003「東北地方の円筒埴輪－技法・系譜・伝播－」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』、第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会

埋蔵文化財研究会1985『形象埴輪の出土状況』第17回埋蔵文化財研究会資料

松本武彦　1990「盾形墳輪の変遷と画期－畿内を中心に－」『島居前古墳－総括編－』大阪大学文学部考古学研究報告第1冊、大阪大学文学部考古学研究室

宮崎泰史　2005「動物埴輪と動物供犠」『王権と儀礼』大阪府立近つ飛鳥博物館図録39、大阪府立近つ飛鳥博物館

安田滋ほか　2001『住吉宮町古墳群第24次・第32次発掘調査報告書－阪神淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』神戸市教育委員会

山田弘幸　1996「鉄器埋納の謎－西墓山古墳の語るもの－」『倭の五王の時代』藤井寺市教育委員会

若松良一　1992「人物・動物埴輪」『古墳時代の研究』第9巻、雄山閣出版

和田一之輔　2005「摂津猪名川流域における古墳時代後期の埴輪供給関係」『杉葉山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』、大阪大学考古学研究室

和田晴吾　1992「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』第5巻　角川書店

渡辺　昇　1990『坊ヶ塚遺跡（住吉宮町遺跡群Ⅱ）』兵庫県　教育委員会

第3章　中・近世墓群の調査

1　中・近世墓群の遺構

(1) 概　要

持兼山遺跡においては、これまでも各所において瓦器等をはじめとする歴史時代の遺物の出土が知られていた。ただし、明確な遺構として検出できたのは当調査地点東150mの8世紀代の土器棺があげられる程度であり、その具体的様相は不明であった。ただし、本調査地点周辺からも、15世紀代の瓦質羽釜片が出土しており（清家編2001：p.35）、従来から中世集落の存在に注意が促されていた。

前章と重複するが、中世遺構面の検出に至る経過について今一度確認しておきたい。中世遺構の多くは調査区南西では標高44.5m前後の範囲において図5の第6層を検出する過程で確認され、それ以外の箇所では近・現代の攪乱層を除去する段階で古墳周溝と同一面で検出されている。これは本調査地点の地形が南西に低く北東に高い地形であり、南西部以外の中世以降の遺構面はその後の開発等によりすでに削平されているからである。

中世遺構の存在は調査開始後9日目のことであった。機械掘削に併行して医療短期技術大学の建物基礎やゴミ穴を先行して掘削する過程で、あるゴミ穴から瓦器片が出土したことにより、その存在が認識できた。ただし、それ以前に現代の攪乱として掘削してしまった「攪乱」のなかには遺物の出土をみないものの人頭大の礫石が密接した遺構（SK73）も存在していた。十分な記録を残せぬまま、この遺構の掘削を進めてしまったことは悔やまれる。

その後、近現代の攪乱と歴史時代の遺構の峻別を慎重に進めていったが、コンクリート片や銅線が混じる焼土坑がある一方で、これらが混じらず炭と共に1cm四方の骨片が数多く混じる遺構やきわめて浅い落ち込みの存在が認識できるようになった。

これら骨片のなかに①人のものとみられる指骨が含まれること、②被熱の際に生じる連続的な亀裂が観察できること、から火葬に伴う人骨であることが推定できた[1]。

それでは、図43をみながら本調査区における中世以降に属する遺構のありかたについて確認していこう。多くの遺構は調査区南西より検出されている（図版7－2）。SK1～4、7～17には土坑状のものと柱穴と考えられるものがあったが、検討をかさねたものの深さ等が著しく異なるため、掘立柱建物等を想定できるような配列を復元するには至らなかった。ただし、後述する火葬遺構に付随して簡易な建造物があった可能性は否定できない。

一方、調査区中央東側からは調査区外に広がるSK31をはじめ、多数の炭片および骨片が出土した遺構が認められる。本調査区西側は現在、高さ約3mのコンクリート擁壁が設置され、標高約50mの位置には駐輪場が設置されている。従来の試掘等では尾根斜面部を削平し、平坦面が形成されていたと認識してきた箇所であるが、おそらくはより上位の尾根の地山土を掘削した土砂が厚さ3m以上にわたり堆積しており、その下位にはSK31の中世遺構の続きや、墓域群が広がっている可能性が高いことが判明した。今後の当該箇所の開発には注意が必要である。また、調査区北端中央付近からは楯形木棺（SK60）が検出されており、同時期の土器が出土している落ち込み（SX30）が調査区北西から南西に広がっていることも注目できよう。

また、火葬墓と関連する土坑は大きく2種類に分けられる。それは土坑壁が極度に被熱し埋土に炭片や骨片が混じる土坑と、それほど被熱していないが埋土に炭片や骨片を含む土坑である。前者は遺体を荼毘に付した火葬場の可能性が高く、後者は遺体の焼成をその場で行った後、そのまま遺骨を納めた埋葬施設であったと区分できるかもしれない。むろん、後者は単なる火葬場所であった可能性もあり、最終的な納骨場所であるかの判断は遺構の残存が必ずし

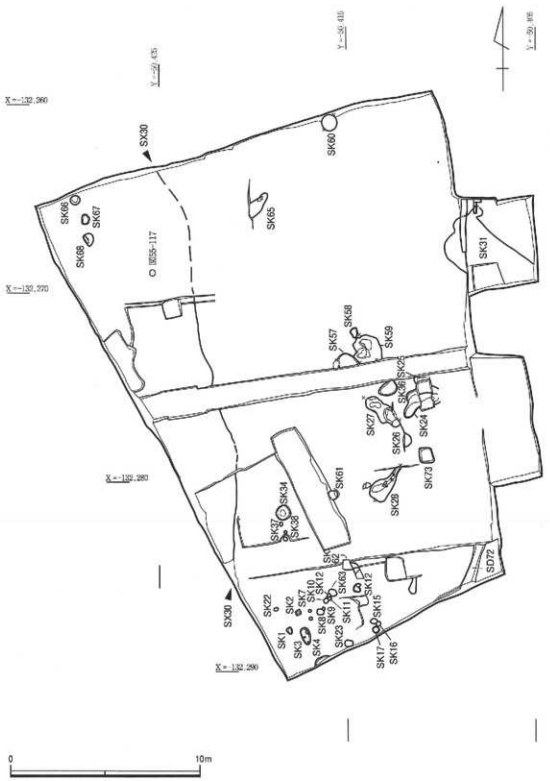


図43　中近世遺構の分布

も良好でない本遺跡では判断は難しい。ただし、600基以上に及ぶ中近世墓群が調査された大阪府茨木市渠橋山南墳墓群（市本ほか2000）でも、骨蔵器などの施設をもつ埋葬施設はわずかであり、多くは土坑内に簡易な石組みなどをもって埋葬施設としているものがほとんどであった。したがって、本遺跡でも羽釜（図50－91・92）などを用いた骨蔵器も用いられていたと推定できるが、それらは必ずしも多くなかったと考えられる。

後に詳述するように出土土器から火葬墓群は、13世紀前半から15世紀の間まで継続して営まれた可能性が高い。さらにSK31における火葬灰の集積規模から判断して、かなりの大規模な中世墓地群であったと判断できる。

また、近世に属する遺物（101～108）も少なからず出土している点には注意が必要である。とくに種形木棺であるSK60は18世紀後半に埋置されたとみられ、中世墓地群とは現状では数百年の断絶を考えざる得ない。（寺前直人）

（2）火葬灰集積土坑（図44）

調査区東端において検出された灰集積土坑（SK31）は、全長6ｍ以上となる大規模なものである（図版8－1）。この遺構については保存が決定したため、一部分を掘削したにすぎないが、わずかな断割内からは数千の焼骨片と共に13世紀代に遡る瓦器椀（図48）や土師器皿（図49－83・84）、鉄釘などが出土している。遺構は調査区外にのびるため全容は不明である。

検出面で幅2.46m、深さ0.50mをはかり、全長は6ｍ以上とみられる。埋土である図44の3層には多くの炭片・骨片が含まれ、直上からは鉄釘（図54－115）なども出土している。これらの様相から、この土坑は火葬による廃棄物を集積した土坑とみられる。また、3層からは意骨として利用された可能性もある羽釜（図50－91）が検出されている。

（3）火葬場および火葬墓遺構（図45）

SK27（図45－1）は、長辺約2.2m、短辺0.7m程度の不定型な縦長の土坑である。土坑中央底部のもっとも深い範囲に強い被熱痕がみられ、そのほかの部分にも被熱部が認められる。もっとも被熱が激しい付近からはほぼ完形の土師器皿（図49－85）が出土している（図版8－2）。副葬品であろうか。埋土は炭片や骨片を含む。深さは20cm程度しか残存していなかった。両側の浅くなった部分は掘遺部であると考えられる。

SK28（図45－2）は長辺2.2m程度、短辺は0.3～1.0mの北側に向かってすぼまる縦長の土坑である（図版8－3）。土坑がすぼまった部分で深さ0.1m、幅がもっとも拡大した部分で深さ0.2mをはかる。幅広の部分でわずかながら被熱が認められる。土坑の底部は長辺2.0m、短辺0.2～0.3m程度の長方形であり、長径15cm程度の亜角礫が据えつけられている。これらは、棺台として利用された可能性が指摘できる。したがって、すぼまった箇所は掘遺と考えられようか。埋土からは、骨片や炭が出土して

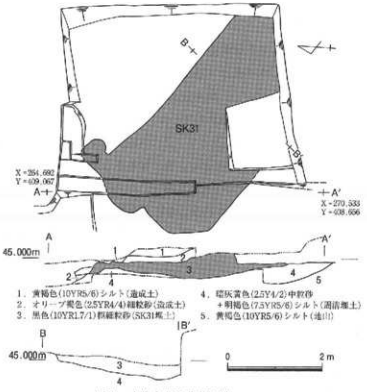


図44　中世火葬灰集積土坑

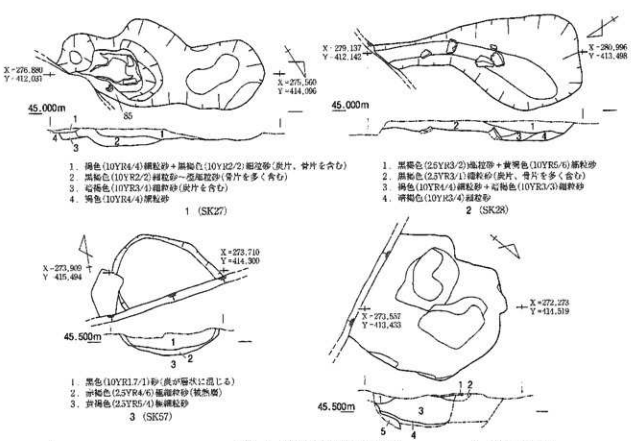


図45　中世火葬墓遺構

いる。

SK57（図45－3）は長辺1ｍ程度、短辺0.6m程度の半円形の土坑である（図版9－1・2）。次に述べるSK59と隣接する。阪南短期大学の建物基礎により南半はすでに破壊されていた。0.2m程度の第1層には、炭が層状に混じり、これ自体が幾重もの被熱層を形成する。第2層は、強く被熱を受けており、地山が被熱を受けて変色・硬化したと考えられる。SK27やSK28よりも、はるかに被熱度合いが強いことから、繰り返し使用された火葬施設である可能性が高い。

SK59（図45－4）は、長径1.5m（被熱土が確認できる範囲）をはかる長方形の土坑である（図版9－3・4）。ただし、その周囲には被熱層が広がり、西側のSK57とも接する。切り合い関係としては、SK57が新しい。強く被熱を受け、硬化した土が底部で検出されていることから、SK57と同様、繰り返し火葬施設として使用された可能性が高い。中央被熱部の埋土からは骨片が数多く出土している。

周囲にも被熱土が広がっていたことから、本来はSK57とあわせて、繰り返し使用された火葬場の底部を形成していたとみられる。また、火葬灰を集積したSK31とはおよそ7ｍ離れているが、一連の施設であると考えて良かろう。　（木村理恵）

（4）桶形木棺墓（図46）

調査区北東からは長径1.08mの土坑が標高44.35m付近で検出され（SK60）、内部からは底部径70cmの木製桶が検出された（図版9－5～7）。木製桶の残存高は約37cmであり、底板には7～14cmの板材6枚が用いられていた。また、南側が攪乱により破壊されていたが、幅5～16cmの17枚の側板が遺存していた。本来は22枚程度の側板が用いられていたとみられる。埋土はおおよそ2層に分けられる。現地

表面下0.4mより検出された灰オリーブ中粒砂は現代の造成土とほぼ一連であるが、長径20cm程度の川原石と五輪塔の一部である直径25cmの花崗岩製水輪部分（図55－116）が検出されている。また、桶内埋土である黄褐色細粒砂にも多数の河原石が検出されており、染付碗片（図52－103）と完形の小型碗（108）が検出されている。なお、桶内土については洗浄を実施したが骨片等の情報は確認できなかった。ただし、検出状況等からこの木製桶は成人を葬った桶形木棺であったと判断できる。共伴した土器から判断するとSK60は18世紀後半以降に営まれたとみられる。なお、小型碗はいわゆる紅皿であるとみられる。紅皿を副葬した近世墓の類例としては大阪市中央区難波宮跡で確認された事例などがあげられよう（豆谷1998）。

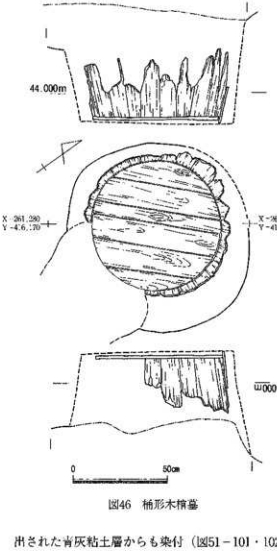


図46　桶形木棺墓

（5）ため池状遺構（図47）

調査区の北西辺には調査区内で検出できた限り、長さ22m、幅7m以上の大規模な落ち込みの広がりが確認された（SX30）。埋土である図47－5層は調査区北端付近では厚さ1.5m近くに達する。落ち込み層は標高41.5mから開始され、底では標高43.0mに達し、古墳の周溝西端部分を破壊している。埋土は青灰色の極細粒砂からシルトで占められ（図版9－8）、一気に埋め立てられたかのようである。埋土である3層からは18世紀後半以降の染付（図51－104・106）が出土している。また、SX30掘削前に堆積したとみられる図47の6層およびその下より検出された青灰粘土層からも染付（図51－101・102）や五輪塔水輪部（図55－117）が出土している。したがって、掘削自体は近世であるとみられ、近世絵図に残るため池との関連で理解できる可能性が高い。（寺前直人）

1．褐色（5YR4/6）粗砂
2．褐色（10YR4/4）中粒砂
3．灰オリーブ灰色（2.5GY7/1）粘土（SX30埋土）
4．黄褐色（2.5Y5/4）極粗砂＋赤黄色（2.5Y6/2）極粗砂（SX30崩土）
5．明オリーブ灰色（2.5Y7/1）シルト
＋黄褐色（2.5Y5/6）極粗砂＋灰色（5Y5/1）粘土（SX30埋土）
6．褐色（7.5YR4/4）粗中砂～シルト
7．暗灰オリーブ色（2.5GY4/1）シルト～粘土（泥質の湖沼堆積物）
8．褐色（10YR4/6）極粗砂～シルト（植物片混じる）（周溝埋土）
9．暗灰オリーブ色（2.5GY4/1）極粗砂～中粒砂
10．褐色（10YR4/6）粗粒砂～中粒砂（地山）
図47　SX30土層断面図

2　中・近世墓群の遺物

（1）土器・土製品

①瓦器（図48、図版18－2）

SK31を中心にまとまった数の瓦器椀片が出土している。SK31から出土した瓦器椀はほとんどが細片で出土したために、口縁部から底部まで残存している資料はない。しかし、焼成や製作技術から同一個体と考えられるものについては図上で復元した（図48－78・79）。また、残存部が1／2に満たない個体は、回転復元によって図化している。以下では残存状況が比較的良好な資料を中心に、その特徴を述べる。

78は口径15.8cm、器高4.9cmに復元される。口縁部の残存率は1／7である。口縁端部は外反し、丸くおさめる。高台は1／2残存し、高台径5.2cmをはかる。山状の低い貼り付け高台である。内外面はヘラミガキを施さず、外面には成形時の粘土接合痕や指頭圧痕が残る。見込み部に暗文は認められない。焼成不良、灰白色を呈する。

79は口縁部が約1／12しか残らないが、高台は大部分が残存している。3.8cmをはかる高台径を参照して、口径13.6cm、器高3.8cmに復元した。口縁部形状は外反し端部が丸くおさまり、高台は78と同じく低い貼り付け高台である。内外面にヘラミガキは認められないが、見込み部に3本の平行線状の暗文を施す。暗文の幅は0.2cmである。焼成は不良、色調は灰白色を呈する。

80、81、82は瓦器椀口縁部である。どの個体も残存状況が良好ではない。口径は13.4～14.4cmにおさまる。口縁部形状、内外面の調整、色調は78・79と同様である。なお、被熱痕はいずれの個体にも認められない。

以上、SK31から出土した瓦器椀の特徴は、①口縁部は外反し、端部を丸くおさめる形状を有すること、②内外面調整はヘラミガキを施さず、外面に粘土接合痕や指頭圧痕がみられるなど、粗雑なものが多いことがあげられる。また、③平行線状の暗文が認められる。以上の特徴をもつ瓦器椀は和泉型に属すると考えられる（橋本1980、尾上1983、森島・近江1995）。時期的な位置づけとしては②・③と、比較的大型の78を除けば口径13～15cmにまとまることをふまえて、尾上編年のⅢ－3期からⅣ－1期、13世紀前葉から中葉に位置づけられる（尾上1983、森島2005）。ただし、78のように高台の形状や製作技術などは和泉型とほぼかわりがないにもかかわらず、大型のものがみられることは、和泉地域と様相を異にする（正岡2003）。今後、和泉の様相を含めて、摂津における在地生産について検討する必要があろう（橋本1992：p270）。　（中久保辰夫）

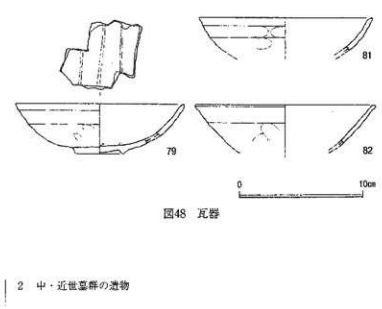


図48　瓦器

②土師器（図49、図版18－3）

83はSK31埋土より出土している。口縁部は1／3程度が残存しており、口径8.2cmで、器高は1.4cmである。外面体部下半にはオサエ痕がみられる。見込み部には圏線状のくぼみが看取できる。

84もSK31埋土より出土している。口縁部残存率が約1／6であり、口径は8.4cmに復元される。残存高は1.5cmである。体部下半にオサエによる外反がみられ、口縁部形態は長めの三角形状を呈している。

85はSK27埋土出土土師器皿である（図版８－２）。ほぼ完形であり、口径8.0cm、器高2.5cmをはかる。体部下半にはオサエによる外反が強くみえ、上半から口縁部もやや外反する。見込み部には圏線状の凹みが認められる。なお、実測図は、85の土師器皿を除いて、いずれも回転復元により図化している。

86はSK36埋土からの出土である。口縁部残存率が約１／５であり、口径は7.6cmに復元できる。残存高は1.5cmである。外面体部下半にはオサエ痕がみられる。87は口縁部の残存率は約１／４であり、口径7.2cm、器高1.8 cmに復元される。体部下半はオサエにより外反し、見込み部には圏線状のくぼみがみられる。88は、口縁部の残存率は約１／４であり、口径8.0cmに復元される。外面体部下半にはオサエ痕がみられ、口縁部形態が長めの三角形状を呈している。

89は口縁部残存率が約１／５である。口径は約10.0cmであり、他の土師器皿と比べて少し大型である。外面体部下半のオサエによる外反が強くみられるのが特徴である。

これらの土師器皿は、形態などから京都出土品と比較してみると、小森俊寛・上村憲章氏による分類の赤色系皿Ｎに類似しており、14世紀末～15世紀代に比定できる資料であろう（小森・上村1996）。ただし、産地としてはおそらく捨津内に求められるものと推測される。

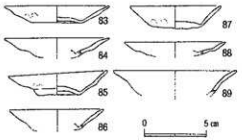


図49　土師器皿類

③そのほかの土器類（図50、図版19－１）

90は東播系須恵器すり鉢である。口径は37.6cmに復元できる。口縁端部が上方へつまみあげられ、三角形状を呈する口縁部片であり、生産時期は12～13世紀のものであろう（森田1995）。遺構には伴わないものの、蔵骨器の蓋として使用されていた可能性が指摘できる。今回の調査では確認していない、調査地周辺には蔵骨器を用いた中世火葬墓も営まれていたものと推測される。

91は瓦質の羽釜である。SK31からの出土である。口径は22.4cmに復元でき、残存高は3.3cmである。口縁部が内傾しているのが特徴である。香原正明氏の分類では、捨津E型に比定でき、時期は13世紀初頭～中頃と考えられる（香原1983）。用途としては、

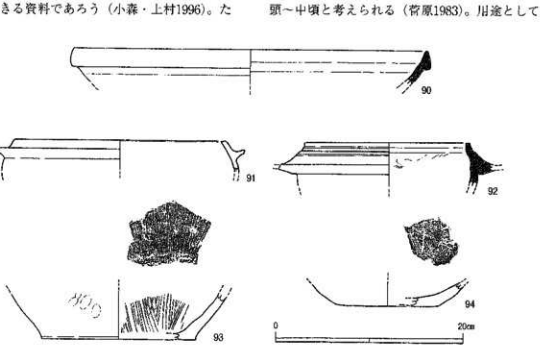


図50　そのほかの土器類

蔵骨器として使用されていた可能性がある。火葬灰集積土坑より出土しており、何らかの経緯で火葬灰集積土坑内に廃棄されたのであろう。火葬灰集積土坑内から出土した瓦器などとほぼ同じ時期の遺物である。92は須恵質の羽釜である。口径は17.8cmに復元でき、残存高は4.6cmである。口縁部外面には3本の沈線がみられる。菅原正明氏の分類では、瓦質の釜でいう摂津Ⅰ型に該当し、これらが13世紀初頭～14世紀初頭に生産されていたことから、本資料もほぼ同期間に生産・使用されたと考えられる（菅原1983）。

93は近世の陶器すり鉢である。底径は16.4cmに復元され、残存高は4.5cmである。内面の摺目が全面に施されているのが特徴であり、17世紀中頃以降のものと考えられる。外面にオサエがみられることから、丹波産の可能性が考えられよう。94も、近世の陶器すり鉢である。底径は10.8cmに復元でき、残存高は2.6cmである。（木村理恵）

④陶磁器（図51、図版19－3）

95は口径約16.0cmの白磁碗。胎土は灰色気味の白色で、釉もやや灰色を帯びた白磁釉である。外面などに貫入が多い。体部は傾きながら、ほぼまっすぐに立ち上がり、口縁端部はそのまま丸くおさめる。内面には口縁端部から2.5cmほど下位に浅い沈線が巡る。白磁碗Ⅶ2類（山本1995ほか）に分類されるものであり、13世紀の華南系白磁とみられる。本遺跡出土の瓦器などと年代的に近い時期の資料であり、中世の火葬墓の造営時期を示唆する遺物になる。SX30の埋土から出土している。

96は無台の白磁皿。やや砂流を含む黄色みを帯びた灰白色の胎土で、硬質である。底部には回転のケズリ調整を施す。外面は底部中央が中窪みに削られ、それと後をなすように上方に向けて2段にケズリが施される。内面はナデ調整で仕上げられる。平坦な底部をなし、そこから屈曲して体部が立ち上がる部分で欠失する。残存破片では、内面のみに灰色を帯びた釉が施される。白磁皿の皿類に相当するものとみられ、13世紀頃と推測される。95と年代的にほぼ対応する資料である。火葬灰集積遺構であるSK31の埋土から出土している。

97は天目碗の底部片。胎土はやや黄灰色を帯びた白色で、硬質に焼き上がっている。削り出しにより厚みのある高台を作り出し、削り込まれた底部外面中央がやや下方に突出している。内面には鉄釉が掛かり、釉溜りがみられる。高台部はすべて露胎である。13～14世紀頃のものとみられる。周溝NW区付近より出土している。

98は緑釉が施された盤状の器の小片。白色砂粒な

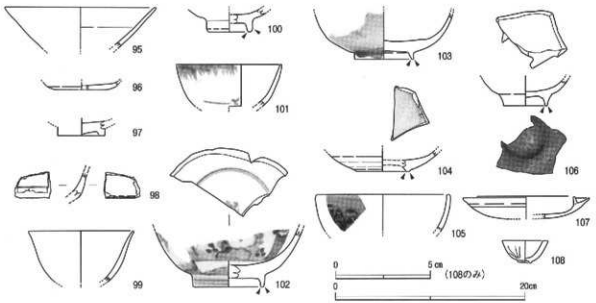


図51　陶磁器

どを含む胎土で、外面はその砂流のためか表面にざらつきや粒状の突出が目立つ。胎土は淡赤褐色を呈し、やや軟質の焼き上がりを示す。体部のみが残存しており、内面に沈線による圏線が施される。外面も残存部の端において稜をもつ屈曲がある。内外面に緑釉が施されるが、特に内面の釉は厚く、濃緑色を呈する。内面には緑釉の下に白土の化粧掛けをしている可能性がある。華南三彩であろうか。周溝SW区の覆土からの出土である。

99は小型で、やや白みの強い青白磁の杯。胎土は白色を呈する。残存率が少ないが、口径に比して器高が高い器形に復元できる。体部下半は丸みを帯び、口縁部はほぼまっすぐに立ち上がる。釉には部分的に貫入がみられる。内外面に文様は確認されない。調査区南西側の中世面を覆う層（図５－４層）より出土している。

100は青白磁に近い釉色の青磁碗。胎土は灰白色を呈しており、硬質である。やや厚めの底部に、径は小さいが、高めの高台が付く。高台端部は丸みを持ち、釉が剝ぎ取られて、露胎となっている。調査区南西側の中世面を覆う層（図５－４層）より出土している。

101は口径11.2cmほどの小型の染付碗。胎土は白色で、地の釉はやや灰色を呈する。体部はやや丸みを帯び、口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁部外面には、やや薄い色の染付により、いわゆる雨降り文を描く。外面には、体部の下端にもわずかに染付の文様が認められる。内面には文様を持たない。SX30埋土に先行するシルト（図47－７層）より出土している。

102は底部径が7.2cmをはかる大型の染付碗。胎土は白色で通例のものである。高台は直立してのび、分厚い底部から大きく湾曲して体部が立ち上がる。見込みには、染付により大きく二重圏線を巡らし、中央に小さく五弁花文を配する。体部外面には植物文様などを描く。底部外面には、本来「年製」と記すものであろうが、大きく字が崩れている。高台の外側に二重、内側には一重の圏線が染付で施される。高台下端部の畳付は露胎で、釉が掻きとられている。101と同じシルトより出土している。

103は102とほぼ同様の大型の染付碗。やや細い高台を持ち、分厚い底部から、強く湾曲して体部が立ち上がる。外面には体部中位に文様が描かれ、体部下端に一重、高台部の外側面に二重の圏線が染付で施される。白磁釉は灰色を帯びており、染付の色調もくすんだ灰色に近いものである。内面に文様はない。見込みには、幅1.7cmほどに環状に釉剝ぎが施されており、その部分に砂目状に付着痕跡がみられる。SK60落ち込み土より検出されている。器壁の厚さ、釉調および見込みにみられる蛇の目釉剝ぎから18世紀後半に属するとみられる。

104は無台の染付皿。胎土は灰色を呈し、釉色は103と同様の灰色の強いくすんだ色を呈する。いわゆる碁笥底であり、底部中央部が刳り込まれて上げ底になる。接地面は少し突出気味で、露胎になっている。体部は内湾気味に立ち上がる。文様は、外面には確認できず、内面に圏線などわずかに染付文様の部分が残る。101・102と同じくシルト土に相当する層位より出土している。

105は小型の灰釉碗。胎土は灰色を呈し、硬質に焼き上がる。口縁部は内湾気味にのび、口縁端部も少し口すぼまりとなる。内外面に灰釉を施し、全面にわたって氷裂が生じる。また外面の灰釉は釉垂れを生じており、同じ外面には口縁端部より少し下側に鉄斑文もみえる。調査区南西側の攪乱中より出土している。

106は高台径が4.5cmほどの陶器碗。胎土はやや粗く赤褐色を呈し、硬質に焼き上がる。高台は径が小さいがやや高く立ち上がる。内面には白泥鉄絵の刷毛目を施し、外面は内面と同様だが、白濁釉が全面を覆う。SX30の埋土であるシルト層（図47－５層）より出土している。

107は外端部径13.2cm、残存高2.2cmの小型の陶器皿。胎土は淡赤褐色を呈し、比較的硬質に焼きあがり、表面は全面が暗赤褐色を呈する。底部はケズリを施している。内面には口縁部より1.5cmほど内側に、環状で上方に立ち上がる仕切り部を有し、この残存破片ではその仕切りの１箇所に切込みが入れられて

いたものとみられる。灯明皿から垂れる油を受ける受皿とみられる。

108は口径2.4cm、器高1.1cmときわめて小さな白磁杯。完形である。胎土は精良で白色を呈し、硬質に焼き上がる。少し青みを帯びた白磁釉は、内面全面と外面の口縁端部付近に施され、体部の中位より下半は露胎である。体部は内湾し口縁端部は水平な面をなす。底部に径が小さく突出も少ない高台をもつ。外面には、2～3mm間隔で、縦方向に刻線を施している。いわゆる紅皿か。丸皿型を呈することから17世紀後半以降の製品であるとみられる。種形木槽（SK60）内より出土しており、副葬品であろう。

なお、図版には掲げていないが、龍泉窯系青磁碗や古瀬戸小皿などの小破片も出土している。前者の青磁は、外面に鎬蓮弁文を有する龍泉窯系の青磁碗Ⅰ5b類の体部片などが含まれる。このような蓮弁文の青磁は12世紀末から13世紀前半頃のものとみられ、上掲の白磁（95）などとも同様の時期になるものである。（高橋照彦）

⑤瓦（図52）

図52－109は火葬墓群が検出された地点の近代撹乱層より出土した唐草文軒平瓦左縁部片である。残存幅7.7cm、高さは4.2cmをはかる。全体に風化が著しいものの瓦当面には炭素の付着がわずかに認められるが、焼成は軟質である。凸面部に布目圧痕は認められない。また、外区幅は上下に比べ凋縁がやや幅広である。これらの特徴から16世紀代に焼成された瓦であると考えられる。同様の焼成の平瓦片は他にも数点検出されている。（寺前直人）

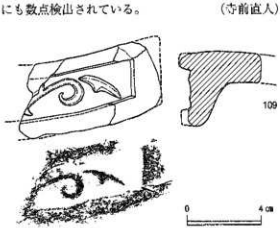


図52　瓦

（2）金属器・石製品

①銅銭（図53、図版20－2）

110は宋通元寶である。中国本銭は建隆元年（960）初鋳の北宋銭である。銭文はほぼ通例と変わりがない。ただ、背面の左側の輪が不明瞭になっており、鋳造欠陥による可能性もあるが、あるいはその部分に何らかの人為的加工がなされた可能性もある。鋳型成形段階の加工調整の結果であれば、鋳写銭なのかもしれないが、表側の銭文などは明瞭であるため、たとえ鋳写しをしていたとしても初期段階のものであろう。輪外径は24.6mm、表の輪内径は19.5mm、表の郭外幅は縦・横がいずれも7.5mm、背面の輪内径は18.8mm、郭外幅が縦7.8mm、横8.0mm、郭内幅は縦・横が6.2mmである。輪の厚さは、最も薄い上側で1.4mm、厚い下側で1.5mmをはかる。重量は3.2gである。次の111と同じ調査区南西の中世遺構面を形成する第5層－6層より検出されている。

111は大観通寶である。中国本銭は大観元年（1107）初鋳の北宋銭である。銭文は中国本銭に比べやや太くなっており、中央の孔（穿）も円形状を呈している。またかなりの薄手であって、背面側の輪や郭も不鮮明な鋳上がりである。このような特徴から、鋳写銭とみられる。輪外径は縦で24.0mm、横で24.4mmをはかり、表の輪内径は21.0mm、表の郭外幅は縦7.8mm、横が7.6mm、背面の輪内径は20.0mm、郭外幅が縦9.2mm、横9.1mm、郭内幅は縦・横が6.1mmで

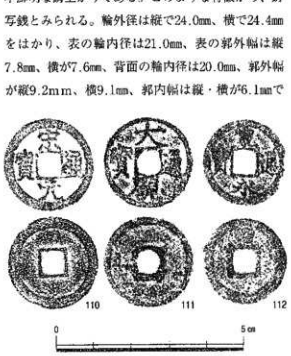


図53　銅銭

ある。輪の厚さは最も薄い上端で1.0mm、厚い左端で1.3mmである。重量は2.3gとなっている。110と近接して検出されている。中世墓に伴うものか。

112は寛永通寶である。銭文からみて、元禄期以降、17世紀の最末から18世紀に鋳造された、いわゆる新寛永である。ただし、銭文が非常に不鮮明であり、銭厚も非常に薄く、鋳写銭の可能性がある。判読が困難ながらも、永字の3画目の横画であるフ頭がやや右下がりになり、同画のフ挑と呼ばれる左払いとフ頭との角度が狭く、またこの3画目が2画目の縦画、柱とはやや離れている。4画目の人画のノ爪がやや伸びて、4画の左下がりのノ画と明瞭な角度をなす。このような特徴をもつ永字は、古泉学的分類では勁永に相当するものとみられる。永以外の銭文としては、寛字の11画目の左端が7画目の縦画より突き出すものであり、また通の1・2画はコ字状となる、いわゆるコ頭通である。寶は末画の後足がやや縦に向いており、その長さは短い。理由はわからないが、背面の穿より上側に鋳足されたような付着がみられる。この勁永は古泉学的に四ツ宝銭類と呼ばれる分類に含められるもので、鋳銭地などは不明ながら、元禄期の鋳造ではないかとされている（ハドソン・東洋銭造貨幣研究所1998）。一般流通銭としては、数が比較的多い部類に入る。輪外径は縦・横で22.9mm、表の輪内径は18.7mm、表の郭外幅は縦・横が8.0mm、背面の輪内径は17.4mm、郭外幅が縦・横9.1mm、郭内幅は縦・横が6.4mmをはかる。輪の厚さは最も薄い上端で0.9mm、厚い左端で1.0mmとなっており、重量は2.0gである。（高橋照彦）

②鉄器（図54、図版20－1）

113はSK31床上の覆土から検出された鉄製品である。残存長5.1cm、幅1.1cm、厚さ0.8cmをはかる。鉄釘であろう。

114は調査区北東から検出された鉄製品である。残存長6.6cm、幅1.7cm、厚さ0.6cmをはかる。器種は不明であるが、なんらかの工具であろうか。

115はSK31出土の鉄釘である。残存長10.4cmをはかり、幅、厚さとも0.5cm前後であるとみられる。（寺前直人）

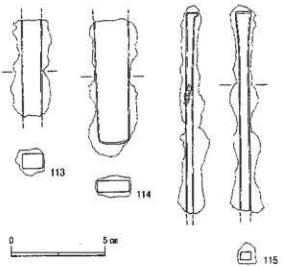


図54　鉄製品

③石製品（図55、図版20－3）

組合せ式五輪塔の水輪2個体（図55－116・117）と・石五輪塔の欠損破片1個体（図55－118）が出土している。116は近世墓であるSK60直上から、117はSX30の堆土中（図43）、そして118は調査区北側のSK65より出土している。

116・117は花崗岩製とみられる水輪である。大小の差違があり、116は高さ18.4cm、最大幅25.0cm、117は高さ23.5cm、最大幅32.5cmをはかる。形態としては、116が球形に近いのに対し、117はやや扁が張っている。扁平率（最大幅／高さ）としては、116が1.36、117が1.38という数値を示す。

待兼山遺跡に近接する地域の中・近世墳墓群としては大阪府茨木市粟嶺山南墳墓群（市本ほか2000・2001）がよく知られているが、そこから出土した水輪と比較してみると、この五輪塔の水輪は形態・法量の面で類似しており、通例の範疇に属しているものと言える。また、一般に水輪は扁平率が小さく球形に近いものが古く、扁平なものが新しいとされるため、116の方がやや古相を帯びていると言えるかもしれない。ただし、同一時期といえども個体ごとのばらつきもあり、地域差なども含めた詳細な検討も必要であることや、上記の2個体が数値的にもそれほどの大きな差はないことから、この単純な形状だけでは厳密に年代的な位置付けを与えることは難しい。

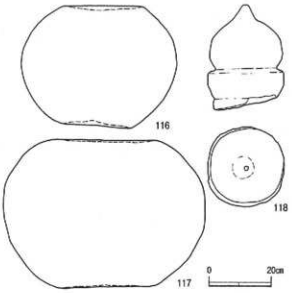


図55　石製品

116・117は共に上下が凹面状をなし、その上下面には火輪および地輪を組み合わせるための突起部（ホゾ）を確認できない。水輪は、一般に上面および下面にホゾが彫り出されている場合が多く、上掲の栗栖山南墳墓群では少なくとも下面にはホゾを持っているため、本個体もホゾが欠けてしまったことを考慮しておく必要がある。しかしながら、現状では明瞭にホゾが欠損したとみられる痕跡を確認することができない。組合せ式五輪塔の水輪には、兵庫県豊岡市の妙楽寺ヒシロ遺跡例（宮村ほか2005）のように元々からホゾのないものもあり、本個体も当初よりホゾがなかった可能性は十分に高い。なお、両個体は共に、梵字などの刻印を確認することができなかった。

出土状況としては、116が種形木棺（SK60）に落ち込むようにして検出されたため、近世墓上に安置してあったと考えられる。五輪塔の水輪を墓上に置き、川原石と共に石組みに転用されていたと推定できる。

118は花崗岩製とみられる一石五輪塔の一部である。空輪・風輪部のみが残存しており、残存高16.6㎝、最大幅12.3㎝をはかる。特徴としては空輪部の先端が尖り、最大径が中心より下にあるやや腰の張った形状を呈し、風輪部はかなり形骸化しているものの、椀状の形態をわずかに残しているものといえる。

栗栖山南墳墓群出土の一石五輪塔と比較しても、本例は法量が類似している。しかし、待兼山遺跡出土の個体に関しては空風輪部のみしか残存しておらず、火輪・水輪・地輪などの年代を識別する要素を欠くため、栗栖山南墳墓群の一石五輪塔などと比較して新古を考えることは控えておきたい。

これらの本遺跡の石造遺物との関連を考慮すべき資料があるので、以下にごく簡単に触れておきたい。本調査地から北に約200mの地点（現在の大阪府池田市石橋２丁目、玉坂地区）に春日弁財天の祠があり、「安政池・素面池・新池無縁仏供養」という新しい石碑と共に（図56）、約75体の石造品が安置されている。その石造品には39体の光背形石仏が含まれ、その他は五輪塔および一石五輪塔である。石仏は各石にそれぞれ１体の仏像が彫られており、確認できるものはすべて阿弥陀如来である。保存状態には差違があり、磨耗が激しく図柄が読みとれないも

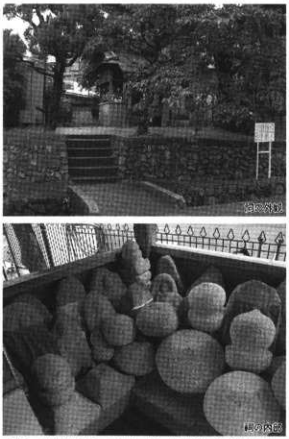


図56　池田市石橋２丁目の祠に集積された五輪塔ほか

のも多い。組合せ式五輪塔は空風・火・水・地輪に分かれ、現状では仮に組み合わせて置かれているものもあるが、ばらばらの状態のものがほとんどである。待兼山遺跡出土のものと同様に、同じ水輪でも大きさに相違がある。一石五輪塔は銅の4隅にそれぞれ1個体、合計4個体が安置されている。石造品は動かすことなく見える範囲で観察したにとどまるものの、紀年銘や梵字などの刻印は確認できなかった。

ここに安置された五輪塔類は、その形態などから待兼山遺跡出土のものと近しい年代のものと考えて差し支えないだろう。この場所に五輪塔類がまとめて置かれた経緯は厳密には不明だが、現地の石碑によれば多くは今回の調査地点一帯のため池造営や改修などを含む農業用水確保に関わる開発に伴い集積され、祀られていたとみられる。（大川沙織）

3　中・近世墓群の調査成果

待兼山遺跡本調査地点では13世紀から15世紀にかけて、火葬墓群が営まれていたことが今回の調査の結果明らかとなった。また、火葬灰集積土坑(SK31)の規模から推定すると、墓域はかなりの大規模であったことが予想される。このことは調査地点に近接する現在の池田市石橋2丁目における調に集積された多量の石造物（図56）からも補強できよう。

また、調査区中央15m四方において南から石組み墓（SK73）、火葬墓（SK27・28）、火葬場（SK57・59）、そして火葬灰集積土坑（SK31）という多様な遺構群がセットで検出されたことも特筆されよう。やや想像を交えることが許されれば、荼毘に付された位置で火葬墓としてそのまま埋葬されるパターンと、同じ火葬場において荼毘が複数回行われた後、遺骨等をへて、石組み墓などに最終的に埋葬されるパターンがあり、いずれの場合も繰り返し排出されたであろう炭化物や埋葬されなかった骨片は一箇所に集積されていったと考えられる。もちろん、栗柄山南墳墓群でみられたように火葬墓以外の土壙墓も多数営まれていた可能性が高い。

待兼山遺跡におけるこのような墓群がいつ形成されたかについては、不明な点が多い。当調査区内では13世紀前半より火葬墓が造営開始されていた可能性が出土土器からは想定できる。ただし、隣接調査地点からは8世紀に遡る土器情も検出されており（清家編2001）、古代から中世にかけて継起的に墓が造営されていた可能性も否定できない。では、その終焉はいつか。たしかにSK60という18世紀後半に属する可能性が高い桶形木棺が検出されている。

ただし、本調査区でも比較的多くの土器が出土しているが、多くは15世紀までに属し、16世紀に属するのはわずかに瓦（109）があげられる程度である。現状では近世遺構の年代からすると200年前後の墓地の断絶を想定せざるえない。ここで示唆的なのは、現在池田市に所在する真言宗高野派西禅院末、待兼山高法寺の寺伝である。寺伝によればもともと高法寺は待兼山山頂にあり、永禄年中までは池田城主池田筑前守の祈願所であったが、天正年間に兵火により現在の池田市にその所在を移したという。山号の待兼山はそれに因んだものと思われる。

今回の調査で明らかとなった中世墓群と寺院の関係についてはまったく不明であるが、時期的関係を含めて今後の注意を払う必要があろう。

また、SX30という18世紀でも新しい時期に形成された遺構も興味深い。今回は時間的余裕に乏しく、絵図等との比較は困難であったが、旧北惣島村大字玉坂あるいは野に所在する本調査地点周辺の開発史についても今後分析を進めていきたい。

（寺前直人）

注

（1）京都大学大学院人間・環境学研究科丸山真史氏ご教示による。

参考文献

伊野近富　1995「土師器皿」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編、真陽社

市本芳三・瀬戸哲也ほか　2000『栗柄山南墳墓群で出土した石造物について』『日引』第1号、石造物研究会

亀上　実　1983『南河内の瓦器椀』『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会

吉田直紀・本山洋ほか　2005『敏満寺遺跡　石仏谷墓跡』多賀町教育委員会

小森俊寛　2005『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房

小森俊寛・上村憲章　1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号、京都市埋蔵文化財研究所

菅原正明　1983「畿内における土釜の製作と流通」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』文化財論叢、同朋舎出版

鈴木俊夫　1997「中世食器の地域性・畿内周辺」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集、国立歴史民俗博物館

清家　章編　2001『待兼山遺跡Ⅲ』大阪大学埋蔵文化財調査委員会

太宰府市教育委員会　1983・1984『大宰府条坊跡』Ⅱ・Ⅲ

永井久美男編　1996『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会

橋本久和　1980「瓦器椀の地域色と分布」『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書第13冊、高槻市教育委員会

橋本久和　1992『中世土器研究序論』中世土器研究会編、真陽社

三好孝一編　1998『小畑遺跡』大阪府文化財調査研究センター

正岡大実　2003「中世遺構出土遺物の検討」『勝部遺跡大阪国際空港周辺緑地整備事業に伴う発掘調査報告書』大阪府文化財センター調査報告書第100集、大阪府文化財センター

宮村良雄・田村浩一郎ほか　2005『妙楽寺ヒシロ遺跡』豊岡市教育委員会

三好孝一編　1998『小畑遺跡』大阪府文化財調査研究センター

森島康雄・近江俊秀　1995「瓦器椀」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編、真陽社

森島康雄　2005「瓦器」『中世窯業の諸相－生産技術の展開と編年－発表要旨集』中世窯業の諸相－生産技術の展開と編年－実行委員会

森田　稔　1986「東播系中世須恵器生産の成立と展開－神出古窯址群を中心に－」『神戸市立博物館研究紀要』3　神戸市立博物館

森田　稔　1995「中世須恵器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編、真陽社

ハドソン・東洋鋳造貨幣研究所　1998『新宮永通貨図会』

豆谷浩之　1998「大坂の近世墓」『関西近世考古学研究Ⅵ、関西近世考古学研究会

山本信夫　1995「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編、真陽社

横田賢次郎・森山勉　1978「大宰府出土の輸入中国陶磁について」『九州歴史資料館研究紀要』4

第4章　考　　察

1　摂津地域における古墳時代中期の煮炊器

中久保　辰夫

1　はじめに

古墳時代中期[1]に築造される待兼山５号墳では、周溝から韓式系土器や土師器甕が出土している。畿内地域における古墳時代中期の煮炊器は、三国時代の朝鮮半島南部にみられる赤褐色軟質土器に酷似した韓式系土器（田中清2005）と、古墳時代前期の布留式甕の系譜をひく布留式系甕から成る。ただし、両者の関係については依然として解明されていないことも多い。近年、韓式系土器出現期の良好な資料の増加や初期須恵器の編年研究の進展によって、中期の土師器を議論する土台は固まりつつある。

小論においては、待兼山５号墳が所在する摂津地域[2]を対象として、古墳時代中期の煮炊器について考察することにしたい。

2　研究史

古墳時代中期の土器研究において、韓式系土器と須恵器に関しては厚い研究の蓄積がある。とりわけ前者は、韓式系土器研究会を中心に精力的に集成作業がなされ、畿内における渡来人の放地や各地域における様相が把握されつつある（今津1994、植野1987、岡戸1994、酒井1998、田中清1989、2005、青柳2005、富山2005、中野2007）。現在では、単にその有無だけではなく、器種構成や土器の性格を吟味して渡来系集団の動向を考える必要性が生じてきた（亀田1993・2003、今津1994、富山2005）。

一方、在来の土師器においては、古墳時代初頭の古式土師器研究が活発であるのに対し、中期以降に関しては編年研究の蓄積は浅い。そのなかで、土師器高杯を編年の基軸とした辻美紀氏の研究は、畿内の土師器様相を考える上で大きな手がかりを与えてくれる（辻1999・2002）。しかし、煮炊器に関してはバリエーションに富む変化を辿るために、編年の軸とするのは難しいとされている。

こうした煮炊器の複雑な様相は、朝鮮半島から新たな調理施設であるカマドとそれに伴う韓式系土器の出現とその受容によって、在来の煮炊器にも大きな変化が認められるためである（西1982、中西1985、京嶋1992、1993、1994、宇野1999）。

中西克宏氏は、生駒西麓地域の資料を中心に土器の使用痕跡や法量、製作技術を検討し、須恵器出現期に韓式系土器を模倣することによって、短期間のうちに長胴甕や瓶が受容されることを指摘した（中西1985：p91）。ここでいう「模倣」とは、製作技術の分析から在来の技術を用いた、とされている。そして、短期間に受容された一因に住居における造付けカマドの導入を考える。

京嶋覚氏は大阪府大阪市長原遺跡の資料を用いて、煮炊器の器形や内面調整を中心に分析し韓式系土器、布留式系土器を系統的に整理した。その上で韓式系土器の模倣（土師器化）に注目し、TK73～216期には前代とは大きく異なった新たな土器群の組形が出現することを指摘した（京嶋1992、1994）。そして、地域差をもって中期後半から後期初頭にかけて長胴甕と中小の球胴甕、甑が定着する、とする。近年、報告された長原遺跡出土資料を踏まえると、TK73～216期における変化が確からしくなってきた。

以上の研究は、韓式系土器の出現が比較的すみやかに在来の煮炊器に影響を与えたことを指摘している。ただし、両者の分析は共に韓式系土器の出土が豊富な河内湖周辺地域を対象としており、こうした様相が他地域においても同様に認められるかどうか、さらに検討を進める必要がある。そこで近年、韓式系土器と土師器の豊富な資料が報告されている摂津地域は、良好な比較対象となる。以下では、まず韓式系土器の様相を整理することからはじめたい。

3　韓式系土器の様相

摂津における韓式系土器については森本徹氏、中野咲氏により集成・資料紹介がなされている（森本2006、中野2007）。とりわけ中野氏の精力的な集成によって、出土遺跡が明らかになっている。小論においては、以上の先行研究に導かれながら、長胴甕、小型平底鉢、甑、鍋といった軟質の煮炊器を中心に検討したい（表2、図57）。

（1）韓式系土器の時期と分布

韓式系土器は現状で29遺跡から出土している。まず、時期的な検討をする。包含層出土資料が多いために、時期を厳密に決定することは難しいが、中期前半の須恵器や土師器と共伴する傾向にある（亀田1993、京嶋1994）。ただし、溝咋遺跡3D区土坑66（合田2000）や上津島遺跡流路（服部1997）、栄根遺跡D地区住居1（岡野1989）など、中期後半の須恵器と共伴する類例も認められる。待兼山5号墳から出土した韓式系土器の時期についても、共伴する須恵器を考慮すると、こうした類例に含められよう。韓式系土器が中期前半に多く認められ、後半になると少ないながらも出土する傾向は、畿内各地と同様である。

分布に目を向けると、特定の流域や平野部にのみ集中する様相は認められない（図57）。そこで、次に出土した遺跡における韓式系土器の器種や出土点数を検討したい。

（2）韓式系土器の器種

韓式系土器の器種で最も多く認められるのは、甑である。次に長胴甕が多く、可能性のあるものを含め10遺跡を数える。小型平底鉢は7遺跡とやや少なく、鍋は4遺跡と最も少ない器種である。ここで長胴甕に注目すると、どの遺跡においても長胴甕は普遍的にみられるものではない、ということが確認できる。また、出土した遺跡においても完形に復元されるものは大阪府茨木市安威遺跡や同吹田市五反島遺跡のみと少なく、量的にその集落の主体とはならない。つまり、主体となる煮炊器は在来の土師器である。こうした煮炊器様相は、韓式系土器が主体である大阪府堺市大庭寺遺跡を例外として、畿内各地でも同様である。

器種構成については、4器種全てが出土したことが確認される遺跡は安威遺跡1遺跡のみである。3器種出土した遺跡は鳩上郡衙遺跡、溝咋遺跡、五反島遺跡、上津島遺跡であり、鍋が欠落している。また、その他多くの出土遺跡においては1，2器種のみ出土しており、長胴甕、あるいは甑が多い傾向にある。今後、発掘調査の進展によって3器種以上が出土する集落が増加する可能性は否定できないが、現状において限られた集落にのみ3，4器種がそろうことが指摘できよう。

器種構成の背景に関しては、今津啓子氏の研究によって、軟質の韓式系土器を3，4器種以上出土した遺跡に渡来系集団が居住した可能性が高いことが指摘されている（今津1994）。とりわけ、河内湾周辺では韓式系土器が器種・量共に多く出土し、渡来人居住集落が多い傾向にある（今津1994、田中清2005）。一方、摂津においては1，2器種出土する遺跡が主体を占め、居住していなかったとは言い切れないが、土器のみが移動した場合も想定しなくてはならない。河内の様相と比較すると、摂津は韓式系土器の器種がそろわない傾向にあるといえる。

（3）韓式系土器のタタキ目

韓式系土器のタタキ目は朝鮮半島における土器製作技術の地域性を反映しており、摂津における韓式系土器の故地を考える上での参考になる。

まず、最も多く認められるタタキ目は格子タタキ目であり、29遺跡中21遺跡から出土している。待兼山5号墳から出土例も格子タタキ目であり、摂津のこうした状況を反映している。格子タタキ目に次いでは14遺跡と平行タタキ目が多く、縄蓆文は5遺跡と少ない。また、鳥足文タタキ目は軟質の煮炊器については確認されていない。タタキ目の種類によって摂津内で小地域差はみられず、格子タタキ目と平行タタキ目が同一遺構から出土する例も認められる。

寺井誠氏によると、格子タタキ目は朝鮮半島全域に認められるが、全羅道に多い傾向にあるという（寺井2006）。また、平行タタキ目は慶尚南道に多いという。こうした指摘から、摂津地域の韓式系土器の多くは朝鮮半島南西部に故地が求められよう。ただし、こうした格子タタキ目と平行タタキ目が主体となる様相は畿内各地と同様であり、摂津地域に特有のものではない。

（4）小　結

以上、摂津における韓式系土器の様相を概観してきた。畿内各地の様相と比較すると、以下の点で共通点と相違点が指摘できる。

まず、共通点として時期やタタキ目に認められる韓式系土器の故地の点においては、摂津の様相は畿内各地と同様である。

ただし、相違点として、器種構成については3、4器種以上出土する集落遺跡は少なく、渡来系集団が定住した可能性が少ない集落が主体であることが指摘できる。こうした様相は河内潟周辺と比べると大きく異なり、地域差が指摘できる。

また、長胴甕、甑の出土が多い傾向にあるものの、長胴甕の出土が普遍的ではないことに注意したい。同様に韓式系鉢や小型平底鉢も普遍的ではない。このことは、韓式系土器は一般的な煮炊器ではないということを示している。ここに在来系である土師器の様相について検討する必要性が生じてくる。

研究史でふれたように、古墳時代中期の煮炊器の変化は、これまで河内潟周辺の資料を用いて明らかにされてきた。しかし、以上の検討から、河内潟周辺と摂津では韓式系土器の器種や量に差異がみられるために、在来の煮炊器に与えた影響についても異なる可能性がある。そこで、次に在来の煮炊器の変化に目を向けてみたい。

4　在来の煮炊器の変化

韓式系土器が出現する以前、古墳時代前期の煮炊器は布留式甕である。布留式甕は器形、製作技術において規範というべき斉一性が認められる。しかし、古墳時代中期になると、口縁部形状や内面調整に変容が認められるために、布留式系土器と呼称することが適している。

まずは、韓式系土器と布留式甕を比較することからはじめたい。一般に、韓式系土器と土師器を見分ける大きな特徴は、外面調整の違いである。すなわち韓式系土器には外面にタタキ目が認められ、一方、布留式甕にはハケ調整によって仕上げられる。しかし、口縁部形状などといった細部形状や内面調整、法量など、外面調整以外でも両者は大きく異なる。とくに法量の違いは、中期における変化を考える上で重要となるために、以下で整理しておきたい。

（1）韓式系土器と布留式甕の法量

韓式系土器の長胴甕は器高20cm前後の小型品も認められるが、おおむね器高30～40cmであり、平均35cm前後である（田中清2005）。胴部最大径は20～30cmのものが主体であり、胴部最大径が大きく長卵形を呈するものと、最大径が小さく体部下半分がすぼまる砲弾形の2者がある。こうした形状の違いはタタキ目の種類と同様に朝鮮半島における地域差を反映している（寺井2006）。列島では長卵形が多い傾向にある。小型平底鉢は大型品も認められるが、器高は約8～15cm、胴部最大径は10～15cm前後に法量がまとまる。鍋は古墳時代中期では量的に少ないために小稿では検討しないが、球胴の器形をもち長胴甕を同じ容量を有する。

一方、古墳時代前期の布留式甕は球胴の器形を有する。その法量は器高10～25cmの範囲に散布し、韓式系土器のように器形やその用途によって、法量に大型、小型の作り分けが明瞭に認められない（大庭・杉山・中久保2006）。こうした法量の差異は、容量を算出するとより違いが明らかとなる。韓式系長胴甕はおおよそ容量12ℓ前後であるのに対し、布留式甕は大型のもので6～7ℓが通例である。1.5ℓペットボトルにして約4本分の違いは、土器の使用方法や内容が大きく異なることを反映していると考えられる。

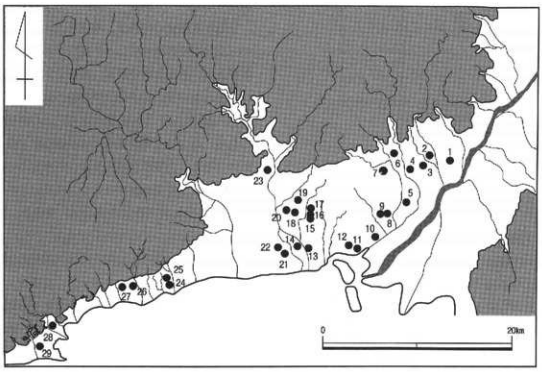
表2　摂津地域における韓式系土器の集成（1）

分布図No.	遺跡名	所在地	遺構名	時期	器種 長胴甕	平底鉢	甑	鍋	破片	タタキ目 格子	平行	綾杉文	鳥足文	文献
1	安満遺跡	大阪府高槻市	包含層	不明				●		●				森田・橋本1977、森田1983
2	鵜上郡衙遺跡	大阪府高槻市	27-D地区KⅡ2	中期前半か	●		●		●		●	●		福岡・森田1987、高槻市教委1983、宮崎1989
			27-D地区KH3	中期前半か		●	●		●		●	●		
			18-E地区	不明			●							
			3-J・N、13-B・F地区　落ち込み1	不明					●			●		人阪府教委1972・73
3	ツゲノ遺跡	大阪府高槻市	第14・15調査区第2竪穴式住居跡	中期前半		○					○			栗本1988
4	太田遺跡	大阪府茨木市	C2地区	中期前半	●					●				鍵出1998
5	溝咋遺跡	大阪府茨木市	3D区上坑51	中期前半			●				●			合田ほか2000 a・b
			3D区3-2～4　1層	不明	○					●				
			3D区5層	不明			●				●			
			3D区溝127	TK208			●				●			
			3D区土坑66	TK208～23			●	●		●	●			
			A区6面穴	不明						●	●			
			A区7面土坑98	TG232か						●	●			
			C区西3面穴	不明						●	●			
			2A区6面土坑80	中期前半						●	●			
			3D区河川2下層	不明			●			●	●			
			3D区炭集中部	TK23～10						●	●			
			3D区3層	不明						●	●			
			3D区穴643	不明						●	●			
			3D区土坑5	不明						●	●			
6	安威遺跡	大阪府茨木市	住居24	TG232	●	●	○	●		●	●			奥・酒井2000
			住居15	TG232						●	●			
			住居26	中期前半						●	●			
7	郡遺跡	大阪府茨木市	包含層	不明		●					●			黒須2005
8	玉櫛遺跡	大阪府茨木市	6D調査区第Ⅵ包含層	不明			●			不明				小野・駒井2003
9	東奈良遺跡	大阪府茨木市	包含層	不明					●	●	●			広瀬・亀島1990
10	高城遺跡	大阪府吹田市	人溝	不明					●	●				賀納2001・2005
			包含層	不明			●			不明				
11	五反島遺跡	大阪府吹田市	堤防上層	不明			●		●	●	●			加藤ほか2003
			河道Ⅱ上層	不明			●				●			
			河道Ⅰ上層	不明	●	●					●	●	●	
12	垂水南遺跡	大阪府吹田市	試掘調査時	不明		●				●				栄田1982
13	上津島遺跡	大阪府豊中市	流路第1層	TK23・47			●	●			●			服部1997
			流路第2層	TK216～23			●		●	●	●			
			土坑2	不明	●					●				
14	利倉西遺跡	大阪府豊中市	土器群2	TK216			●			●				梅木2005
			落ち込み2	不明			●				●			
15	山ノ上遺跡	大阪府豊中市	竪穴住居SH1	TK216			●			不明				梅木2005
16	新免遺跡	大阪府豊中市	6次包含層	不明		●					●			柳本・出上1984、服部・岡村1987
			11次包含層	不明			●			不明				
17	本町遺跡	大阪府豊中市	19次包含層	不明					●	●				橋用1995
18	蛍池東遺跡	大阪府豊中市	住居7	中期前半				●			●			合田ほか1997
			住居12	中期前半				●		不明				
			掘立柱建物16	不明				●		●				
			住居26	中期前半				●			○			
			住居12	中期前半				●		不明				

表2　摂津における韓式系土器の集成（2）

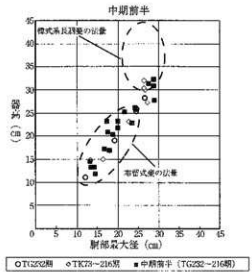
分布図No.	遺跡名	所在地	遺構名	時期	器種					タタキ目				文献
					長胴甕	平底鉢	甑	鍋	破片	格子	平行	縄蓆文	鳥足文	
19	待兼山5号墳	大阪府豊中市	周溝	TK23・47	○					●				本書掲載
20	住吉宮の前遺跡	大阪府池田市	溝7下層	不明	●					●				山本ほか2001
21	若王寺遺跡	兵庫県尼崎市	SX07	TK216	●						●			渡辺ほか2006
22	猪名庄遺跡	兵庫県尼崎市	包含層	不明	●	●				●		●		渡辺ほか1999
23	栄根遺跡	兵庫県川西市	D地区住居1	TK208～23			●				●			岡野1989
24	小路大町遺跡	兵庫県神戸市	SX103	TK43～209		●			●	●		●		井尻2003
25	本山北遺跡	兵庫県神戸市	包含層	不明			●			●				浅岡編1995
26	都家遺跡	兵庫県神戸市	SA11	不明					●	●				藤本ほか1992
			SA04	中期前半					●	●				
			SA01	中期前半					●	●				
			第5遺構面	不明					●	●				
			第4遺構面	不明					●	●	●			
			第3遺構面	不明					●		●			
27	赤松町遺跡	兵庫県神戸市	SD08	不明					●			●		村尾1992
28	中山手遺跡	兵庫県神戸市	2次　SD01	不明					●	●				木戸・三輪2000
29	神楽遺跡	兵庫県神戸市	3次SB01	TK208～23					●	●				渡辺・西岡1987
			3次SD03	TK208～23					●	●				
			3次SK01	TK208～23					●	●				

●は出土していることを示し、○はその可能性が高いと考えられるものを指す。



1．安満遺跡
2．嶋上郡衙遺跡
3．ツゲノ遺跡
4．太田遺跡
5．溝咋遺跡
6．安威遺跡
7．郡遺跡
8．玉脇遺跡
9．東奈良遺跡
10．高城遺跡
11．五反島遺跡
12．垂水南遺跡
13．上津島遺跡
14．利倉西遺跡
15．山ノ上遺跡
16．新免遺跡
17．本町遺跡
18．蛍池東遺跡
19．待兼山5号墳
20．住吉宮の前遺跡
21．若王寺遺跡
22．猪名庄遺跡
23．栄根遺跡
24．小路大町遺跡
25．本山北遺跡
26．都家遺跡
27．赤松町遺跡
28．中山手遺跡
29．神楽遺跡

図57　摂津地域における韓式系土器の分布



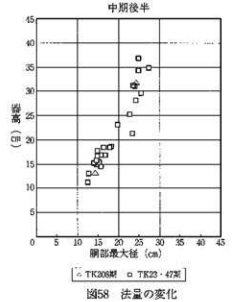


図58　法量の変化

（2）古墳時代中期における法量の変化

次に中期における土師器煮炊器の法量について検討したい（図58）[15]。

まず、中期前半の様相から検討する（図58上）。摂津地域の特徴として、中期前半に器高25cm以上33cm未満、胴部最大径25～30cmの大型の球胴甕（以下では大型球胴甕と呼称）が増加すること、法量のあり方として器高10～30cm前後とまとまりがなく法量が散布していること、が挙げられる。

大型球胴甕の増加時期については、初期須恵器を伴う良好な一括資料に恵まれないので、細かな須恵器型式期で検討することが難しい。しかし、TG232期に位置づけられる茨木市安威遺跡住居24（奥・酒井2000）で器高28cmの大型球胴甕が出土していることから、この時期に出現したと推測される。ただし、量的に増加するのはTK73～216期である。

しかし、こうした大型球胴甕も韓式系長胴甕と比較すると、重なる部分も認められるものの、器高が異なることが散布図から読みとれる。このことは韓式系長胴甕が出現してもすぐにその器形を受容するのではないことを示している。

法量のあり方に関しては、器高20～30cmの球胴甕が主体を占めており、大小にまとまりをもたないことが、韓式系土器の煮炊器と大きく異なっている。韓式系土器が出現し、大型球胴甕が増加するといった変化があるものの、法量のあり方には大きく変化が認められないのである。

つづく中期後半（図58下）になると、土師器の技術で製作された長胴甕が出現すること、大小の法量分化が顕著になりはじめること、といった変化が指摘できる。

土師器長胴甕の出現は、韓式系土器と同形の器高35cm前後の長胴甕を外面ハケ調整で製作する点が重要である。その出現時期は、現状でTK208期の資料に恵まれないが、川西市栄根遺跡D地区住居1出土資料（岡野1989）などの類例から、この時期に求められる。ただし、中期後半では長胴甕が主体になるのではなく、大型球胴甕も少なからず認められる。大型の煮炊器が長胴甕のみとなるのは、尼崎市若王子遺跡SX03資料（渡辺ほか2006）を参考にすると後期前葉（MT15～TK10期）である。

また、法量のあり方に関しては、法量の器高20～25cm前後の球胴甕が減少する一方、器高10～20cmの中・小型のものが増加し、大小に分化する傾向が認められるようになる。中期後半において、法量のあり方に韓式系土器の影響が顕著となるのである。

以上、法量を検討すると、韓式系土器の出現によって、摂津では在来の煮炊器がすみやかに長胴甕の器形を選択するのではなく、その受容は中期後半になることが判明する。

待兼山5号墳から出土した土師器甕も、口縁部径

表3　造付けカマドを有する住居から出土した煮炊器の様相

遺跡名	所在	遺構名	時期	土師器 長胴甕	土師器 大型球胴甕	土師器 中・小型球胴甕	土師器 甑	土師器 鍋	韓式系 長胴甕	韓式系 平底鉢	韓式系 甑	韓式系 鍋	備考
ツゲノ遺跡	大阪府高槻市	SB02	中期前半		●?	●					●		
安威遺跡	大阪府茨木市	住居16	TG232		●	●							
		住居24	TG232		●	●	●?		●	●	●?	●	
		住居14	TK73～216		●	●	●						球胴甕に穿孔して甑とする
		住居19	中期前半		●	●	●						
		住居25	中期前半		●		●						球胴甕に穿孔して甑とする
		住居33	中期前半		●		●						
蔵池東遺跡	大阪府豊中市	住居2	TK73～216		●?		●						
		住居1	中期前半		●								
		住居7	中期前半			●?					●		
		住居13	TK216		●	●?	●?						
寺田遺跡 第178地点	兵庫県芦屋市	SH206	TK73～216	●		●	●	●					
郡家遺跡	兵庫県神戸市	SA01	中期前半		●	●?							

●は出土していることを示し、●?は残存状況から器高はわからないが、その可能性が高いと考えられるものを指す。
中・小型球胴甕は器高25cm未満のもの、大型球胴甕は器高25cm～30cmのもの、長胴甕は器高35cm前後のものを指す。
「土師器」としたものは外面ハケ調整、「韓式系」としたものは外面タタキ調整のものである。

などから、器高35cm前後と想定されるが、上述の煮炊器法量の様相を反映しているといえる。

（3）カマドの受容と煮炊器

長胴甕の定着は地域によって時期差が認められることが考えられたが、中期前半において造付けカマドが普及し始めることなどを考慮すると、長胴甕と大型球胴甕の法量の違いがどれほど意味をもっているのか、改めて考える必要がある。最後にカマドと共伴する煮炊器と使用痕跡について検討することにしたい。

表3は中期前半の造付けカマドをもつ住居から出土した煮炊器を集成したものである。

まず、カマドを有する住居から確実に韓式系長胴甕を出土する類例は少なく、大型球胴甕が共伴する類例がほとんどであることに、注目したい。

また外面ハケ調整の土師器長胴甕についても、芦屋市寺田遺跡SB206（安田ほか2006）を除いて、現状で認められない。このことは中期前半において、カマドと長胴甕は必ずしもセットなのではないことを示している。使用状況を直接示すものではないが、豊中市蔵池東遺跡住居1（合田ほか1997）や神戸市郡家遺跡SA01（藤本ほか1992）など、カマド上から大型球胴甕が出土している例は示唆的である。

また、甑の出土が普遍的であることも重要である。栄根遺跡D地区住居1（岡野1989）や蛍池東遺跡住居7（谷口ほか1997）では韓式系甑が出土するが、多くは外面ハケ調整の甑である。また、茨木市安威遺跡住居14、25には布留式系甕の底部を焼成前に穿孔することによって甑としているものが出土している（奥・酒井2000）。こうした甑の様相は、製作技術から在来の集団が積極的に甑を受容しようとしたことを示している。

ここで問題となるのは、カマドや甑は受容しながらも、長胴甕ではなく大型球胴甕を用いている点である。1つの考え方としては、在来に代替可能な器種がない甑などとは異なり、煮炊器は在来の球胴甕があるために、必ずしも長胴甕を必要としなかったというものである。しかし、使用痕跡に目を向けると、違った側面も見えてくる。

一般に長胴甕は底部に火を強く受けて、外面にススが付着するが、内面にはコゲが付着しない。これは朝鮮半島において、長胴甕は甑と共に蒸す調理にもちいられる湯沸し専用の煮炊器だからである（坂

井1988、中西1985、宇野1999、大庭・杉山・中久保2006)。煮込む調理などでは、小型平底鉢や鍋がもちいられる。

一方、大型球胴甕では内面にベッタリとコゲが付着するものが多い傾向にある。また、口縁部に吹きこぼれの痕跡を残すものも認められる。こうした使用痕跡は布留式甕に通有であり、在来の炊き上げる炊飯を経たものである（小林・柳瀬2002、大庭・杉山・中久保2006、徳澤・河合・石田2007)。今後、量的に使用痕跡を分析する必要があるが、大型球胴甕は器形が大型化しているものの、必ずしも湯沸し専用器ではないのである。

以上のように考え、摂津においては法量や長胴甕の定着時期が中期後半であることを再確認すると、その変遷の背景に新来の調理方法や内容が徐々に受容されたことが推定できる。

5　おわりに

本論では、摂津地域における韓式系土器と在来の煮炊器の様相について、考察してきた。

まず、韓式系土器の器種構成から渡来系集団の定住が確実な集落が少ないことを指摘した。次に、在来の煮炊器の法量に注目し、韓式系土器が出現する中期前半では大型球胴甕が主体、中期後半に土師器長胴甕がそれに加わり、後期前葉に大型球胴甕が認められなくなるという変遷を明らかにした。こうした変遷をたどる要因としては、中期前半では必ずしも新来の調理方法や内容に移行していないため、と考えられる。

上記の煮炊器様相は、河内潟周辺において明らかとなっている韓式系土器の受容とは異なり、比較的長い年月をかけて、朝鮮半島南部から渡来した調理内容・方法を受容した過程が復元される。こうした地域差は韓式系土器の様相をふまえると、渡来系集団の規模や定住期間、あるいは交流関係が煮炊器の様相に反映していることが推測される。

このように、今後、古墳時代中期の煮炊器様相を考えるためには、韓式系土器のみではなく、土師器にも目をむけ、両者の関係性を明らかにすることによって、その地域における渡来集団と在来の集団の関係に迫ることが可能となる[3]。

待兼山5号墳では、韓式系土器と土師器甕が共に出土している。今回十分に検討することができなかったが、古墳から韓式系土器が出土することは珍しい例である。当古墳の被葬者が、渡来系集団となんらかの関係をもっていたことを示すものであろう。また、新来・在来の集団とどのような関係にあったのか、についても今後考える必要があろう。

注

(1)小論でいう古墳時代中期とは、須恵器型式でいうTG232型式からTK47型式までの時期に該当する時期を指す。須恵器編年については、田辺昭三氏や田中清美氏の編年観を参考にし、中期前半はTG232期からTK73、TK216期、中期後半はTK208期からTK23・47期を指すことにする（田辺1966・1981、田中清2002)。中期前半に製作された須恵器は初期須恵器と呼称する。

また、煩瑣な記述をさけるため、型式を省略したTK208期などと記述することにしたい。なお、時期比定については共伴する須恵器型式と土師器高杯の時期（辻1999・2002）を考慮する。

(2)小論で扱う摂津地域は、淀川北岸から猪名川・武庫川流域および表六甲のことであり、現在行政区分でいう大阪府三島郡、高槻市、茨木市、吹田市、豊中市、箕面市、池田市、兵庫県尼崎市、西宮市、川西市、豊能郡、宝塚市、三田市、芦屋市、神戸市の一部を指す。

(3)法量の散布図作成にあたっては、外面ハケ調整の資料を中心に、報告書に記載されているものに関してはそれに従い、記載がないものに関しては実測図を計測した。長胴甕など大型の土器については、残存状況がよくないものが少なくないために散布図にそれらが反映されない可能性もある。こうした資料については必要に応じて補って記述することにしたい。

分析対象とした資料は以下の通りである。

TG232期：安威遺跡住居16、17、24

TK73～216期：安威遺跡住居14、寺田遺跡178地点SR206

中期前半：安威遺跡住居9、19、25、33、蛍池東遺

跡住居1、13、SD1、山ノ上遺跡第8次SH11、若王子遺跡SE07、利倉西遺跡2区落ち込み2、郡家道跡SA01

TK208期：郡家道跡藤坪地区10次河道

TK23・47期：松野遺跡SE204中層、SB213、SX201・203・204・212・215、SD201・204、猪名庄遺跡SX05・06、住吉宮町遺跡SB04、2・3号墳

(4)韓式系土器の受容過程の集落および地域差、土師器の変容については、別稿において詳細に論じることにしたい。

参考文献

青柳泰介　2005「大和の渡来人」『日本考古学協会2003年度滋賀大会シンポジウム2　ヤマト王権と渡来人』、大橋信弥・花田勝広編、サンライズ出版：pp.38－64

今津啓子　1994「渡来人の土器―朝鮮系軟質土器を中心として―」『ヤマト王権と交流の諸相古代王権と交流』、名著出版：pp.111－139

植野浩三　1987「韓式系土器の名称」『韓式系土器研究Ⅰ』、韓式系土器研究会：pp.1－3

宇野隆夫　1999「古墳時代中・後期における食器・調理法の革新　―律令制的食器様式の確立過程―」『日本考古学』第7号、日本考古学協会：pp.25－42

大庭重信・杉山拓己・中丸保辰夫　2006「スス・コゲからみた長原遺跡古墳時代中期の煮炊具の使用法―小型鍋（平底鉢）を中心に―」『大阪歴史博物館研究紀要』第5号、大阪市文化財協会：pp.21－40

岡戸哲紀　1994「搗鉦期の陶邑」『文化財学論集』文化財学論集刊行会：pp.277－286

亀田修一　1993「考古学からみた渡来人」『古文化論叢』30（中）、九州古文化研究会：pp.747－778

亀田修一　2003「渡来人の考古学」『七隈史学』第4号、七隈史学会：pp.1－14

金光正裕・介山幸美　1992「蛍池東遺跡の発掘調査―古墳時代前期の大型掘立柱建物と作り付け竈について―」『大阪文化財研究―20周年記念号―』、大阪文化財センター：pp.51－68

京嶋　覚　1992「古墳時代後半期における土師器の器種構成」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告書Ⅲ』、大阪市文化財協会：pp.187－200

京嶋　覚　1993「古墳時代後半期の土器の変遷」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告書Ⅴ』、大阪市文化財協会：pp.269－276

京嶋　覚　1994「韓式系土器から土師器へ―大阪市長原遺跡の検討から―」『韓式系土器研究Ⅴ』、韓式系土器研究会：pp.166－175

小林正史　1991「土器の器形と炭化物からみた先史時代の調理方法」『北陸古代土器研究』創刊号、北陸古代土器研究会：pp.15－88

小林正史　1992「煮沸実験に基づく先史時代の調理方法の研究」『北陸古代土器研究』第2号、北陸土器研究会：pp.80－101

小林正史・御願昭彦　2002「コゲとススからみた弥生時代の米の調理方法」『日本考古学』第13号、日本考古学協会：pp.19－47

酒井清治　1998「日韓の瓶の系譜からみた渡来人」『楠崎彰一先生古稀記念論文集』、楠崎彰一先　生古稀記念論文集刊行会：pp.27－38

坂井秀弥　1988「日本のごはんは蒸した「飯」であった―古代の米調理法復元メモ―」『新潟考古学談話会会報』第2号、新潟考古学談話会：pp.12－15

田中清美　1989「五世紀における摂津・河内の開発と渡来人」『ヒストリア』第125号、大阪歴史学会：pp.1－25

田中清美　1999「SE703出土韓式系土器と土師器の編年的位置付け」『長原遺跡発掘調査報告Ⅶ』、大阪市文化財協会：pp.101－106

田中清美　2002「須恵器定型化への過程」『田辺昭三先生古稀記念論文集』、田辺昭三先生古稀記念の会：pp.207－226

山中清美　2005「河内湖周辺の韓式系土器と渡来人」『日本考古学協会2003年度滋賀大会シンポジウム2　ヤマト王権と渡来人』、大橋信弥・花田勝広編、サンライズ出版：pp.65－89

田辺昭三　1966『陶邑古窯跡群』、平安学園考古クラブ

田辺昭三　1981『須恵器大成』、角川書店

辻　美紀　1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学・大阪大学考古学研究室10周年記念論集Ⅱ』、大阪大学考古学研究室：pp351－365

辻　美紀　2002「河内地域における古墳時代中期の土師器」『長原遺跡発掘調査報告書Ⅸ』、大阪市文化財協会：pp.66－76

寺井　誠　2006「土器から探る長原遺跡渡来人の故郷」『シンポジウム　古墳時代に生きた渡来人の軌跡―長原遺跡・蔀屋北遺跡・上杉郁遺跡を中心に―要旨集』、大阪府文化財センター：pp.7－12

徳澤啓一・河合　忍・石山為成　2007「弥生土器の炊飯過程とスス・コゲの産状」『土器研究の新視点―縄文から弥生時代を中心とした土器生産・焼成と食・調理―』、考古学リーダー9、大手前大学史学研究所編、六一書房：pp.43－75
富山直人　2005「播磨における大陸との交流」『日本考古学協会2003年度滋賀大会シンポジウム2　ヤマト王権と渡来人』、大橋信弥・花山勝広編、サンライズ出版：pp.143－173
中野　咲　2007「近畿地域・韓式系土器集成」『渡来系遺物からみた古代日韓交流の考古学的究』、和田晴吾編、立命館大学文学部日本史学専攻考古学コース：pp.213－405
中西克弘　1985「須恵器出現期の土師器―畿内産土器を中心に―」『財団法人東大阪市文化財協会紀要1』、東大阪市文化財協会：pp.83－129
西　弘海　1982「土器様式の成立とその背景」『考古学論考　小林行雄博士古稀記念論文集Ⅰ』、平凡社：pp.447－471
浜中邦弘・田中元浩　2006「初期須恵器と実年代との狭間―宇治市街遺跡出土資料を考える―」『河内潟周辺に定着した渡来人―5世紀の渡来人の足跡―』、大阪府近つ飛鳥博物館、pp.54－57
韓　志仙　2007「韓国原三国時代の土器にみられる調理方法の検討―中島式硬質無文土器を中心に―」『土器研究の新視点―縄文から弥生時代を中心とした土器生産・焼成と食・調理―』考古学リーダー9、大手前大学史学研究所編、六一書房：pp.76－99
森本　徹　2006「北摂地域における韓式系土器の新例」『韓式系土器研究Ⅸ』、韓式系土器研究会：pp.11－20

遺跡文献

・大阪府高槻市
＜安満遺跡＞
森山克行・横本久和　1977「安満遺跡発掘調査報告書Ⅰ」、高槻市教育委員会
森田克行　1983『高槻市文化財調査概要Ⅶ　嶋上郡衙他関連遺跡発掘調査概要・7』、高槻市教育委員会
＜嶋上郡衙遺跡＞
福岡澄男・森田克行　1987「嶋上郡衙跡（郡家川西遺跡）」『第21回埋蔵文化財研究集会　第4回調査研究会　弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題』、埋蔵文化財研究会・大阪府埋蔵文化財協会
高槻市教育委員会　1983『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・7』
宮崎康雄　1989「嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・13」、高槻市教育委員会
大阪府教育委員会　1972「大阪府文化財調査概要1971－7　嶋上郡衙発掘調査概要・Ⅱ」
大阪府教育委員会　1973「大阪府文化財調査概要1972－1　嶋上郡衙発掘調査概要・Ⅲ」
＜ツゲノ遺跡＞
栄本　哲　1988『ツゲノ遺跡発掘調査概報・Ⅱ』、大阪府教育委員会
・大阪府茨木市
＜太田遺跡＞
鍵山博子　1998「太田遺跡発掘調査報告書」、名神高速道路内遺跡調査会
＜溝咋遺跡＞
合田幸美ほか　2000a『財大阪府文化財調査研究センター調査報告書第49集 溝咋遺跡（その　1・2）』、大阪府文化財調査研究センター
合田幸美ほか　2000b『財大阪府文化財調査研究センター調査報告書第50集 溝咋遺跡（その3・4）』、大阪府文化財調査研究センター
＜安威遺跡＞
奥和之・酒井泰子　2000『安威遺跡』、大阪府教育委員会
＜郡遺跡＞
黒須靖之　2005『郡遺跡発掘調査概要報告書』、茨木市教育委員会
＜玉櫛遺跡＞
小野亜由美・駒井正明　2003『財大阪府文化財調査研究センター調査報告書第95集玉櫛遺跡Ⅱ』、大阪府文化財センター
＜東奈良遺跡＞
広瀬雅信・亀島重則　1990「東奈良遺跡発掘調査概要・Ⅱ」、大阪府教育委員会
・大阪府吹田市
＜高城遺跡＞
賀納章雄　2001「高城遺跡の発掘調査」『平成12年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』、吹田市教育委員会
賀納章雄　2005「高城遺跡の発掘調査」『平成16年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』、吹田市教育委員会

<五反島遺跡>
加藤志月ほか　2003『吹田市五反島遺跡発掘調査報告書』、吹田市教育委員会
<垂水南遺跡>
米田文孝　1982「所謂漢鏡式系土器の一例」『杵筑　関西大学博物館学芸課程創設二十周年記念特集』、関西大学考古学等資料室
・大阪府豊中市
<上津島遺跡>
服部聡志　1997『豊中市文化財調査報告第41集上津島遺跡　第5次発掘調査報告』、上津島遺跡調査団・豊中市教育委員会
<利倉西遺跡>
柳本照男　2005「新修豊中市史第4巻　考古」、豊中市史編さん委員会
<山の上遺跡>
柳本照男　2005『新修豊中市史第4巻』考古、豊中市史編さん委員会
<新免遺跡>
柳本照男・田上雅則　1984『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要1983年度』、豊中市教育委員会
服部聡志・岡村勝行　1987『新免遺跡　第11次発掘調査報告書』、阪急宝塚線豊中市内連続立体交差事業遺跡調査団・豊中市教育委員会
<本町遺跡>
橋田正徳　1995『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要平成6(1994)年度』、豊中市教育委員会
<蛍池東遺跡>
合田幸美ほか　1997「蛍池東遺跡(3・4)」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第22集　宮の前遺跡・蛍池東遺跡・蔀屋北遺跡・蛍池遺跡・蛍池南地区・蛍池西遺跡1993－1996年度発掘調査報告書』、大阪府文化財調査研究センター
<蛍池西遺跡>
玄野　強ほか　1998『蛍池西遺跡』、蛍池西遺跡調査団・大阪府池田市
<住吉宮の前遺跡>
山本　雄ほか　2001『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第59集　住吉宮の前遺跡』、大阪府文化財調査研究センター
・兵庫県尼崎市
<若王子遺跡>
渡辺　昇ほか　2006『兵庫県文化財調査報告書第305冊　若王子遺跡』、兵庫県教育委員会
<猪名庄遺跡>
渡辺　昇ほか　1999『尼崎市文化財調査報告書第28冊　猪名庄遺跡』、尼崎市教育委員会
<田能高田遺跡>
兵庫県教育委員会　1997『兵庫県文化財調査報告第166冊　田能高田遺跡』
・兵庫県川西市
<栄根遺跡>
岡野康隆　1989『川西市栄根遺跡―第19次発掘調査報告―』、川西市遺跡調査会
深井明比古・岡野康隆　1982『栄根遺跡』、川西市教育委員会
・兵庫県芦屋市
<寺山遺跡>
芦屋市教育委員会　1999『芦屋市文化財調査報告第32集　寺田遺跡第95地点発掘調査概要報告書』
安山　滋ほか　2006『芦屋市文化財調査報告第62集業平遺跡第61地点、月若遺跡第79・81地点、寺田遺跡第178地点・181地点発掘調査報告書』、芦屋市教育委員会
・兵庫県神戸市
<郡家遺跡>
藤本史子ほか　1992『郡家遺跡』、大手前女子大学史学研究所
浅岡俊夫・古川久雄　1995『郡家遺跡―播坪地区第10次調査―』、六甲山麓遺跡調査会
丸山　潔ほか　1989「郡家遺跡」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』、神戸市教育委員会
<本山北遺跡>
浅岡俊夫編　1995『神戸市東灘区本山北遺跡』、六甲山麓遺跡調査会
<森北町遺跡>
黒田恭正　1988「森北町遺跡」『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』、神戸市教育委員会
<小路大町遺跡>
井尻　悟　2003『小路大町遺跡第4次調査』、神戸市教育委員会
<赤松町遺跡>
村尾玖人　1992『赤松町遺跡発掘調査報告書』、淡神文化財協会・赤松町遺跡調査会
<中山手遺跡>
木下雅寿・三輪晃三　2000『平成9年度神戸市埋蔵文化

財年報』、神戸市教育委員会
＜神楽遺跡＞
渡辺伸行・西岡誠司　1987『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』、神戸市教育委員会
＜住吉宮町遺跡＞
中村大介ほか　2001『住吉宮町遺跡（第24次・第32次調査）』、神戸市教育委員会
＜松野遺跡＞
口野博史ほか　2001『松野遺跡発掘調査報告書第３～７次調査』、神戸市教育委員会

2　古墳時代中期から後期における円筒埴輪の規格とその変質

—円筒埴輪の４条突帯５段構成化—

東影　悠

1　本稿の課題と目的

「円筒埴輪製作技術の省略化」、この言葉は古墳時代中期から後期にかけての埴輪生産の変質を表す際によくもちいられる。近年、円筒埴輪の製作技術の詳細な研究がおこなわれ（藤井2003など）、その技術的な変質の実態が明らかにされつつある。

待兼山５号墳が位置する猪名川流域においては、兵庫県川西市勝福寺古墳の調査（岡野・寺前・猪永編2006、寺前・福永編2007）や古墳時代後期の埴輪生産の研究（和田2005、三辻・東影2007）の進展により、後期における埴輪生産の様相が明らかになってきている。

発掘調査の結果、待兼山５号墳はTK23・47型式期[1]に位置づけられることが確実となった。従来、猪名川流域における当該期の埴輪の様相は不明な点が多く、古墳時代中期から後期をつなぐ資料として当古墳出土埴輪は重要となる。そこで本稿においては、発掘調査の結果明らかとなった待兼山５号墳の埴輪の様相をもとに、猪名川流域における古墳時代中期から後期にかけての埴輪生産の変質過程を検討し、地域内における埴輪生産の変質の実態をケーススタディーとして提示する。本稿では分析対象として主に円筒埴輪を扱うが、製作技術のみならず円筒埴輪の規格（坂1988など）や古墳の階層的な位置づけ、普長系譜のあり方（都出1988）などを複合的に検討することにより、生産体制を含めてその変質の実態を明らかにしていくものである。

まず、古墳時代中期から後期への埴輪生産の変質過程についての研究史を概観していく。

円筒埴輪の編年を確立した川西宏幸は、円筒埴輪が製作工程の「寧なものから次第に簡略化されていくという傾向を示した（川西1978）。つまり、５世紀末から６世紀初頭における円筒埴輪の変化として、外面に２次調整ヨコハケ[2]を有し断面台形の突帯を有するⅣ群から、外面の２次調整を省略し不整形で突出の低い突帯を有するⅤ群へと変化することを指摘したのである。

さらに、Ⅴ群の円筒埴輪には底部の変形を調整したと考えられる「底部調整」という新たな技術が導入されていることに注目し、その要因として粘土紐を巻き上げる際に途中で乾燥期間をおいていたそれ以前と異なり、Ⅴ群になると底部から口縁部までを一気に整形するという工程の簡略化を想定した。

このように、川西宏幸の研究によって古墳時代後期にかけての具体的な円筒埴輪製作の簡略化の方向性が明らかにされたのである。

円筒埴輪の製作技術の変遷過程を詳細に検討した藤井幸司は、成形、突帯製作、外面調整、などの諸特徴が古墳時代後期にかけていずれも簡略化していくという傾向を明らかにすると共に、その組み合わせを検討し、Ⅴ群への埴輪製作の変遷過程を明らかにした[3]（藤井2003）。その上で、古墳時代中期から後期にかけての埴輪製作技術の変遷が、埴輪生産組織の再編成に関連しておこなわれたものとした。そして、それはTK23・47型式期から徐々におこなわれたものであり、MT15型式期に完了した可能性を指摘している。

以上のように古墳時代中期から後期における埴輪生産の様相は、埴輪製作の簡略化の中で捉えられてきており、それは埴輪生産組織の編成と関連している可能性が高いと考えられる。

埴輪生産体制については、高橋克壽によって体系的な研究がなされている（高橋1994）。高橋は、近畿地方では古墳時代中期に「中央」における埴輪生産組織が完成され、その周辺部においても製作者の派遣などが想定されているように「中央」との関係性をもって埴輪生産がおこなわれた可能性を指摘し

た。一方、後期になると特定の窯より広範囲の地域に埴輪が供給される「拠点的生産」が一般的となり、一元的な埴輪の供給がおこなわれるようになるとした。

しかし近年、和田一之輔によって待兼山5号墳の位置する猪名川流域の古墳時代後期の埴輪生産が検討されるに至り、地域内でも個々の古墳ごとに異なる特徴の円筒埴輪が供給されていることが指摘されたのである（和田2005）。高橋の想定した一元的な供給とは異なるこうした生産の特徴を、和田は「個別的供給体制」と提唱する[1]。このように、古墳時代後期の埴輪生産のあり方については十分な検討がなされているわけではなく、さらに研究を深化させていく必要がある。

また、円筒埴輪の規格とそれが採用される古墳の形態・規模との相関性に関する研究も坂靖などによっておこなわれているものの（坂1988）、古墳時代後期に関する研究は資料的な制約もあり十分にはおこなわれていない。古墳時代後期の円筒埴輪の規格性については、前方後円墳に採用される大型埴輪と群集墳に採用される小型埴輪が対比される段階との指摘がある（坂1994）。ただし、この検討は大和地域を対象にしたものであるため、その他の地域においてもそうした様相が認められるのかを検討する必要がある。

このような研究動向の中にあり、上述したように本稿は、古墳時代中期から後期にかけての埴輪生産の変質過程を検討しその実態を明らかにしていくことを目的とする。

2　円筒埴輪の規格と古墳の階層性

ここでは円筒埴輪を分析の対象とし、円筒埴輪に認められる規格の変遷と古墳の墳形・規模との対応関係を各地域において分析する。こうした検討により、それぞれの地域においてどのような原理によって埴輪が採用されていたのかを明らかにできると考えるからである。

円筒埴輪の器高と突帯数がそれを採用する古墳の階層と対応するという指摘は従来なされてきたものである（坂1988）。一方で、古墳時代中期の猪名川流域においては円筒埴輪に古墳の階層性が反映されないことが明らかになっている（清家2001）。待兼山5号墳がまさにそれに該当するのであるが、直径15mの円墳である当古墳の円筒埴輪は、当地域の首長墳とされる椋塚古墳群に位置する墳丘長55mの前方後円墳である御獅子塚古墳と、器高・突帯数が同じなのである。つまり、両古墳には同じ規格を有した円筒埴輪が供給されているのである。猪名川流域における古墳時代中期の円筒埴輪は、いずれの古墳においても3条突帯4段構成で器高約42cmになるという特徴を有する。こうした背景について、清家章は「大王権力の関与」を想定する（清家2001）。椋塚古墳群への規制が加えられると共に、待兼山丘陵の小集団を「大王権力」が直接的に掌握した可能性を考えたのである。

先述したように、当地域における古墳時代後期の埴輪供給を検討した和田一之輔は、古墳ごとに個別の埴輪の生産・供給がおこなわれた可能性を想定し、「個別的供給体制」を提唱する（和田2005）。その中で和田は、当地域の埴輪生産の特徴として須恵器生産との関連が認められることを指摘する。こうした古墳時代後期のあり方についても、中期と同様に「大王権力」との関わりの中で捉えられる可能性が指摘されるが（清家2005）、一方で中期からの規格・製作技術の変質も想定される。

ただし、その実態が詳細に検討されたわけではなく、また古墳時代中期から後期にかけて認められる埴輪生産の変革の中での評価がなされたわけではない。当地域における埴輪生産の変革に政治的背景が関わっている可能性は高いものの、埴輪生産そのものの実態を正しく捉える必要があると考える。以下においては、各地域の円筒埴輪の様相を検討し、それぞれの比較を通じて埴輪生産の在り方を明らかにしていくこととする。なお、対象とする地域は猪名川流域のほか、中期から後期の様相が比較的明瞭な乙訓地域、南山城地域を取り上げる。

猪名川流域　猪名川は、現在大阪府と兵庫県の県境をなし、大阪府池田市、箕面市、豊中市、兵庫県川

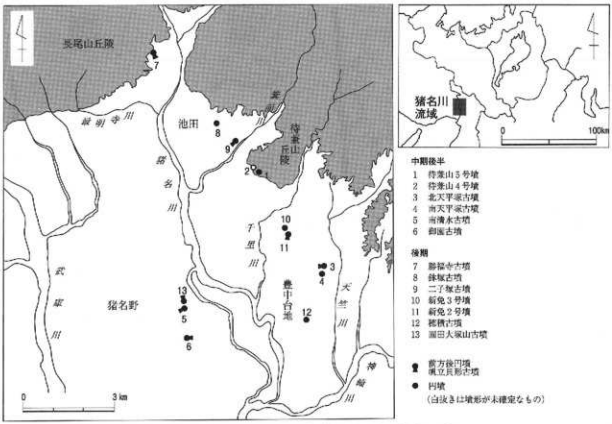


図59　猪名川流域における中期後半以降の主要古墳の分布

西市、宝塚市、伊丹市、尼崎市の一部にまたがっている。猪名川の周辺には沖積平野が形成されており、猪名川東岸では豊中台地、待兼山丘陵、池田地域に、西岸では長尾山丘陵や猪名野地域に古墳が集中して分布する状況が認められ、それぞれに小地域勢力が分立していたものと想定される（図59）。

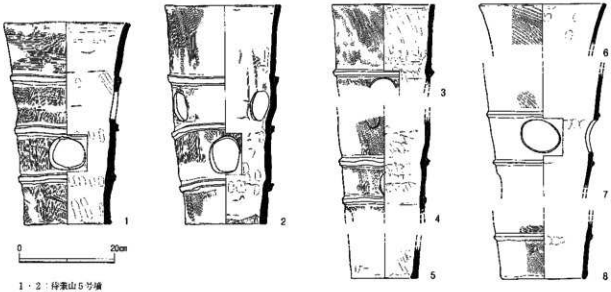
当地域における各古墳出土の埴輪の特徴についてはすでに詳述されているので（田上1987、清家2005、和田2005）、ここではそれらを時期ごとにまとめることにする。

猪名川流域においては、中期後半に位置づけられる古墳のうち、待兼山丘陵、豊中台地に埴輪の採用される古墳が認められる。いずれも豊中市に位置する北天平塚古墳、南天平塚古墳、利倉南古墳、待兼山4号墳、待兼山5号墳がそれぞれ挙げられる（図60）。

待兼山5号墳以外では、円筒埴輪は破片資料のみで全形を復元できるものはないが、いずれも3条突帯4段構成であった可能性が高い。待兼山5号墳においては、外面調整に静止ヨコハケをもちいるものとタテハケのみのものが共存している。これらはそれぞれ系譜を異にしたものと考えられるが、そうした系譜を越えて共通の規格がもちいられていることは重要である。すでに指摘されているように、中期においては古墳の大小に関わらず同規格の円筒埴輪がもちいられていたことがわかる。

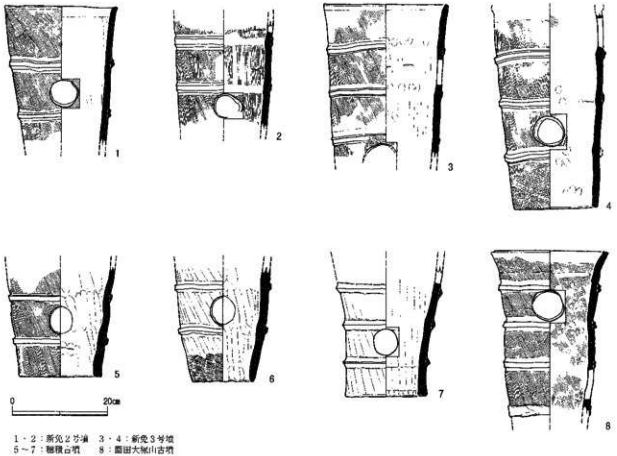
古墳時代後期になると、待兼山丘陵では確実に埴輪の採用される古墳が確認されない。豊中台地では、豊中市穂積古墳、新免2号墳、新免3号墳において埴輪が確認されている。これらに供給された円筒埴輪は、須恵器などにタタキを施す際にもちいられる板状工具によって底部調整が施されており、4条突帯5段構成で器高約50cmになることが判明している（和田2005）。

一方、猪名川西岸に位置する尼崎市園田大塚山古墳においても4条突帯5段構成の円筒埴輪が採用されている。園田大塚山古墳の円筒埴輪は、器高約45cmであり、最下段の突帯がいわゆる「断続ナデ技法



1・2：待兼山5号墳
3～5：北天平様古墳
6～8：待兼山4号墳

図60　猪名川流域における中期後半の円筒埴輪



1・2：新免2号墳　3・4：新免3号墳
5～7：穂積古墳　8：園田大堀山古墳

図61　猪名川流域における後期の円筒埴輪

B」（鐘方・中島1992）といわれる無調整のものである。底部調整には板オサエが施されているものの、豊中台地において認められるようなタタキ板をもちいるものとは異なり、刻み目を施していない板状工具がもちいられている。このように、猪名川西岸において認められる円筒埴輪は、東岸とは系譜を異にしたものであるといえるが、やはり４条突帯５段構成であるということは重要である。

このように、古墳時代後期には猪名川流域の円筒埴輪はいずれも４条突帯５段構成化することが指摘できる（図61）。墳丘長44mの前方後円墳から径18mの円墳まで、古墳の階層に関わらず同規格の円筒埴輪がもちいられている。こうした状況からは、３条突帯４段構成と４条突帯５段構成という変化はあるものの、中期と同様の背景を想定することが可能ではなかろうか。つまり、古墳時代後期においても中期と同様に政治的な影響によりこうした規格が採用された可能性が考えられるのである。ただし、次項において詳述するが、その製作技術は大きく変質しており工人集団の変質さえも想定される。

なお、長尾山丘陵に位置する後期の前方後円墳である勝福寺古墳には「尾張型埴輪」（赤塚1991）が採用されている。当地域においてそれらの埴輪は生産されたと考えられることから、尾張地域の埴輪製作者集団の移動が想定される（東影2006、三辻・東影2007）。勝福寺古墳の円筒埴輪は、尾張地域の規格によって製作された２条突帯３段構成のものであり、当地域においては例外的な存在といえる。

乙訓地域　乙訓地域は桂川西岸に位置し、現在の京都府京都市、向日市、長岡京市、大山崎町の一部にまたがっている。当地域においては、首長系譜の変動に関する研究が盛んにおこなわれており（都出1988、山本1996、福永2004）、古墳の分布状況から向日、長岡、樫原・山田の小地域に区分できることが明らかにされている（図62）。

当地域において中期後半に位置づけられる古墳のうち、京都市巡礼塚古墳、鏡塚古墳、山田桜谷１号墳、山田桜谷２号墳、向日市西小路古墳、南小路古墳、山畑１号墳、長岡京市開田10号墳、舞塚１号墳などに埴輪の樹立されていたことが知られる（梅本1994）。開田10号墳、舞塚１号墳においては、共に３条突帯４段構成と４条突帯５段構成の円筒埴輪が

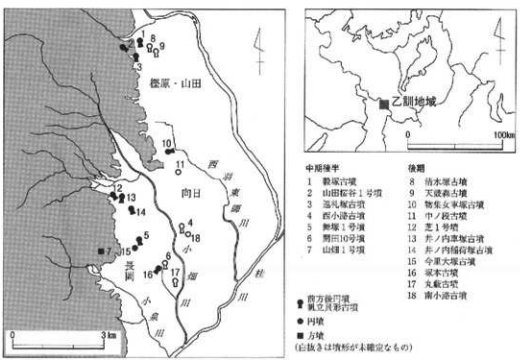


図62　乙訓地域における中期後半以降の主要古墳の分布

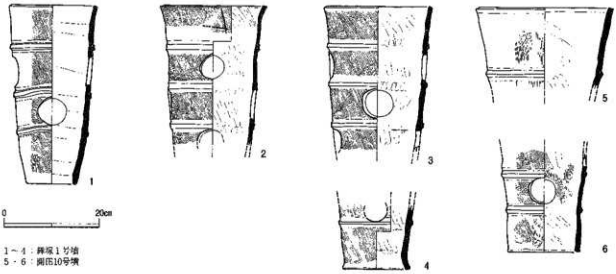
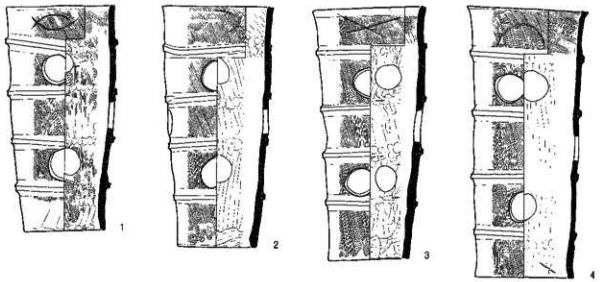


図63　乙訓地域における中期後半の円筒埴輪



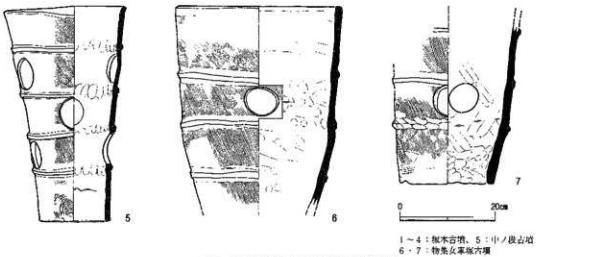


図64　乙訓地域における後期の円筒埴輪

認められる（図63）。

舞塚1号墳は墳丘長39mの前方後円墳であり、園田10号墳も未確定ながら前方後円墳の可能性が想定されている。つまり、共に4条突帯5段構成の円筒埴輪を採用しているという点から、円筒埴輪の規格に古墳の規模が反映されている可能性が高い。一方、3条突帯4段構成の円筒埴輪も同時に認められるが、古墳の形態と規模に対応した規格と考えられる4条突帯5段構成のものと共存して樹立されている点が重要といえよう。

当地域において古墳時代後期に位置づけられる古墳のうち、向日市中ノ段古墳、物集女車塚古墳、長岡京市塚本古墳、丸藪古墳、井ノ内車塚古墳などに埴輪の採用されていたことが判明している。

後期以降、当地域において認められる円筒埴輪はいずれも4条突帯5段構成に統一される（図64）。一方で、各古墳における円筒埴輪はそれぞれ異なる特徴を示す。塚本古墳では、底部調整にケズリの施されるものと施されないものなど、系譜の異なると考えられる特徴を有する円筒埴輪が認められる。ただし、突帯数を揃えていること、透孔の配置がいずれも下から2段目、3段目、4段目の各段に互い違いに配置されるという共通した様相を呈することから、その製作は一定の規範のもとにおこなわれた可能性が高いといえる。また、後期でもやや時期が下るものの、物集女車塚古墳より出土した円筒埴輪は最下段突帯に「斯続ナデ技法B」（鐘方・中島1992）の認められるもののみである。

このように基本的にそれぞれ異なった技術によって円筒埴輪が製作されており、それぞれ系譜を異にしている可能性も考えられるものの、いずれもが4条突帯5段構成になるということは重要である。特に中ノ段古墳は墳丘形態・規模とも不明な点はあるものの、おそらく小型の円墳と考えられる古墳である。このような小規模な古墳においても4条突帯5段構成の円筒埴輪が採用されている。

つまり、古墳時代後期以降には古墳の階層に関わらず、供給される円筒埴輪が4条突帯5段構成のみに統一されるのである。こうした点は、先述した猪名川流域と共通した様相といえる。

南山城地域　南山城地域は、現在の京都府宇治市、城陽市から木津川市にかけての宇治川流域と木津川流域を中心とする地域である。当地域は、古墳の分布状況から宇治、久津川、男山、富野、青谷、木津、山城などの小地域に区分が可能であり、それぞれに小地域勢力が分立していたものと考えられる（荒川編1992、吹田ほか編1998）（図65）。

古墳時代中期後半に位置づけられる古墳のうち、木津川市上人ケ平5号墳、上人ケ平8号墳、上人ケ平14号墳、西山塚古墳、城陽市赤塚古墳、上人谷9号墳などにおいて埴輪の採用されていたことが判明している（梅本2003）。当地域における中期後半の円筒埴輪は、6条突帯7段構成から2条突帯3段構成のものまで多様なあり方を示す（図66）。

墳丘長26mの帆立貝形古墳である上人ケ平5号墳においては6条突帯7段構成の円筒埴輪が出土しており、同じ古墳群に位置する一辺13mの方墳である8号墳においては5条突帯6段構成以上の円筒埴輪が確認されている。また、一辺7.5mの方墳である14号墳においては3条突帯4段構成の円筒埴輪が確認されており、同一古墳群中での古墳の規模と形態に対応した規格の円筒埴輪が供給されていることがわかる。

径26mの円墳である西山塚古墳においては、3条突帯4段構成と2条突帯3段構成の円筒埴輪が確認されている。また、墳丘長32mの帆立貝形古墳である赤塚古墳においては3条突帯4段構成が、一辺14mの方墳である上人谷9号墳においても3条突帯4段構成の円筒埴輪がそれぞれ確認されている。

なお、宇治市西隼上り窯において3条突帯4段構成の円筒埴輪を焼成したことが確認されている。西隼上り窯からの埴輪の供給先は不明であるものの、その生産は小規模なものとみられることから、おそらくその周辺に位置する群集墳である隼上り古墳群などのそれほど規模の大きくない古墳に供給された可能性が考えられよう。

南山城における古墳時代中期後半の円筒埴輪は6条突帯7段構成から2条突帯3段構成まで規格の異

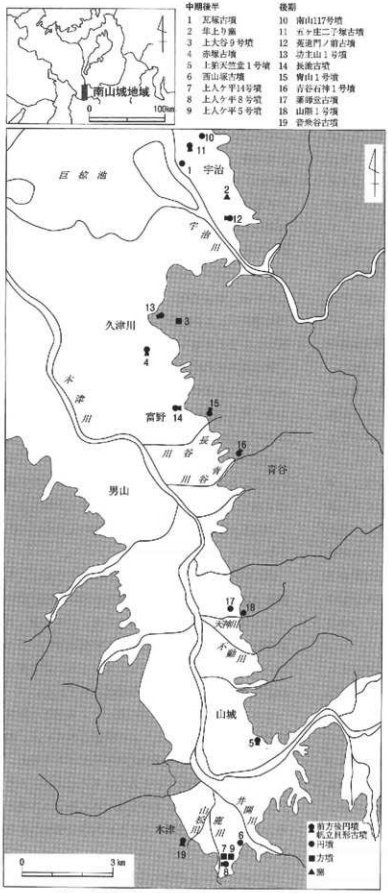


図65　南山城地域における中期後半以降の主要古墳の分布

なるものが認められ、これは古墳の形態や規模といった階層に対応して製作されている可能性が高い。このように中期後半の当地域においては、古墳の階層を反映して突帯数と器高の異なる円筒埴輪を供給している状況が認められる。

一方、古墳時代後期に位置づけられる古墳のうち、宇治市五ヶ庄二子塚古墳、菟道門ノ前古墳、功主山１号墳、南山117号墳、城陽市青谷石神１号墳、青山１号墳、木津川市薬師堂古墳、音乗谷古墳などにおいて埴輪の樹立されたことが判明している。

後期になると当地域における円筒埴輪はいずれも４条突帯５段構成に統一される（図67）。器高約50cmになるものが青谷石神１号墳、菟道門ノ前古墳、薬師堂古墳、音乗谷古墳において確認されている。当地域においては、底部調整が施されないという特徴の共通する一群が認められる。音乗谷古墳においては透孔配置のみが他の古墳のものと異なる特徴を有するが、その他の古墳においてはいずれも透孔配置も他の特徴と同様に共通することから共通性の高いことがわかる。一方、それらと異なった特徴を有する音乗谷古墳の円筒埴輪と共通するものが青山１号墳において確認されている。これらは、器高や透孔配置など共通する特徴を多く有することから、同一の製作者集団によって供給された可能性が指摘されている（高橋2005）。仮にそうした想定が正しければ、音乗谷古墳と青山１号墳に埴輪を供給した製作者集団とそれ以外の古墳に埴輪を

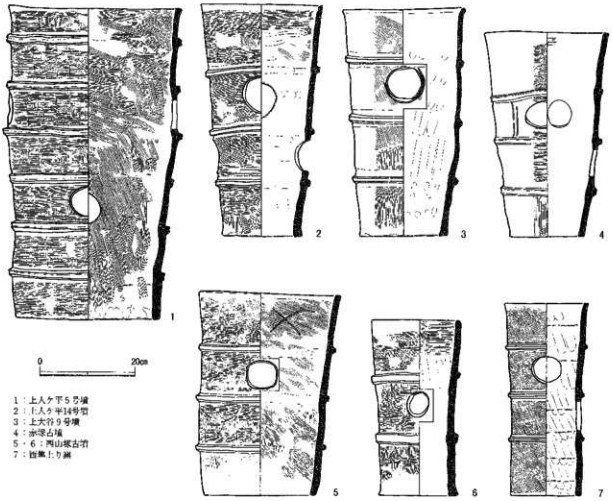


図66　南山城地域における中期後半の円筒埴輪

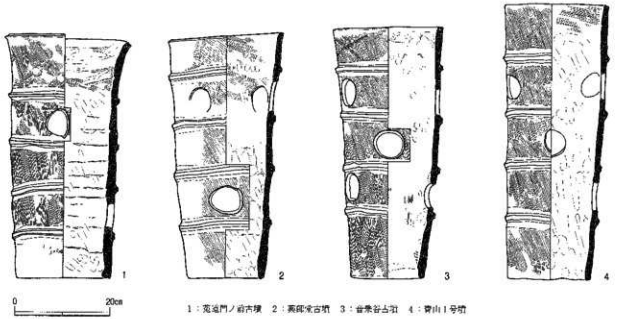


図67　南山城地域における後期の円筒埴輪

供給した製作者集団という、異なった系譜の製作者集団が当地域において存在した可能性が考えられる。

古墳時代後期の南山城地域において確認される円筒埴輪は、いずれも4条突帯5段構成で器高50～60cmとなる。墳丘長40mの前方後円墳から径10mの円墳にまで同様の円筒埴輪が採用されていることから、突帯数や器高といった規格に古墳の形態・規模が反映されている状況は認められない。地域内において系譜の異なると考えられる製作者集団による供給が想定されるものの、そうした集団の違いを越えて同様の規格が採用されているのである。これは、中期における古墳の格差にともなって突帯数と器高を変化させるという生産のあり方と異なり、同一規格の円筒埴輪を古墳の格差に関係なく供給するという点で大きな変化と捉えることができる。

以上のように当地域においても、古墳時代後期に円筒埴輪が4条突帯5段構成に統一されたということは重要であり、先に見た2地域と同様の傾向を示していることがわかる。

なお、古墳時代後期初頭の五ヶ庄二子塚古墳に「尾張型埴輪」が採用されることは地域間の関係と政治的動向を捉えるうえで重要といえよう（辻川2006・東影2006）。なお、この「尾張型埴輪」は5条突帯6段構成に復元されているものの（荒川1999）、一連の破片として残存しているものは突帯が4条のみである。このため、現状では規格に関して4条突帯5段構成以上に復元できる可能性を指摘するにとどめる[5]。ただし、底部高や突帯間隔などは当地域の他の円筒埴輪と全く異なるものであり、また近畿地方に分布する他の「尾張型埴輪」と共通したものであることから、それら独自の規格にもとづいて製作された可能性が高いといえる。

以上のように3地域における円筒埴輪の規格とその変質を検討してきたが、その結果、古墳時代後期になると今回対象としたいずれの地域においても円筒埴輪は古墳の階層に関わらず4条突帯5段構成化することが明らかとなった。このような、古墳時代後期における円筒埴輪の4条突帯5段構成化を、円筒埴輪の規格の変化にみられる重要な画期として指摘しておく。こうしたいわば「規格の統一化」の背景にどのような状況が想定されるのであろうか。以下においてはこうした点について埴輪生産の変革という視点から検討していく。

3　埴輪生産の変革とその背景

前項においては、円筒埴輪の規格の変質を検討した。そして、今回対象とした各地域においては、古墳時代後期になると古墳の形態・規模に関わらず円筒埴輪が4条突帯5段構成化するという共通した現象の認められることを明らかにした。

それでは、そうした4条突帯5段構成化という「規格の統一化」には埴輪生産の変質がどのように関連していたのであろうか。待兼山5号墳が位置する猪名川流域においては、古墳時代中期から後期にかけての古墳の政治的変動に関連して埴輪生産組織の技術的革新もおこなわれたとの指摘がなされてい

表4　猪名川流域における円筒埴輪の特徴

	古墳名	形態	規模	円筒構成			器高	外面調整（ハケメ）			底部調整				透孔配置		最下段突帯		
				2-3	3-4	4-5	(cm)	静ヨコ	回ヨコ	タテ	無し	板オサエ	タタキ	ケズリ	2・3	2・4	紐	A	B
中期後半	北天平塚	方円	30		■		40？	■		■	■				■		■		
	南天平塚	円	20		■		？	■		■	■						■		
	待兼山5号	円	15		■		42	■		■	■			■	■		■		
	待兼山4号	？	？		■		？	■		■	■				■		■		
後期	園田大塚山	方円	44			■	45			■	■	■				■			■
	勝福寺	方円	40	■			42		■					■			■		
	新免2号	帆立	23			■	50			■	■		■			■		■	
	穂積古墳	円	30			■	50？			■	■	■	■			■		■	
	新免3号	円	18			■	50			■	■	■	■			■		■	

註）古墳の形態は、「方円」が前方後円墳、「帆立」が帆立貝式古墳、「円」が円墳、「方」が方墳をそれぞれ表す。
円筒埴輪の構成は、「○条突帯△段構成」を「○-△」と表示。
外面調整、「静ヨコ」は静止ヨコハケ、「回ヨコ」は回転ヨコハケ、「タテ」はタテハケのみを表す。
透孔配置は、透孔の認められる段数の組み合わせを表す。
突帯は、「紐」が粘土紐を先に突帯の形状に成形し貼り付けたもの、「A」・「B」はそれぞれ「断続ナデ技法」の「A」・「B」（瀧方・中島1992）を表す。
濃い網掛けはそれが確認されるもの、薄い網掛けはその可能性の高いもの。

る（清家2005）。猪名川流域においてはすでに明らかにされている通りと考えるが、他地域においても同様の現象が認められるのかを検討するために、前項において検討した各地域の埴輪生産に古墳時代後期の猪名川流域と同様の技術的な革新が認められるのかどうかを検証していく。

上述したように、猪名川流域における古墳時代中期後半と後期の製作技術を比較する上で、待兼山５号墳の円筒埴輪の状況が明らかになったことは重要である。待兼山５号墳の円筒埴輪には、外面調整が静止ヨコハケのものとタテハケのみのものが認められた。このうち、タテハケのものは突帯を貼り付ける位置の基準として「突帯間隔設定技法」（鐘方1997、辻川1999・2003）がもちいられているにも関わらずそれと異なる位置に突帯を貼り付けるなど、製作技術に粗雑化した点が認められる。つまり、タテハケの一群は、待兼山５号墳の円筒埴輪の中でも静止ヨコハケの一群より相対的に新しい要素をもつものとして位置づけられるのである。

それでは、このタテハケの一群は当地域内における後期の円筒埴輪と連続するものなのであろうか。そうした点を、それぞれの製作技術を比較することによって明らかにしていく（表４）。

まず、後期になると、突帯の貼り付け位置の基準として凹線を施すものが認められなくなる[6]。また、突帯の貼り付け方について見ると、待兼山５号墳例は粘土を突帯の形状にしたものを貼り付けているが、後期の円筒埴輪では粘土を器壁に強くナデ付けながら貼り付けるものになる。これは、いわゆる「断続ナデ技法Ａ」（鐘方・中島1992）とされるものである。

さらに、底部調整について見ると、待兼山５号墳においては底部内面にケズリが施されていたものの、後期に出現する一群にケズリは認められず底部外面に板オサエが施されるようになる[7]。

待兼山５号墳においては外面調整タテハケのみの一群が認められるものの、「突帯間隔設定技法」の存在や突帯の貼り付け方などからは後期の円筒埴輪への継続性は認めがたいといえる。外面調整タテハケの一群は静止ヨコハケが施されないもののいわゆるⅣ群（川西1978）の製作技術を基本としており、外面調整ではなくその他の製作技術を重視するならばⅤ群には位置づけられない。そのため、猪名川流域においては外面調整タテハケのみの円筒埴輪の出現をもって埴輪生産の画期とは捉えられず、むしろ後期において新たな製作技術の認められる一群が出現することに大きな画期があると考えられる。

以上のように、猪名川流域においては円筒埴輪の製作技術を比較すると、中期と後期で大きな技術的差異があるといえる。つまり、中期から後期へ埴輪生産が継続的に変質したのではなく、そこには大きな変革が存在し、埴輪生産組織そのものが刷新された可能性が高いのではないだろうか。当地域においては、古墳時代中期から後期にかけて豊中台地から池田や長尾山丘陵へと首長系譜の変動がおこったものとみられており（福永2004）、こうした埴輪生産の変革は首長系譜の変動と相関している可能性が高いと考えられる（清家2005）。

また、前項において詳述したように、乙訓地域における円筒埴輪は古墳時代後期になると、４条突帯５段構成のもののみに統一される。古墳時代中期に

表５　乙訓地域における円筒埴輪の特徴

	古墳名	形態	規模	円筒構成 3-4	円筒構成 4-5	器高（cm）	外面調整（ハケメ） 静止ヨコ	外面調整（ハケメ） 目ヨコ	外面調整（ハケメ） タテ	外面調整（ハケメ） 無し	底部調整 板オサエ	底部調整 ケズリ	透孔配置 2・3	透孔配置 2・4	透孔配置 2・3・4	最下段突帯 起	最下段突帯 A	最下段突帯 B
中期後半	舞塚１号	方円	39		■	45～45										■		
	開田10号	方円？	？		■	45？			■					■				■
後期	物集女車塚	方円	45		■	60			■							■		■
	塚穴	方円	38		■	50～57			■							■		■
	中ノ段	円？	？			45			■							■		■

註）古墳の形態は、「方円」が前方後円墳、「円立」が円立其式古墳、「円」が円墳、「方」が方墳をそれぞれ表す。
円筒埴輪の構成は、「(○条突帯△段構成」を「(○-△」と表示。
外面調整、「静ヨコ」は静止ヨコハケ、「目ヨコ」は目抜ヨコハケ、「タテ」はタテハケのみを表す。
透孔配置は、透孔の認められる段数の組み合わせを表す
突帯は、「最」が透上最を先に突帯の形状に成形し貼り付けたもの、「A」・「B」はそれぞれ「断続ナデ技法」の「A」・「B」（鐘方・中島1992）を表す。
濃い網掛けはそれが確認されるもの、薄い網掛けはその可能性の高いもの。

は、4条突帯5段構成と3条突帯4段構成の円筒埴輪が並立する状況が認められた。古墳時代中期末には当地域においても外面調整に静止ヨコハケを施さずタテハケのみの円筒埴輪が認められ、それら一群が後期に系譜を有して生産されていた可能性ももちろん想定される。

しかしながら、それらの形態と製作技術を比較してみると、同じ4条突帯5段構成のものでも透孔配置や底部の調整などに差異が認められる（表5）。つまり、中期のものは下から2段目と4段目のみに互い違いに透孔を配置するのに対し、後期のものは2段目、3段目、4段目にそれぞれ互い違いに透孔を配置するようになるのである。また、中期後半において底部調整の施されたことを確認できる円筒埴輪は認められないものの、後期になると外面に板オサエあるいは内面にケズリが施されるといった特徴的な製作技術が認められる。

さらに、物集女車塚古墳においては最下段突帯に「断続ナデ技法B」のものが認められるほか、尾張地域の円筒埴輪の特徴を備えた可能性の想定されるものもあり（辻川2006・東影2006）、当地域内において特徴的な様相を示している。

以上のように当地域においては、古墳時代中期から後期にかけて埴輪生産が継続的におこなわれた状況を読み取ることは難しく、埴輪生産組織が刷新されることによって埴輪の規格の統一と技術的な変革がおこったものと考えられるのである[8]。

前項において検討したように、南山城地域において中期後半に認められる円筒埴輪は、古墳の形態・規模にあわせて規格が異なり、6条突帯7段構成から2条突帯3段構成まで様々なものが認められた。しかしながら、後期においてはいずれも4条突帯5段構成のものに統一され、古墳の形態・規模が円筒埴輪の規格に反映されなくなったといえる。

後期の円筒埴輪の製作技術について見てみると、他地域と同様に中期にはみられなかった底部調整の板オサエが認められるようになる（表6）。ただし、当地域においては底部調整の施されないものも同時に認められる。こうした底部調整の有無は、その他の特徴の差異とも相関している。つまり、底部調整の認められるものは透孔が2段目と4段目に互い違いに施され器高約50cmに、一方底部調整の施されないものは透孔が2段目、3段目、4段目の各段に互い違いに施され器高約60cmになる。このように、南山城地域においては系譜の異なると考えられる製作者集団の存在が想定され、それぞれが異なる古墳に埴輪を供給していたと考えられるのである。

中期から後期への埴輪生産の継続の有無という点について見てみると、底部調整の出現という技術的な変革がある。一方、前述したように当地域においては底部調整の認められない一群も存在し、そうした一群が中期の製作者集団の系譜を有する可能性も

表6　南山城地域における円筒埴輪の特徴

	古墳・遺跡名	形態	規模	円筒構成 2-3	3-4	4-5	6-7	器高(cm)	外面調整(ハケメ) 静ヨコ	目ヨコ	タテ	底部調整 無し	板ナデ	透孔配置 2・3	2・4	2・3・4	突帯 縦	A	B
中期後半	上人ケ平5号	帆立	26					60～70	■									■	
	上人ケ平8号	方	13					60？	■									■	
	上人ケ平14号	方	7.5					50	■									■	
	赤塚	帆立	32					45	■									■	
	西山塚	円	26	■				35～45										■	
	上大谷9号	方	14					50										■	
	垂上り窯	窯	—					40										■	
後期	五ケ庄二子塚	方円	112					50～60？										■	
	普谷石神1号	方円	40					50										■	
	菟道門ノ前	方円	35					50										■	
	青山1号	方円	28					60										■	
	音乗谷	帆立	22					50～60										■	
	栗隈窯	円	10					50										■	

註）古墳の形態は、「方円」が前方後円墳、「帆立」が帆立貝式古墳、「円」が円墳、「方」が方墳をそれぞれ表す。
円筒埴輪の構成は、「□条突帯△段構成」を「□-△」と表示。
外面調整、「静ヨコ」は静止ヨコハケ、「目ヨコ」は回転ヨコハケ、「タテ」はタテハケのみを表す。
透孔配置は、透孔の認められる段数の組み合わせを表す。
突帯は、「縦」が粘土紐を先に突帯の形状に成形し貼り付けたもの、「A」・「B」はそれぞれ「断続ナデ技法」の「A」・「B」（緒方・中島1992）を表す。
濃い網掛けはそれが確認されるもの、薄い網掛けはその可能性の高いもの。

考えられる。ただし、突帯数や器形、突帯間隔などの規格、突帯の貼り付け方などの製作技術の比較からは積極的な共通性が認められないことから、やはり後期における埴輪生産の変革の可能性を考えることが妥当といえよう。

こうした埴輪生産の変革の背景には、当地域における中期から後期への首長系譜の変動が関連したものと想定される。当地域においては古墳時代中期に久津川古墳群が一大古墳群として活況を呈するが、中期後半には終焉を迎える。代わって古墳時代後期に当地域の首長墳として築造されるのが、宇治に所在する五ヶ庄二子塚古墳である。五ヶ庄二子塚古墳築造以降においては、木津川流域を中心とした地域に前方後円墳が分立する状況が認められる（荒川編1992、鐘方1993、吹田ほか編1998）。

久津川古墳群以南の木津川流域では中期に大型の古墳の築造があまり活発におこなわれず、そのため埴輪の生産自体も木津の上人ケ平窯をのぞいてほとんどおこなわれていなかったものと考えられる。上人ケ平窯も埴輪の生産は中期後半にほぼ終焉したようであり、このため当地域においても中期から後期にかけての埴輪生産の継続を積極的に想定することは難しいといえる。

以上、3地域における古墳時代中期後半以降の埴輪生産のあり方を検討してきたが、共通する特徴として後期初頭に埴輪生産の変革がおこなわれた可能性の高いことが指摘できる。こうした変革は、単に従来の製作者集団が新たな技術を導入したというだけでは説明付けられないものと考える。つまり、これらの地域においては、後期になって新たに製作者集団を導入あるいは編成することで埴輪生産がおこなわれたと考えられるのである。こうした背景を考えるⅠで、本稿において検討したいずれの地域においても古墳時代後期初頭に首長系譜の変動が認められることは重要といえる。埴輪生産の変革には首長系譜の変動、つまり政治的動向が密接に関わっていると考えられるのである。

いわゆるⅤ群といわれる円筒埴輪は古墳時代中期末、TK23・47型式期に出現したと考えられており、その背景には埴輪生産組織の再編成が想定されている（高橋1994）。そして生産組織の再編成は後期初頭、MT15型式期に完成するといわれる（藤井2003）。もちろん中期末とみられるⅤ群の出現の背景にそうした生産組織の重要な転換があったことは間違いなく、中期から後期にかけて埴輪生産が連続しておこなわれていた地域においては継続的な変質が認められる可能性がある[8]。ただし、埴輪生産の変革がむしろ後期初頭に大きな画期を迎える地域があることは、本稿において明らかにしたとおりである。その実態としては、製作技術の革新のみならず製作者集団そのものも刷新されたことが想定される。埴輪生産の変革を技術的な様相のみならず、地域の古墳の動向と併せて考えることによってその実態をより明らかにできたと考える。

4　おわりに

本稿においては、古墳時代中期から後期にかけての埴輪生産の変革について、円筒埴輪の規格と製作技術を中心としながら検討をおこなった。その結果、古墳時代後期に大きな画期が認められること、そしてその背景には政治的動向が密接に関連している可能性を指摘した。本稿において検討の対象とした地域では、古墳時代後期においても埴輪製作者は従来と変わらず首長墓と密接に関わっていたといえるのではなかろうか。

ところで、本稿において検討の対象とした各地域では古墳時代中期の円筒埴輪の最小規格として3条突帯4段構成が採用されていたのであるが[9]、後期には一元的な円筒埴輪の4条突帯5段構成化が認められた。後期にかけて埴輪生産が簡略化していく中で、突帯数の減少と器高の縮小化を推し進めれば、3条突帯4段構成の円筒埴輪に統一することが合理的であったはずである。しかし、これらの地域においては円筒埴輪の規格に関して、最小規格のものの器高の大型化と突帯数の増加という変化が認められる。その結果、従来であれば3条突帯4段構成の円筒埴輪の供給がおこなわれたであろう階層の古墳にも、4条突帯5段構成のものが供給されるようにな

ったのである。

一方、本稿の対象とした地域の後期の前方後円墳はほとんどが墳丘長40～50mである。墳丘規模からは、おそらく4条突帯5段構成の円筒埴輪が供給される古墳として妥当なものと考えられる（坂1999）。そのため、5条突帯6段構成以上の大型の円筒埴輪を本来供給すべきであった古墳に、規格の簡略化された4条突帯5段構成の円筒埴輪が供給されたわけではないといえる[37]。

また、埴輪生産という側面から見た場合、同一規格の円筒埴輪を一括して大量生産することによる生産の効率化、いわゆる一元的な生産・供給がおこなわれることによる規格の統一化がなされたとも想定される。しかしながら、各古墳の円筒埴輪の特徴は個々に多様な様相を示すことから、そのような一元的な生産がおこなわれたと想定することは難しい。一元的かつ効率的な生産をおこなうのであれば、先にも述べたように3条突帯4段構成に統一することが合理的だったはずである。

つまり、円筒埴輪の4条突帯5段構成化という規格の統一化現象は、埴輪製作者が合理的な生産を指向することによって生み出されたのではないと考えられる。古墳時代後期にかけて円筒埴輪製作が技術的な簡略化を進行させる中で、突帯数と器高といった規格に関しては簡略化という視点では説明付けられないのである。

それでは、大型の前方後円墳から小型の円墳にまで揃って4条突帯5段構成の円筒埴輪が採用されるという現象には、どのような背景が想定されるのであろうか。本稿で対象とした各地域では、古墳時代後期初頭に製作者集団の刷新を伴うような埴輪生産の変革が想定された。そして、それらの地域においては首長系譜の変動も後期初頭に認められるのである。前項において指摘したように、埴輪生産の変革と首長系譜の変動が同時に認められることから、両者は密接に関わっていたとみられる。そのため、埴輪生産の変革と同時にもたらされた4条突帯5段構成という円筒埴輪の規格の統一化もそれらと相関する現象と考えられる。つまり、規格の統一化の背景には古墳時代後期初頭の政治的変動（都出1988）が密接に関連していたと想定されるのである。

本稿において対象とした各地域の円筒埴輪の特徴は同一地域内でも古墳ごとに異なった状況を示す傾向にあり、地域内に複数の系譜の製作者集団が存在した可能性は高い。これら異なる系譜の製作者集団、さらには地域を越えた共通する現象として、円筒埴輪の4条突帯5段構成化は認められるのである。今回検討の対象とした3地域はいずれも淀川流域周辺[38]に位置することから、本稿において指摘した規格の統一化にみられる埴輪生産の変革は淀川流域周辺という比較的広域な範囲に認められる地域的特色と考えられる[39]。

古墳時代後期において、円筒埴輪の最下段突帯に「断続ナデ技法B」の認められる一群と石見型埴輪の分布の傾向から、その背景に政治的な影響を想定する考えがある（鐘方・中島・根上1995、鐘方2003）。確かにそれらの分布はある程度の地理的な傾向を示すものの、「断続ナデ技法B」の認められる円筒埴輪は最下段突帯に「断続ナデ技法A」のもちいられる円筒埴輪とそれぞれ同一地域内のみならず同一古墳においてさえ共存する。また、今回検討した各地域において明らかとなったように、地域内にそれぞれ異なる特徴を有する円筒埴輪が存在している。こうした状況は、古墳時代後期の近畿地方において一般的なものであった可能性が高い（和田2005）。そのため、埴輪の地域的傾向の一部のみをもって地域の政治的動向と結びつけて考えることには慎重にならなければならない。むしろ、今回指摘したような円筒埴輪の4条突帯5段構成化といった地域を包括する特徴こそが、その背景にある各地域の政治的動向を反映したものと考えられるのである。

今回分析の対象とした淀川流域周辺の諸地域においては、古墳時代後期初頭に同様な埴輪生産の変革がなされている可能性を指摘した。こうした埴輪生産の変革は首長系譜の変動にともなっておこなわれた可能性が高く、古墳時代後期においても依然埴輪製作者集団は首長層によって掌握されるような関係にあったことが想定される。本稿における検討によ

って、古墳時代中期から後期にかけての埴輪生産の実態を一層明瞭にできたのではないかと考える。

一方、他の地域における埴輪生産の変革の様相と、それら埴輪生産の変革の発信源がどこであったかといった点に関しては本稿においては検討できていない。また、今回は円筒埴輪を検討の対象としたが、併せて形象埴輪の検討もおこなっていかなければならないと考える。形象埴輪を含めて検討することによって、より実体的な埴輪生産組織像を明らかにできるであろう。いわゆる畿内地域の中において今回検討の対象としなかった地域では、本稿で示した動向とは異なる様相が認められる可能性もある[54]。古墳時代後期におこなわれた埴輪生産の変革の様相を詳細に検討していくことを今後の課題としたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、都出比呂志先生、福永伸哉先生、高橋照彦先生には大変熱心なご指導を賜りました。寺前直人氏をはじめとする大阪大学考古学研究室の諸氏には様々なご助言をいただきました。

また、以下の諸氏・諸機関には様々なご教示をいただくとともに、資料調査に際してご協力をいただきました。記して謝意を表します。

荒川史、梅本康広、岡野慶隆、小泉裕司、高橋克壽、田村美沙、西本和哉、服部聡志、山本輝雄、和田一之輔、宇治市教育委員会、川西市教育委員会、城陽市教育委員会、豊中市教育委員会、長岡京市教育委員会、向日市教育委員会

注

(1)本稿においては山辺昭三による陶邑窯の編年をもちいる（田辺1966）。古墳時代中期をTK23・47型式期までとし、後期をMT15型式期からとする。

(2)川西は、円筒埴輪の外面に突帯を貼り付ける前におこなわれた調整を「1次調整」、突帯を貼り付けた後におこなわれた調整を「2次調整」とそれぞれ定義している（川西1978）。

(3)藤井によると、川西が指摘したようなV群の円筒埴輪における乾燥工程の省略は認められず、むしろ粘土に水分を多く含んだものをもちいたことによって底部調整の必要性が生じたという（藤井2003）。

(4)和山が指摘したように、従来一般的とされてきた「拠点的生産」は近畿地方においても特定の地域にのみ成立する概念である可能性が高い（和田2006）。ただし、「個別的生産」とは各地域内における状況を表したものであり、例えば近畿地方を総体的に見た場合には地域を越えて製作技術の共通性などが認められることから、必ずしも個別的なわけではない。地域的な研究の積み重ねに基づき、それら地域の枠組みを越えた検討をおこなうことでより具体的な生産体制・生産組織像を復元できるものと考えるが、こうした点については今後の課題としたい。

(5)なお、当論資料については別稿にて資料化したものを提示し、その詳細を明らかにする（東影2008）。

(6)ただし、凹線自体は認められないものの、突帯間隔あるいは器高は当地域内において共通している。このことから、突帯数と器高を揃えるために地域内である程度の規格が共有されていたものと考えられる。よって、現在のところ痕跡としては残されていないためその実態を明瞭にし得ないものの、基準となるような何らかの「突帯設定」がおこなわれていた可能性もある。

(7)すでに指摘されているように、板オサエとして使用された工具は一般的に須恵器にタタキを施す際にもちいられるものであり、当地域においては埴輪と須恵器の生産が関連していた可能性がある（和田2005、清家2005）。

(8)もちろん従来の埴輪生産に新来の技術を導入することによる、生産組織の内的な変質による円筒埴輪の変化の可能性も想定しなければならないが、ただ当地域における技術的・形態的な変質はそうした想定では説明づけられないものと考えている。

(9)本稿においては対象としなかったものの、中期から後期にかけて大量の埴輪が供給された大阪府古市古墳群などでは継続的な変質が認められよう。

(10)南山城地域の西山塚古墳においては2条突帯3段構成の円筒埴輪が認められる。ただし、3条突帯4段構成のものも採用されていることから、古墳の形態・規模といった階層を反映していたのは本来3条突帯4段構成のものであったと考えられる（鐘方1999）。

(11)円筒埴輪の規格に関しては突帯の数そのものが古墳時代全般を通じて必ずしも絶対的な基準となるわけ

ではなく、時期ごとに各地域における相対的な基準であった可能性が高い。

(12)淀川の支流である桂川、宇治川、木津川の各流域を含めて淀川流域と称する。また、淀川の支流ではないものの猪名川流域も淀川に近接していることから、本稿では一括して淀川流域周辺とした。

(13)淀川流域周辺において認められた後期の規格の統一化には、円筒埴輪の突帯数によって古墳の階層を反映するという中期までの秩序の消失を意味しているものと想定される。後期におけるこのような地域的特徴は、埴輪生産のあり方のみならず、墳輪の消滅過程といった地域差とも関連している可能性がある。そうした点については本稿で検討することができなかったため、今後の課題としたい。

(14)今回、分析の対象とし得なかったものの河内地域や大和地域、今城塚古墳が所在する摂津三島地域などでは、古墳時代後期においても中期と同様に円筒埴輪の器高と突帯数に古墳の階層差が反映されている可能性が高い（笠井・吉田1992、坂1999）。このような地域差は、埴輪製作者集団のあり方とその地域の政治的動向が密接に関わって形成されたと想定される。また、各地域内においては個別的な生産（和田2005）がおこなわれつつもそこにはある一定の秩序が認められるのであり、このような在り方が古墳時代後期の埴輪生産の特質である可能性は高いが、こうした点については古墳時代後期の埴輪生産の総体的な分析とともに今後の課題としたい。

参考文献

赤塚次郎　1991「屈折型埴輪について」『池ド古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第24集、愛知県埋蔵文化財センター

荒川　史編　1992『五ヶ山二子塚古墳発掘調査報告』宇治市文化財調査報告第３冊、宇治市教育委員会

荒川　史　1999「二子塚古墳」『前波多―歴史と文化―』、宇治市歴史資料館

梅本康広　1994「桂川流域の埴輪編年と地域性」『都城』6　平成５年度向日市埋蔵文化財センター年報、向日市埋蔵文化財センター

梅本康広　2003「山城の円筒埴輪編年試観」『埴輪論叢』第５号、埴輪検討会

岡野慶隆・寺前直人・福永伸哉編　2006『川西市勝福寺古墳発掘調査報告書』、川西市教育委員会

鐘方正樹　1993「久津川古墳群研究の検討課題」『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念　考古学論叢』、関西大学

鐘方正樹　1997「中期古墳の円筒埴輪」『史跡大安寺旧境内Ⅰ』奈良市埋蔵文化財調査研究報告第１冊、奈良市教育委員会

鐘方正樹　1999「２条突帯の円筒埴輪」『埴輪論叢』第１号、埴輪検討会

鐘方正樹　2003「円筒埴輪の地域性と工人の動向」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析』第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会

鐘方正樹・中尾和彦　1992「菅原東遺跡埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』1991、奈良市教育委員会

鐘方正樹・中尾和彦・根上直子　1995「奈良市秋篠町奈良少年院出土埴輪の研究（上）・（下）」『古代文化』第47巻第５号・第６号、古代学協会

笠井敏光・吉田珠巳　1992「古市古墳群の埴輪の規格性」『古代文化』第44巻第９号、古代学協会

川西宏幸　1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２号、日本考古学会

吹田直子ほか編　1998『蔵進門ノ前古墳・菟道遺跡発掘調査報告書』宇治市文化財調査報告第５冊、宇治市教育委員会

清家　章　2001「猪名川左岸域における小古墳の意義」『待兼山遺跡』Ⅲ、大阪大学埋蔵文化財調査委員会

清家　章　2005「猪名川左岸域の円筒埴輪と首長系譜の変動」『海南史学』第43号、高知海南史学会

高橋克壽　1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第２号、考古学研究会

高橋克壽　2005「埴輪の成立と展開」『鏡内の巨大古墳とその時代』季刊考古学・別冊14、雄山閣

田上雅則　1987「板塚古墳群の円筒埴輪」『摂津豊中大塚古墳』豊中市文化財調査報告第20集、豊中市教育委員会

田辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』、平安学園考古学クラブ

辻川哲朗　1999「円筒埴輪の突帯設定技法の復元」『埴輪論叢』第１号、埴輪検討会

辻川哲朗　2003「突帯―突帯間隔設定技法を中心として―」『埴輪―円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析―』、第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会

辻川哲朗　2006「近畿北半部における須恵器系埴輪」『考

古学ジャーナル』No.541、ニューサイエンス社
都出比呂志　1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』史学篇第22号、大阪大学文学部
寺前直人・福永伸哉編　2007『勝福寺古墳の研究』大阪大学考古学研究室報告第４冊、大阪大学文学研究科考古学研究室
坂　靖　1988「埴輪の規格性」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズⅣ、同志社大学考古学シリーズ刊行会
坂　靖　1999｜奈良県の円筒埴輪｜『橿原考古学研究所論集』第11、吉川弘文館
東影　悠　2006「近畿地方における尾張型埴輪の様相」『川西市勝福寺古墳発掘調査報告』、川西市教育委員会
東影　悠　2008「尾張系埴輪の製作技術とその拡散」『橿原考古学研究所論集』第15（予定）
福永伸哉　2004「畿内北部地域における前方後円墳の展開と消滅過程」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』平成13～15年度科学研究費補助金基盤研究（B）（1）研究成果報告書、大阪大学大学院文学研究科
藤井幸司　2003「円筒埴輪製作技術の復元的研究―窯業焼成導入以降を中心に―」『埴輪―円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析―』、第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会
三辻利一・東影悠　2007「勝福寺古墳出土埴輪の蛍光X線分析と埴輪供給の検討」『勝福寺古墳の研究』大阪大学考古学研究室報告第４冊、大阪大学文学研究科考古学研究室
山本輝雄　1996「乙訓における古墳の出現」『長岡京市史』本文編１、長岡京市
和田　一之輔　2005「摂津猿名川流域における古墳時代後期の埴輪供給関係」『待兼山考古学論集―都出比呂志先生退任記念―』、大阪大学考古学研究室

遺跡文献

・兵庫県
勝福寺古墳：岡野・寺前・福永編　2006前掲／寺前・福永編　2007前掲
園田大塚山古墳：岡田務　1987『尼崎市中ノ田遺跡Ⅱ』尼崎市文化財調査報告第18集、尼崎市教育委員会
・大阪府
御獅子塚古墳：豊中市教育委員会編　1990『御獅子塚古墳』、豊中市教育委員会／田上1987前掲
北天平塚古墳：田上　1987前掲／福田正俊　1993「桜塚古墳群第４次調査の概要」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1992年度、豊中市教育委員会
新免古墳群：浅岡俊夫編　1993『豊中市新免古墳群第３号墳―新免遺跡第38次調査―』、六甲山麓遺跡調査会／柳本照男　2005「新免古墳群」『新修豊中市史』第４巻考古、豊中市
利倉南古墳：柳本照男　2005「利倉南古墳群」『新修豊中市史』第４巻考古、豊中市
穂積古墳：和田　2005前掲／柳本照男　2005「穂積古墳」『新修豊中市史』第４巻考古、豊中市
待兼山５号墳：本報告書／清家章編　2001『待兼山遺跡』Ⅲ、大阪大学埋蔵文化財調査委員会
待兼山４号墳：福永伸哉編　1988『待兼山遺跡』Ⅱ、大阪大学埋蔵文化財調査委員会
南天平塚古墳：山上　1987前掲／柳本照男　2005「南天平塚古墳」『新修豊中市史』第４巻考古、豊中市
・京都府
青谷石神１号墳：梶本敏三　1986「青谷石神古墳群について」『京都府埋蔵文化財情報』第21冊、京都府埋蔵文化財調査研究センター
赤塚古墳：近藤義行　1999「赤塚古墳」『城陽市史』第３巻、城陽市役所
井ノ内車塚古墳：清家章編　2000『井ノ内車塚古墳第３次調査概要』、長岡京市文化財調査報告書Ⅰ第41冊、長岡京市教育委員会
音乗谷古墳：高橋克壽編　2005『奈良山発掘調査報告Ⅰ―右のカラト古墳・音乗谷古墳の調査―』、奈良文化財研究所学報第72冊、奈良文化財研究所
園田10号墳：中島皆夫　2000「右京第600次（7ANKYD-2地区）調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成10年度、長岡京市埋蔵文化財センター
青山１号墳：高橋美久二　1993「城陽市青山１号墳の埴輪（１）」『山城郷土資料館報』11、山城郷土資料館／久保哲正　1995「城陽市青山古墳の埴輪（２）」『山城郷土資料館報』13、山城郷土資料館
上大谷９号墳：小泉裕司　1999「上大谷古墳群」『城陽市史』第３巻、城陽市役所
五ヶ庄二子塚古墳：杉本宏ほか　1989『五ヶ庄二子塚古墳昭和63年度発掘調査概報　宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第13集、宇治市教育委員会／荒川史編　1992前掲

上人ケ平古墳群：平良泰久・辻本和美・土橋誠編　1991『京都府遺跡調査報告書』第15冊、京都府埋蔵文化財調査研究センター／石井清司・福島孝行　2007「上人ケ平5号墳」『京都府遺跡調査概報』第124冊、京都府埋蔵文化財調査研究センター

塚本古墳：木村泰彦編　1984「長岡京跡右京第106次調査概要（7ANKHT地区）」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第1集、長岡京市埋蔵文化財センター／木村泰彦　1985「古京第173次（7ANKHT-3地区）調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和59年度、長岡京市埋蔵文化財センター

苑遺門ノ前古墳：吹山直子ほか編　1998前掲

中ノ段古墳：中塚陽太郎　1980「長岡京跡第7909次（7ANBNK地区）立合調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第6集、向日市教育委員会

西小路古墳・南小路古墳：秋山浩三　1989「長岡京跡左京第198次（7ANFMZ-3地区）～左京三条一坊四町、西小路遺跡、南小路古墳～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第27集、向日市教育委員会

西華上り窯跡：浜中邦弘編　1995『西華上り遺跡発掘調査概報』宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第33集、宇治市教育委員会

西山塚古墳：伊賀高弘　1992「西山塚古墳とその周辺地区」『京都府遺跡調査概報』第51冊、京都府埋蔵文化財調査研究センター／石井清司・伊賀高弘　1995「西山塚古墳」『京都府遺跡調査概報』第56冊、京都府埋蔵文化財調査研究センター

舞塚1号墳：山口博　1984「長岡京右京第83・105次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第9冊、京都府埋蔵文化財調査研究センター／小田桐淳・近沢豊明　1984「第83093次（7ANIMK地区）立会調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和58年度、長岡京市埋蔵文化財センター

丸藪古墳：原秀樹　1990「右京第307次（7ANMMB-4地区）調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度、長岡京市埋蔵文化財センター

南山117号墳：吹田直子　1997「木幡古墳群発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第39集、宇治市教育委員会

物集女車塚古墳：秋山浩三・山中章編　1988『物集女車塚』向日市埋蔵文化財調査報告書第23集、向日市教育委員会／中塚良・樽本康広　2003「物集女車塚周辺遺跡第8次（7AMAMO-1地区）発掘調査報告」『長岡京跡・物集女車塚周辺遺跡』向日市埋蔵文化財調査報告書第61集、向日市埋蔵文化財センター

薬師堂古墳：中島正編　2004『山城町内遺跡発掘調査概報』XII　山城町埋蔵文化財調査報告書第32集、山城町教育委員会

山田桜谷2号墳：丸川義広・上村和直　1988「山田桜谷古墳群」『京都市埋蔵文化財調査概要』、昭和60年度、京都市埋蔵文化財研究所

山畑1号墳：中島陽太郎　1980「長岡京跡第7909次（7ANBNK地区）立合調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第6集、向日市教育委員会

図版出典

図59　筆者作成
図60　各報告書より再トレース
図61　各報告書より再トレース
図62　筆者作成
図63　各報告書より再トレース
図64　各報告書より再トレース
図65　筆者作成
図66　各報告書より再トレース
図67　各報告書より再トレース
表4　筆者作成
表5　筆者作成
表6　筆者作成

図　　版

1　古墳全景1（東から）

2　SK57土層（南から）

3　火葬灰集積土坑（SK31）検出状況（西から）

4　SK59土層（南東から）

5　近世の桶形木棺墓（SK60）

図版2

1　調査区全景1（調査前）

2　調査風景1（整備前の厩大坂から）

3　調査風景2（北から）

4　北調査区全景（南から）

5　北調査区西側土層（北半）

6　北調査区西側土層（南半）

7　周溝範囲が地表表示された修景工事後の現地（南から）

8　現地に設置された案内板と活用事業の様子

1　古墳全景 2（北西から）

2　古墳全景 3（東から）

図版 4

1　古墳周溝NE区（西から）

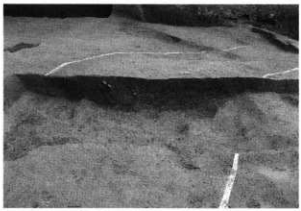
2　古墳周溝SE区１（南西から）

3　古墳周溝SE区２（南西から）

4　古墳周溝NW区１（東から）

5　古墳周溝NW区２（北東から）

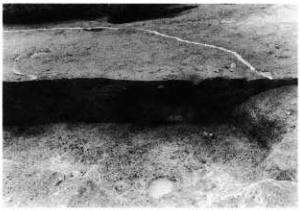
6　古墳周溝SW区（北西から）



1　旧1トレンチ西側土層

2　旧2トレンチ南側土層

3　旧3トレンチ北側土層



4　旧4トレンチ西側土層

5　古墳周溝NW区墳輪出土状況（北東から）

6　古墳周溝SE区墳輪出土状況（北東から）

図版6

1　建物形（11）・馬形埴輪1（4）出土状況（NW区）

2　円筒埴輪（29）出土状況（SE区）

4　SE区における須恵器坏身(63)出土状況

3　馬形埴輪2（6）出土状況

5　NE区における須恵器蓋(73)出土状況